

樵谷惟僊と塩田和尚の史料集成と注釈

館 隆 志

はじめに

本論は、鎌倉中期から後期に活躍した信州塩田（長野県上田市別所）の樵谷惟僊と、同じく信州塩田で鎌倉中期に活躍した塩田和尚に関する史料を収集し、注釈を加えて研究者への便宜を図ることを目的とするものである。

樵谷惟僊は、鎌倉中期に入宋して天童山の別山祖智（一一九三～一二六〇）の法を嗣いで帰朝し、信州塩田の崇福山安楽寺を開山した僧として知られている。また、塩田和尚は、鎌倉中期に入宋し、渡来僧の蘭溪道隆（一一二二～一二七八）が来朝する際に同船にて帰朝し、その後も道隆と交流をもったことが道隆関係史料によつて知られている。この塩田和尚も信州で活躍した僧であったため、塩田とは信州塩田の地名に因んだ呼称と想定される。そして、入宋時期がともに鎌倉中期であり、信州塩田という活躍場所の一致、さらに樵谷惟僊も蘭溪道隆との交流があつたことから、樵谷惟僊と塩田和尚は別々の人物ではなく同一人物であると見る見解が玉村竹二氏によつて出されたのである。

その後、この玉村説（同一人物説）を否定する見解は一度だけあつたものの、基本的にはそれを肯定し踏

襲する形で研究が積み重ねられ、この二僧を同一人物とする見解は現在の通説となっている。この研究史については、拙稿「樵谷惟僊と塩田和尚に関する考察―信州塩田安楽寺の開山をめぐる―」（『駒澤大学禅研究所年報』二八、二〇一六年予定）にてまとめる通りである。

樵谷惟僊と塩田和尚は、鎌倉中期の入宋僧ではあるが一般的にはほとんど無名に近いと言ってよいだろう。しかしながら、渡来僧や入宋僧の少ないこの時代では、樵谷惟僊や塩田和尚の動向は、草創期の禅宗の展開を知る上で貴重な情報源であり、その解明は日本禅宗史においては重要な課題として扱われたのである。そして、この課題に関する研究は、日本禅宗史においては恐らくは最も論じられてきた回数が多い研究の一つとなり、玉村説を踏襲した形での研究は今なお積み重ねられ続けているのである。

この玉村説を中心とする同一人物説に疑問をもつに至り、提示された史料を詳細に読み下し、注釈を付して内容を精査した結果、活動年次に明らかな矛盾が見られた。考察の結果として、玉村説を踏まえた上で同一人物説は成り立たないことが判明したのである。この研究経緯については、前掲拙稿に示す通りであるが、この際の史料蒐集と注釈を提示し、その判断を仰ぐものである。

凡例

■本論で紹介する史料は、これまでの樵谷惟僊や塩田和尚に関連する論文に提示されたすべてのものとする。これらの先行研究の中で、新たに史料が提示されたものは以下の通りで、それぞれ『信濃史料』五卷（信濃史料刊行会、一九五四年九二―一〇九頁）は「信濃史」、太田博太郎「樵谷惟僊について」（『信濃』第十四卷第一号、一九六二年、六六―六九頁）は「太田一九六二」、玉村竹二「信濃別所安楽寺開山樵谷惟僊伝についての新見解」（『史学論集 対外関係と政治文

化』吉川弘文館、一九七四年、一三七—一六二頁）は「玉村A」、玉村竹二「信濃別所安楽寺開山樵谷惟僊伝についての私見」（『日本禅宗史論集』上、思文閣出版、一九七六年、五八三—六〇九頁）は「玉村B」、玉村竹二「蘭溪道隆と樵谷惟僊との交友関係の変遷―それを物語る二通の尺牘―」（『山田無文老師喜寿記念 禅学論攷』禅文化研究所、一九七七年、三二七—三四二頁）は「玉村C」、村上博優「塩田方丈樵谷惟僊禅師概考」（財団法人龍洞院保存会、二〇〇〇年）は「概考」、菅原昭英「江南における四川僧と日本僧の出会い（結）」（『宗学研究』第四十二、二〇〇二年、二〇一—二〇六頁）は「菅原二〇〇二」と略称を用いる。

■提示する順番は、研究に登場した順番ではなく、表記や意味内容を踏まえて項目を設け、「塩田和尚関係史料」「樵谷惟僊関係史料」「安楽寺方丈宛」「仙字を有す僧侶」「その他、並びに不明の史料」の順に配した。拙稿「樵谷惟僊と塩田和尚に関する考察」（『駒澤大学禅研究所年報』二八、二〇一六年予定。以下は「館二〇一六」と表記）を参照。

■最初に翻刻を載せ、次に語注を載せた。出典など細かい注については補注として最後に一括し掲載している。なお、注釈においては、花園大学国際禅学研究所所長の野口善敬先生のご指導を賜った。

■書誌情報は、それぞれの語注の冒頭に記した。最初に初出された先行研究を提示し、次いで当該史料を掲載する書籍を紹介する。主立ったものとして、『建長寺史』編年資料編第一巻（大本山建長寺、二〇〇三年）以下は「建長編」、『禅林墨蹟』は「禅墨」、『続禅林墨蹟』は「続禅墨」、『禅林墨蹟拾遺』は「禅墨拾」と略称を用いる。また、影印が掲載されている書籍がある場合にはその書籍名も記した。

■史料名の表記で、手紙は「書状」で統一した。所蔵先については個人所蔵の場合は、「個人所蔵」で統一した。

■使用する漢字は、常用漢字を基本とし、旧字体は新字体に直し、適宜、句読点訓点を付した。

■出典に用いた史料のうち、主立ったものの略称は以下の通り。大正新脩大藏経Ⅱ大正藏、卅統藏経Ⅱ統藏、蘭溪道隆禅師全集Ⅱ蘭溪全、五山文学全集Ⅱ五山全、五山文学新集Ⅱ五山新。

塩田和尚關係史料

「史料一」『蘭溪和尚語錄』卷下「普說」 塩田和尚至引座普說

覺空空覺之妙、妙在「變通」、明了「明之機」、機先鑑徹。空不覺、覺不空、未為「至妙」。了不明、明不了、安足「呈機」。直須「空覺頓亡」、了「明無所」、然後、於「無所有」、垂「手接」人、拽將過來、自不「粘綴」。誠所謂、以「我之覺」而覺「他」、他無「不覺」、以「我之妙」而妙「彼」、彼無「不妙」。彼既妙而、他亦覺、宗旨法幢、何患「不立也」。到「這裏」、更說「甚等覺妙覺」、以為「至極」哉。塩田長老、夙有「靈骨」、安強為「之」。自「大宋」同帰、所「負非」淺。欲「以」浩然之氣「掃」去妖精、令「信心人」知「有」不「佞」之妙。只此不「佞」之妙、非「覺」奚知。若謂「有」覺「有」知、又「匪」不「佞」之妙。所以古人到「此」不「奈」其何。乃云、恁麼也不「得」、不「恁麼」也不「得」、恁麼不「恁麼」、總不「得」。建長与「塩田」各「拋」一「利」、或「百」余衆、或「五」十衆、皆是聚「頭」、要「下」学「佛法」、学「禪学」道。有「道念」者、又被「佛法」禅道四字「障礙」窒塞、不「得」自由。無「道心」人、又如「觸」藩之羊、進不「知」前、退不「知」後、自「牽」自「絆」、掣斷不「行」。有者纔聞「人」拳「揚」此事、却不「審」其端倪、便來張「眉」弩「目」、抗論在「前」、此是此不「是」、彼非彼不「非」、不「決」一「疑」、千疑競起、徒成「鬪」諍、平白風波。末代叢林、斯者極盛。哀哉、自不「達」源而、話「彼源」之淺深矣。可「怜」愍、有來乞「示」其源、又不「知」其源之所在。過「歸」誰歎。上古達道之士、始「發」信心、繼聞「知識」拳「一言」半句、便向「這裏」、咬而復嚼、吐而又吞。至於吞不「得」、吐不「出」、咬不「破」、嚼不「爛」之時、忽然咬「破」舌頭、便知、此味具足。只這具足之味、非「世」所「知」。昔日、永嘉禪師道、若以「知」知「寂」、此非「無緣」知。如「手」執「如意」、非「無」如意手。若以「自」知「知」、亦非「無緣」知。如「手」自「捉」拳、

非_レ是不拳手_一。亦不知知_レ寂、亦不自知知、不_レ可_レ為_レ無知_一。以_レ性了然_一故、不_レ同_レ於木石_一。如_レ手不_レ執_レ物、亦不_レ自作_レ拳、不_レ可_レ為_レ無手_一。無手安然故、不_レ同_レ於兔角_一。後來、寂音尊者云、永嘉止說悟後之病。若拋_レ建長所見、不_レ悟之時、固有_レ多病、既悟之後、焉有_レ病乎。殊不_レ知、永嘉正為_レ後代人說_レ做工夫体究精微之語。自是時人、不_レ根而蹉過。諸人、在此巨福山中、居_レ彼塩田刹内_一者、咸欲_レ究_レ無上妙道_一。且妙道如何究。諸兄弟、若以_レ永嘉之語、坐臥經行_一處、返返復復、推而再思看、是甚麼語話。是与_レ自己_一相應耶、不_レ相應耶。恍然看得透時、永嘉之語俱為_レ剩言_一。雖_レ為_レ剩言_一、欲_レ覓_レ剩言_一而、了不可得。山僧、道德行解孤陋寡聞。若論_レ古時_一列刹相望稱_レ善知識_一者、予不_レ及_レ一。雖_レ不_レ及_レ一、然無_レ愧_レ於今時_一者、不_レ可_レ不_レ拳_一似諸人_一。十余年前、熱火燒_レ心、拋脫不下。一日、得_レ些半合之水_一澆_レ之、熱火稍滅。火稍滅已、便覺_レ四肢其氣通暢。或時要_レ坐、縮_レ足由_レ予、或時要_レ行動_一脚在我。所_レ以_レ伸_レ之縮_レ之、不_レ假_レ他力_一。到此、仁者見_レ之、必謂_レ之仁、智者見_レ之、必謂_レ之智、臨_レ期應用。是以、信_レ手写_レ將去、信_レ口道出来、不_レ涉_レ思惟、只憑_レ這箇。塩田長老、向日、雖_レ在_レ大唐中_一同出同入、然未_レ曾与_レ拳_一此伸縮之語。恐未_レ相信_一時、伊、別有_レ妙處_一。苟無_レ妙處_一、安得_レ信州一境、慕_レ其名_一而稽顙_レ哉。間有_レ執_レ筇荷負遠遠來_レ歸者_一、不_レ知、是為_レ持_レ仏戒_一耶、是為_レ聽_レ說經_一耶、是為_レ求_レ玄妙_一耶。若為_レ求_レ玄妙_一而來、喚_レ何物_一為_レ玄妙_一。若為_レ聽_レ說經_一而來、吾祖道、不_レ立文字、直指人心、見性成仏。何說經_一之有。若為_レ持_レ仏戒_一而來、戒即是心、心即是戒。心無_レ形相、寧有_レ戒而可_レ持。信州一境内、或僧或俗之中、有_レ具_レ正信決烈之志者_一、聞_レ拳_一是事、忽然領_レ在言前_一、撒_レ手還_レ家、笑示_レ眷屬。如_レ龐居士道_一有_レ男不_レ用_レ婚、有_レ女不_レ用_レ嫁。大家、團聚_レ頭、共說_レ無_レ生話_一。到此田地_一了、便知、不_レ殺生中、有_レ弗_レ露_レ鋒鋌_一能斷_レ人命根_一底一著子_一。不_レ偷盜中、驅_レ耕夫之牛、竊_レ飢人之食。不_レ邪姪中、終日混_レ在姪坊_一、何妨_レ放恣_一。不_レ妄語中、指_レ槐罵_レ柳、以_レ実為_レ虚。不_レ沽酒中、糟粕雖_レ無、

遼天索_レ衲。不說四衆過中、訐露他非、更不遮掩、令_レ傍觀者趣向無_レ門。不自贊毀他中、常自点胸、果無_レ人及。不慳貪中、兩手把定、爭肯付_レ伊。鬧市叢中、奪_レ貧人物。不嗔恚中、仏来也打、祖来也打。生鉄面皮、無_レ人近傍。不謗_レ三寶中、不著_レ仏求、不著_レ法求、不著_レ僧求。聞_レ仏一字、嗽_レ口三年。明_レ得這箇道理、便知、法身者是衆生之性、報身者是衆生之智、応身者是衆生之行。性智行彰、無_レ往不_レ利。如是拏唱、人知_レ是、持_レ自己之戒、說_レ自己之經。若要_レ法界衆生平等利益、須是別施_レ手段始得。且手段、如何施。只如_レ吾宗旨有_レ玄中之玄、妙中之妙、未_レ說持以為_レ人。畢竟如何吐露。莫_レ是提起話頭、回光返照是玄妙_レ麼。錯。莫_レ是咬_レ定牙関、不_レ起_レ一念是玄妙_レ耶。錯。莫_レ是庭前柏樹子、洞山麻三斤是玄妙_レ耶。錯。莫_レ是離_レ心意識_レ參、絕_レ聖凡路、学是玄妙_レ耶。錯。只此四錯、有_レ口難_レ言。郷談未_レ曉、問_レ取塩田。錯。記得、蒙庵嶽禪師、初領_レ淨衆往持。道過_レ鼓山、承_レ竹庵珪禪師請_レ為_レ衆說法。竹庵引座云、鼓山三十棒、要打_レ新淨衆。大衆、莫_レ是未_レ入_レ門時、合喫_レ此棒_レ麼。咄。莫_レ是已入_レ門時、合喫_レ此棒_レ麼。咄。莫_レ是鼓山盲枷瞎棒、胡打乱打_レ麼。咄。咄。若是我臨濟兒孫、便請、单刀直入。下座。蒙庵便登_レ座云、鼓山三十棒、要打_レ新淨衆。大似_レ話_レ驢得_レ驢、話_レ馬得_レ馬。淨衆、今日到来、要_レ騎便騎、要_レ下便下。而今、突_レ出人前、未_レ免、弄_レ真像_レ飯。拈_レ主杖_レ云、今朝、暫借_レ主杖、与_レ大衆_レ拔本去也。復放云、休休。將謂胡鬚赤、更有_レ赤鬚胡。便下座。

師云、鼓山以_レ杖探_レ水、幾_レ乎没_レ身。蒙庵見_レ義便為、何妨慶快。建長、不_レ能与_レ塩田_レ横_レ挖倒_レ拽、且要_レ正視直行。聞知、瑩巖袈裟角上裹_レ得些子塩田塩、来要_レ使_レ具_レ信心_レ人_レ上識_レ此厚味_レ。沾_レ此味_レ已令_レ伊到_レ大安樂處去。遂顧_レ視大衆_レ云、衆中、沾_レ此味_レ者、固不_レ在_レ言。如未_レ知_レ之、請_レ塩田_レ求_レ此厚味_レ。下座、請_レ塩田和尚_レ為_レ衆拏揚。

「訓」塩田和尚至る、引座の普説。

覚空空覚の妙、妙は変通に在り、明了了明の機、機先に鑑徹す。空にして覚ならず、覚にして空ならずんば、未だ至妙と為さず。了するも明ならず、明なるも了せずんば、安んぞ機を呈するに足らん。直に須らく空覚頓に亡じ、了明するに所無くして、然る後、所有無きに於いて、手を垂れて人を接し、結び將も過ぎ来たりて、自ら粘綴せざるべし。誠に所謂る、「我が覚を以て佗を覚すれば、佗は覺せざる無く、我が妙を以て彼を妙にすれば、彼は妙ならざる無し」なり。彼既に妙にして、佗も亦た覺せば、宗旨の法幢、何ぞ立せざることを患えんや。這裏に到りて、更に甚の等覚妙覺を説いて、以て至極と為さんや。塩田長老、夙に靈骨有り、安んぞ強いて之を為さん。大宋より同に帰れば、負ふ所は浅きに非ず。浩然の氣を以て妖精を掃い去り、信心の人をして不伝の妙有るを知らしめんと欲す。只だ此の不伝の妙は、覺るに非ざれば奚ぞ知らん。若し覺有り知有りと謂わば、又た不伝の妙に匪ず。所以に古人は此に到りて其れを奈何ともせず、乃ち云く、「恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、恁麼不恁麼、総べて得ず」と。建長と塩田と各おの一刹に処り、或いは百余衆、或いは五十衆、皆な是れ頭を聚めて、仏法を學し禪を學し道を學せんと要す。道念有る者は、又た仏法禪道の四字に障礙窒塞せられて自由を得ず。道心無き人は、又た藩に觸るるの羊の、進むに前を知らず、退くに後を知らず、自ら牽き自ら絆ぎ、掣斷して行かざるが如し。有る者は纒かに人の此の事を拳揚するを聞かば、却つて其の端倪を審かにせず、便ち来たりて眉を張り目を弩りて、抗論、前に在り、此れは是なり、此れは是ならず、彼は非なり、彼は非ならずとし、一疑決せずして、千疑競い起り、徒らに鬪諍を成して、平白に風波す。末代の叢林、斯くのごとき者極めて盛んなり。哀しい哉、自ら源に達せずして、彼の源の浅深を語る。怜愍すべし、有るいは来たりて其の源を示さんことを乞うも、又た其の源の所在を知

らず。過は誰に帰するや。上古達道の土、始め信心を發し、繼いで知識の一言半句を拳するを聞き、便ち這裏に向かつて、咬みて復た嚼み、吐きて又た呑む。呑み得ず、吐き出だせず、咬み破けず、嚼み爛げざるの時に至りて、忽然として舌頭を咬破し、便ち知る、此の味の具足せることを。只だこの具足するの味は、世の知る所に非ず。昔日、永嘉禪師道く、「若し知を以て寂を知らば、此れ無縁の知に非ず。手に如意を執るが如し、如意の手無きに非ず。若し自知を以て知らば、亦た無縁の知に非ず。手に自ら拳を捉すが如し、是れ不拳の手に非ず。亦た不知にして寂を知り、亦た不自知にして知るも、無知と為す可からず、性了然たるを以ての故に、木石に同じからず。手に物を執らず、亦た自ら拳を作すが如きも、無手と為すべからず。無手にして安然なるが故に、兎角に同じからず」と。後來、寂音尊者云く、「永嘉は止だ悟後の病いを説くのみ」と。若し建長が所見に抛らば、悟らざるの時、固より多病有るも、既に悟るの後、焉んぞ病い有らざるや。殊に知らず、永嘉は正に後代の人々の為に做工夫の体究精微の語を説くことを。自是より時人、不根にして蹉過す。諸人、此の巨福山中に在り、彼の塩田刹内に居る者、威な無上の妙道を究めんと欲す。且つ妙道は如何んが究めん。諸兄弟、若し永嘉の語を以て、坐臥經行の処に、返返復復し、推して再び思うて看よ、「是れ甚麼の語話ぞ。是れ自己と相い応ずるや、相い応ぜざるや」と。恍然として看得透する時、永嘉の語は俱に剩言と為らん。剩言と為ると雖も、剩言を覺めんと欲するも、了に不可得なり。山僧、道徳行解は孤陋にして寡聞なり。若し古時の列刹相い望むときに善知識と稱する者を論ぜば、予は千が一にも及ばず。一に及ばずと雖も、然も今時に愧づること無き者、諸人に拳似せざるべからず。十余年前、熱火は心を焼いて、抛脱し下す。一日、些かの半台の水を得て之を澆ぐに、熱火稍や滅す。火稍や滅し已わりて、便ち四肢に其の氣通暢することを覺ゆ。或る時は坐せんと要して、足を縮むることも予に由り、或る時は行かんと要して

脚を動かすことも我れに在り。之を伸べ之を縮むる所以は、他の力を仮らず。此に到りて、仁者は之を見て、必ず之を仁と謂い、智者は之を見て、必ず之を智と謂い、期に臨んで応用す。是を以て、手に信せて写し將ち去り、口に信せて道い出だし来たり、思惟に渉らず、只だ這個に憑る。塩田長老、向日、大唐の中に在りて同出同入すと雖も、然も未だ曾て与に此の伸縮の語を拵せず。恐るらくは未だ相い信ぜざる時、伊別に妙処有らん。苟し妙処無くば、安んぞ信州一境、其の名を慕いて稽顙するを得んや。問、筇を執り荷負して遠遠として来帰する者有り、知らず、是れ仏戒を持するが為なるや、是れ説経を聴く為なるや、是れ玄妙を求むる為なるや。若し玄妙を求むる為にして来たらば、何物を喚んで玄妙と為す。若し説経を聴く為にして来たらば、吾が祖道く、「不立文字、直指人心、見性成佛」と。何の説経か之有らん。若し仏戒を持するが為にして来たらば、戒は即ち是れ戒なり。心に形相無ければ、寧んぞ戒として持つべき有らんや。信州一境の内、或いは僧、或いは俗の中に、正信決烈の志を具する者有りて、是の事を拵するを聞き、忽然として言前に領在せば、手を撒して家に還り、笑いて眷属に示せ。龐居士が「男有りて婚するを用いず。女有りて嫁ぐを用いず。大家、団かに頭を聚め、共に無生の話を説く」と道うが如し。此の田地に到り了らば、便ち知らん、不殺生の中に、鋒鋷を露わさずして能く人の命根を断ずる底の一著子有り。不偷盗の中に、耕夫の牛を驅り、飢人の食を竊む。不邪淫の中に、終日、姪坊に混在するも、何ぞ放恣なるを妨げん。不妄語の中に、槐を指して柳を罵り、実を以て虚と為す。不沽酒の中に、糟粕は無しと雖も、遠天に柶を索む。不説四衆過の中に、他の非を評露して更に遮掩せず、傍觀の者をして趣向するに門無からしむ。不自贊毀他の中に、常に自ら点胸し、果たして人の及ぶこと無し。不慳貪の中に、両手にて把定し、争でか肯えて伊に付せん。鬧市叢中に、貧人の物を奪う。不嗔恚の中に、仏来たるも也た打ち、祖来たるも

也た打つ。生鉄きやうてつの面皮めんぴ、人の近傍きやうぼうする無し。不謗ふぼう三宝さんぼうの中、仏に著つきて求めず、法ほふに著つきて求めず、僧そうに著つきて求めず。仏の一字を聞かば、口を嗽くすぐこと三年す。這個しやこの道理どうりを明あらめ得えば、便べんち知らん、法身ほふしんとは是れ衆生しゆじやうの性しやう、報身ほうしんとは是れ衆生の智ち、応身おうしんとは是れ衆生の行ぎやうなることを。性・智・行彰あられて、往ゆくとして利せざる無し。是かくの如ごとく拳唱けんじやうせば、人々、是れを知りて、自己こじの戒けいを持もち、自己こじの経きやうを説とかん。若ごとし法界ほふかいの衆生しゆじやうをば平等びやうどうに利益りやくせんと要ようせば、須すらく是れ別に手段しゆんけんを施せして始めて得よし。且かつ手段しゆんけんは、如何いかんが施せさんさん只ただ、吾わが宗旨しゆじに玄中げんちゆうの玄げん・妙中みやうちゆうの妙みやう有あるが如ごときは、未まだ説持せつぢして以もて人の為ためにせず。畢竟ひつぎやう、如何いかんが吐露とろせん。是れ話頭わとうを提起ていきして回光返照えくわうはんじやうするは是れ玄妙げんみやうなること莫なきや。錯さく。是れ牙関がかんを咬くはして一念いっぴん起おこらざるは是れ玄妙げんみやうなること莫なきや。錯さく。是れ庭前ていぜんの栢樹はくじゆ子し、洞山とうざんの麻三斤まさんぎんは是れ玄妙げんみやうなること莫なきや。錯さく。是れ心意しんい識しを離はれて参まじ、聖凡しやうぼんの路みちを絶ぜつして学がくぶは是れ玄妙げんみやうなること莫なきや。錯さく。只ただ此この四錯ししやくは、口有くちゆうるも言いひ難がたし。郷談きやうだん未まだ曉あきらめざれば、塩田しんぢんに問取もんしゆせよ。錯さく。記得きとくす、蒙庵もうあん嶽がく禪師ぜんじ、初しゆめ淨衆じやうじゆを領りやうして住持ぢゆうぢす。道だうのかた鼓山こさんを過あぎり、竹庵ちやくあん珪けい禪師ぜんじの請しやうを承じやうけて衆しゆの為ために説法せつぽうす。竹庵ちやくあん、引座いんざして云いく、「鼓山こさんが三十棒さんじゆうぼう、新淨衆しんじやうじゆを打うたんこと要ます。大衆だいじゆ、是れ未まだ門もんに入いらざる時とき、合あはに此この棒ぼうを喫くすべきこと莫なきや。咄とつ。是れ已すでに門もんに入りし時とき、合あはに此この棒ぼうを喫くすべきこと莫なきや。咄とつ。是れ鼓山こさんの盲枷瞎棒もうかかつぼう、胡打乱打こだらんだなること莫なきや。咄とつ。若ごとし是れ我が臨濟りんさいの児孫じそんならば、便べんち請しやうう、单刀直入だんたうぢくにならんことを」と。下座あざす。蒙庵もうあん、便べんち座ざに登のぼりて云いく、「鼓山こさんの三十棒さんじゆうぼう、新淨衆しんじやうじゆを打うたんことを要ます。大だいいに驢ろを話かたりて驢ろを得え、馬ばを話かたりて馬ばを得えるに似にたり。淨衆じやうじゆ、今日こんにち、到来たうらいして、騎からんと要ますれば便べんち騎かり、下おりんと要ますれば便べんち下おる。而に今こん前ぜんに突とつ出し、未まだ免めんれず、真まを弄ろうし便べんを像ざうることを」と。主丈しゆぢやうを拈ねじて云いく、「今朝けんぢやう、暫しばく主丈しゆぢやうを借かりて、大衆だいじゆの与よに拔本ばつぽんし去さらん」と。復またた放はなちて云いく、「休やすみね、休やすみね。将おほに謂いえり、胡鬚こしゆしやう赤せきと、更さらに赤鬚せきしゆしやう胡こ有あり」と。便べんち下座あざ

す。

師云く、「鼓山は杖を以て水を探り、身を没するに幾し。蒙庵は義を見て便ち為す、何ぞ妨げん、慶快なることを。建長、塩田の与に横に袈ぎ倒に結くこと能わず、且つ正しく視て直く行かんことを要す。聞知す、瑩巖は袈裟角上に些子の塩田の塩を裏み得て、来たりて信心を具する人をして此の厚味を識らしめんと要す。此の味に沾いて、已に伊をして大安楽の処に到り去らしむ」と。遂に大衆を顧視して云く、「衆中、此の味に沾う者は、固より言に在らず。如し未だ之を知らずんば、塩田に請い此の厚味を求めよ」と。下座し、塩田和尚に請い衆の為に挙揚せしむ。

○『蘭溪和尚語録』二卷は鎌倉中期に南宋で刊行され、鎌倉後期に覆宋五山版として再刊された。本論で用いているものは建長寺所蔵の覆宋五山版『蘭溪和尚語録』である。詳しくは、拙稿『蘭溪和尚語録』解題（『蘭溪全二』を参照されたい。初出「信濃史五・九五〜一〇二」、影印「蘭溪全二・八四b〜八八b」、掲載書籍「大正蔵八〇・七九b〜八〇c」。○蘭溪：臨濟宗大覚派祖の蘭溪道隆（一一二一〜一二七八）のこと「補1」。○塩田和尚全引座普説：「補2」。○塩田和尚：信濃（長野県）塩田の僧「補3」。○塩田：信濃（長野県）の地名「補4」。○引座：他寺の尊宿などが寺に来た際に高座に案内して説法を請うこと。○普説：普く人々に法を説く意。多数の僧衆を一堂に集め、略式で行なう説法。○覺空空覺：空を悟り、空にして悟る。空の道理を徹底し究める。○變通：情況に応じて自由自在に変化・適応してゆくこと。臨機応変なさま。○明了了明：明らかに悟ること。悟りの明らかなこと。本来の自己を徹底して明らかにする。○機先：機前とも。物事の起こらない時。物事が起ころうとする直前。○鑑徹：しつかりと見貫いてしまうこと。○至妙：究極の妙処。この上ない悟りの境地。○呈機：はたらきを示す。自己の全力をはたらき出すこと。○空覺頓亡、了明無所：空も覺もすつかりなくし、了も明も所在がなくなる。悟ったという意識すら捨て切ったこと。○垂手接人：手を垂れて人のためにする。衆生済度すること。○粘綴：ねばりとどまる。滞ること。

○所謂、以我之覺く彼無不明：出典未詳。○宗旨法幢：仏法の旗印。仏法の根本の教えを建立すること。法幢は説法があることを知らせるために立てる。^幡。○等覺：仏の悟り。平等一如の悟り。大乘菩薩の五十二位の中の第五十一位の位。三賢・十聖の上。等正覺。○妙覺：眞の悟り。仏の無上の悟り。菩薩の修行最後の位、菩薩の第五十二位。等覺の上。○至極：極限・極致に達していること。この上ないこと。○靈骨：靈妙な骨相。非凡な姿。すぐれた精神的な修行力の意。○自大宋同帰：蘭溪道隆が寛元四年（南宋淳祐六年、一二四六）に渡来する際に塩田長老が南宋から同船で帰国したことをいう。○浩然之氣：天地の間に充滿している大きく強い氣。これが人間に宿ると何物にも屈しない道德的勇氣となるとされる「補5」。○妖精：怪しい精霊。人を惑わす怪しい化けもの。○信心人：仏の説いた三宝や因果の理法を信じて疑わぬ人。○不伝之妙：仏祖でさえ伝えることができない妙なる境地。○恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼、總不得：「補6」。○建長与塩田各抛一刹、或百余衆、或五十衆：「補7」。○各抛一刹：蘭溪道隆が鎌倉建長寺に住し、塩田和尚が信濃塩田に存した寺院に住していたことを指す。○百余衆：この時、建長寺の修行者が百余人いたことを指す。○五十衆：この時、塩田に存した禅寺に五十余人いたことを指す。○聚頭：多くの修行僧が一カ所に集まること。○道念：道を思う心。仏道を求めようとする気持。○障礙：さまざまに害する。さまざまに上げる。○窒塞：塞がる。詰まる。○道心：悟りを求める心。菩提心。○掣断不行：引きちぎって行けない。動詞の後の不は不可能を表す。○此事：このこと。仏祖の大道。仏法の一大事。○拏揚：取りあげること。取りあげて人に示すこと。○端倪：物事の初めと終わり。事の始終「補8」。○抗論：対抗して屈することなく議論する。○閤諍：戦い争うこと。言い争うこと。○平白：理由なく。わけもなく。○末代：末世。末法の世。○叢林：樹木の繁茂する林。禅宗寺院。禅の修行道場。○怜愍：憐れむ。不憫に思う。○上古達道之士：往古に仏道に達した人。○知識：善知識のこと。正しい師匠。○一言半言：わずかな言葉。一言半辞。片言。隻句。○咬而復嚼：じつくり咬みこなす。文字を詳しく味わって読む。○吐而又吞：吐き出してまた呑み込む。じつくりと消化させる。○忽然：突然に。たちまちに。○咬破舌頭：舌を咬み切る。言葉で表現するのを断ち切る。○具足之味：本来具わっていた味。本具の仏性にたとえる。○永嘉禅師道く故不同於兎角：「補9」。○永嘉禅師：六祖下の永嘉玄覺（六七五〜七一一）のこと

「補10」。○無縁：誰のためというような対象の区別がなく、すべて平等と観すること。絶対の慈悲の境地。○如意：僧の持つ道具の一つ。もともと孫の手として用いた。○自知：自分で知ること。真理を自ら知ること。○捉拳：作拳に同じ。握りこぶしをする。○了然：はつきりとよくわかるさま。○木石：木と石。心のないもの。○無手：手に何も持っていないこと。○安然：安らかで落ち着いているさま。○兎角：兎の角。現実には存在しないものたことえ。○寂音尊者云、永嘉止説悟後之病：「補11」。○寂音尊者：臨済宗黄龍派の覚範慧洪（一〇七一〜一一二八）のこと。「補12」。○悟後之病：悟道した後起こる禅病。○多病：多くの病。ここでは修行中における禅病の類。○殊不知：全く知らぬ。実はすでであった。○做工夫：工夫をなす。修行努力する。○体究：道理を体で会得する。まると究める。○精微：詳しく細かい。緻密なさま。○時人：その時代の人々。○不根：仏法僧を信ずる信根のないこと。○蹉過：すれ違ふ。うっかり見過ごすこと。○無上妙道：この上もない最もすぐれた道。仏道のこと。○坐臥経行：行住坐臥と同じ。坐臥は静止。経行は動作。日常の起居進退。○返返復復：何度も繰り返す。○恍然：うっとりするさま。ここでは精神が統一されて散乱せぬさま。○看得透：奥底まで見透す。見抜く。○剩言：無用の語。余分な言葉。剩語。○不可得：求めても得られないこと。○道德：仏道を修めて身についた徳。○行解：修行と理解。実践と理論。○孤陋寡聞：孤陋はひとりよがりで頑ななこと。寡聞は見聞が狭く浅いこと。卑下謙遜した表現「補13」。○列刹：諸寺院。連なる禅刹。○善知識：人々を仏の道へ誘い導く人。○拳似：話題を提示すること。○十余年前：蘭溪道隆が本師の無明慧性のもとで悟道したときのことか。あるいは、塩田和尚と共に明州（浙江省）の天童山に在ったときのことか。○半合之水：宋元代の一合は約〇・九五デシリットル。○熱火：熱い火。かつかと燃える火。○抛脱不下：投げ捨てられない。抛脱は放棄。抛捨。○四肢：両手と両足。また体のこと。○通暢：よく通ること。とどこおることなく行きわたること。○仁者見之必謂之仁、智者見之必謂之智：仁者はそれを見て必ずそれを仁だといひ、智者はそれを見て必ずそれを智だといひ「補14」。○仁者：憐れみ深い人。儒教の説く仁徳を備えた人。○智者：知恵のすぐれた人。道理に精通した立派な人。○臨機応用：時に応じて適宜に働かせ用いる。○信手：手にまかせて。手当たり次第に。○信口：口にまかせて。言い放題に。○思惟：考える。思量分別する。○向日：先の日。過日。○大唐

中：中国の中で。実際には大宋国であるが、あえて美称として表現する。○同入同出：一緒に入入りする。修行を共にしたことをいう。○伸縮：足を伸ばしたり縮めたりすること。○未相信時：互いに知り合いになる前。○妙処：きわめてすぐれた場所。すばらしい悟りの境地。細かく微妙なものたとえ。○信州：信濃（長野県）の異称。○稽顙：頭を地につけて敬礼する。稽首。○箒：竹の杖「補15」。○荷負：荷物を背負うこと。○遠遠来帰：遙かに遠くからやってくる。○仏戒：仏が制定した戒。『梵網經』に説く大乘菩薩戒。○説経：經典の意味や内容を説いて聞かせること。説教とも。○玄妙：奥深く微妙な道理。○吾祖道、不立文字、直指人心、見性成仏：「補16」。○吾祖：初祖達磨のこと。○不立文字：文字に依らない。真理は文字や言葉によつてではなく、体験を通して心で悟るものであるとする禪の立場。○直指人心見性成仏：人に直接に指し示し、自己の心性を徹見して仏と成らせる。○形相：姿・かたち。○正信：仏法を信じる心。正しい信仰。○決烈：堅固で毅然としたさま。○是事：一切事。いろいろなこと。○領在言前：言葉以前のところであらえる。○撒手：手を即座に放すこと。○眷属：血筋のつながっている者。身内。○如龐居士道、有男不用婚、有女不用嫁、大家团聚頭、共説無生話：「補17」。○龐居士：馬祖下の龐蘊（？〜八〇八）のこと「補18」。○男：龐居士の息子。○女：龐居士の娘、靈照（靈昭）のこと「補19」。○無生話：生滅変化を離れた絶対の真理についての話。仏法の話。○田地：心境。境地。○不殺生：生きものを殺さない。○鋒鋦：刃物の切っ先。相手を追及する激しい気質・気性のたとえ。○命根：いのち。生命。○一著子：困碁などの一手。向上の一句。○不偷盜：盗みをしてない。人のものを盗まない。○驅耕夫牛、奪飢人食：農民の牛を追い払い、飢えた人から食べ物奪い取る。人情に左右されない厳格な接化をあらわす「補20」。○不邪淫：男女の間の品行を正しく守る。不倫な性的行為をしてない。○姪坊：遊郭。遊女屋。○混在：入り交じる。交じりあつて存在する。○放恣：ほしいまま気ままでしまりが無い。○不妄語：うそを言わない。偽りの言葉を口にしない。○指槐罵柳：槐の木を指して柳の木をのしる。あてこすりを言う「補21」。○不沾酒：不酤酒。酒を売つて人々に飲ませない。○糟粕：かす。酒のしぼりかす。○遼天索衲：法外な値段を付ける。遼天は空一面。○不説四衆過：不説過に同じ。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の過失を言ひふらさない。他人の過ちを説かない。○評露：あばき出す。人の秘密を採り挙げてあば

く。○遮掩…さえぎり覆う。○傍観…かたわらで見ること。そばで何もせずに眺めること。○趣向…目的を定めてそれに向かう。○不自贊毀他…自分を誉め他人をけなし誇ることをしない。○点胸…胸を指で突く。自信があるときのしぐさ。○不慳貪…不慳法財に同じ。法施と財施を惜しまない。教えを垂れたり金銭物品を施すことを惜しまない。○両手把定…両手で握り締めて離さない。○鬧市叢中…鬧市叢裏とも。さわがしい市。町中。○仏来也打、祖来也打…仏が来ても打ち、祖師が来ても打つ「補22」。○不嗔恚…不嗔恚に同じ。怒りの心を起こさない。怒り憎しむことをしない。○生鉄面皮…非常に強固な面の皮のたとえ「補23」。○近傍…傍らに近づく。近づき寄り沿う。○不謗三宝…仏法僧の三宝を誇らない。○不著仏求、不著法求、不著僧求…「補24」。○聞仏一字、嗽口三年…「補25」。○法身…仏の三身の一。永遠不滅の真理そのもの。理法としての仏。ここでは人々本具の仏性を指す。○報身…仏の三身の一。因位における無量の願行に酬いて成れる万徳円満の仏。阿弥陀仏や薬師如来などがこれに当たる。○応身…仏の三身の一。化身。世の人を救うため、それぞれの素質に応じてこの世に姿を現した仏。世に出現した仏。○性智行…仏性と智慧と修行。○挙唱…口に出して唱える。古則や公案を提示し、唱える。○平等利益…一切衆生を平等に益する。○玄中之玄…臨濟三玄の一。あらゆる相待分別を離れた玄妙なるありよう。真理そのもの。○妙中之妙…徹底した妙有の世界。悟りを経た上ですべてが肯定されるありよう。○吐露…心に思っていることを、隠さずうちあけること。○話頭…話のいとぐち。話題。古則公案。○回光返照…自己の智慧の光をめぐらし、自らを省みること「補26」。○咬定牙関…歯をくいしばる。牙関は奥歯のこと。咬定は歯を食いしばること。○不起一念…妄想分別の一念が起こらないこと。○庭前栢樹子…「庭前栢樹子」の公案「補27」。○洞山麻三斤…「洞山麻三斤」の公案「補28」。○洞山…雲門宗の洞山守初（九一〇〜九九〇）のこと「補29」。○心意識…心と思慮と認識。思慮分別。道元の『普勸坐禅儀』に、「停心意識之運転、止念想観之測量」とある。○聖凡…悟った人と迷っている人。智慧ある者と道理に暗い者。聖者と凡者。○郷談…それぞれの地方で用いられる言葉。ここでは、日本語のことを指す「補30」。○問取…問い掛ける。○記得…記憶すること。覚えていること。○蒙庵岳禪師…更有赤鬚胡…「補31」。○蒙庵嶽禪師…臨濟宗大慧派の蒙庵思嶽（不詳）のこと「補32」。○浄衆…福州（福建省）龍溪県の浄衆寺のこと「補33」。○鼓山…

福州（福建省）龍泉の鼓山湧泉寺のこと「補34」。○竹庵珪禪師：臨濟宗楊岐派の竹庵士珪（一〇八三〜一一四六）のこと「補35」。○三十棒：師家が学人に対して与える棒打。徳山の棒。○新浄衆：新たに浄衆寺に開堂出世した蒙庵思嶽。○咄：叱咤する叫び。舌打ちをする音。○首枷瞎棒：でたらめに首かせをはめる。めちやくちやに棒で打つ。○胡打乱打：でたらめに打つ。胡乱はいい加減。むやみやたら。○臨濟児孫：臨濟義玄の法を受け継ぐ遠孫。○單刀直入：一人で敵陣に切り込む。直接に要点を突く。ずばりとけりを付ける。○話驢得驢、話馬得馬：驢馬の話をしたら驢馬が現われ、馬の話をしたら馬が現われた。○突出：突然に姿を現す。○弄真像仮：まことをうそに見せかける。逆は弄假像真。○抜本：元手をすつてしまう。ものごとの原因となるものを抜き除く。○將謂胡鬚赤、更有赤鬚：「補36」。○將謂：將に謂えりくと。とばかり思っていた。思い違いをしていた意を表す。○慶快：快ぶ。満足する。○横掬倒拽：横に引っぱったり、さかさまに引っぱる。好きかつてに使いこなす。○正視直行：正しくまともに見て正しく行なう。○聞知：聞き知る。○瑩巖：塩田長老の道号か「補37」。○袈裟角：袈裟のすみ「補38」。○些子：すこしばかりの。ちよつとの。○具信心人：仏法僧の三宝を信じて疑わな心を持った人。○厚味：濃厚な味。○大安樂処：大いなる安樂の境地。心に憂いがなく身も安穩である悟りの境地。○顧視：振り返って見ること。かえりみること。○挙揚：取りあげること。取りあげて人に示すこと。

「史料2」 「蘭溪道隆書状写」 川口市長徳寺所藏『大覚禪師語録掌故』 冒頭「道隆」

塩田和尚至引座云々。延宝伝灯録卷三（十三文） 宋明州天童別山祖智禪師法嗣、信州崇福山安樂寺樵谷惟僊禪師、航海南遊、方来四十余載。上堂、拳下曹山辞洞山因縁上曰、云云。又本朝高僧伝二十一（四文）大全云伝灯。育王觀物初贈偈曰、三応声中密意通、分明飯布裏春風、休論親切不親切、巨舶回程至海東。又有讚、云云。又伝灯録、有門人為樵谷和尚請拈香。又禪師和南呈似前塩田方丈之書、真蹟現在肥

前州小城円通禪寺什襲焉。書中可_レ見梗概。

道隆和南。自_レ至_二日本_一後、博多京城、於_二同衣中_一、聞_レ尽_二万千謗訕_一、見_レ尽_二多少是非_一、如_二不聞不見相似_一、已_レ經_二十五年_一。若不_レ依_二宿緣住_一、此_一一刹、想道隆亦為_二蠹類之屬_一。今雖_レ在_レ此、同心合力者、眼底全無。此国之人、水土淺薄、無_レ久長意、遞相妬譏、以_レ無_レ実_一相伝、使_二人風波不_レ止_一。此乃眼見耳聞之事、令_二人退_レ志_一。此亦檀那信_二不_レ良者讒言_一之咎也。道隆望_二空發_レ誓、念念只欲_レ於_二深山窮谷_一、畚_二一片田_一待_レ死而已。於_二此国中_一、与_レ人較_二何是非_一耶。只如_レ兄、同在_二長庚_一、道聚已_二二十年_一。一旦聽_二人不_レ実之語_一、掣_レ肘便行、更_二不_レ回顧_一。如_レ此有_二力量者_一、尚且如_レ斯、況他人乎。今雖_レ不_レ及_二古以_レ譬喻_一為_レ辭。巖頭雪峰、拳踢相交、何曾有_レ離散之說。始終道愛、彼此洞明。今時鬪_二合是非_一、妄造_二虚語_一、無_レ出_二於扶桑之人_一。以_二大地_一作_レ紙、亦書_レ不_レ能_レ尽。以_レ聞_二兄欲_レ下_二鎮西_一。不_レ知_二果否_一、若果_レ発_レ足、可_レ以_二一切無_レ実事_一、棄_二之肚外_一、訪_二来寺中_一。三五日却起程、亦無_レ害。何必抱_レ恨不_レ顧而去。以_レ出家人今日相打、明日如_レ然。道隆如_レ是_二写呈_一。想亦不_レ慚_二高懷_一、非_レ以_二飾辭_一冒_レ洗、乞_二高鑑_一。仍以_二拙字_一奉_レ献、希_二恕責_一。

七月二十一日 道隆和南

前塩田方丈

○寧将_二熱鉄_一灌_二喉嚨_一、争使_二扶桑背後弓_一。二十余年傾蓋事、如何一旦_レ尽成_レ空。

此一段書翰乃祖之真筆、在_二肥之三間山円通禪寺_一。

「訓」塩田和尚至引座と云々。『延宝伝灯録』卷三(十三丈)に「宋の明州天童別山祖智禪師の法嗣の信州崇福山安楽寺の樵谷惟僊禪師は、海を航_レりて南遊す。方来_二四十余載_一。上堂して、曹山、洞山を辞する因縁を挙_レして曰く、云云」と。又た『本朝高僧伝』二十一(四丈)は大むね『伝灯』に全_レじ。育王の観物初、偈を

贈りて曰く、「三応の声中に密意通じ、分明に飯布春風を裹む、論ずるを休めよ親切なるか不親切なるかを、巨舶の回程海東に至る」と。又た讚有りて云云と。又た『仏灯録』に、門人、樵谷和尚の為に拈香を請う有り。又た禪師和南し前塩田方丈に呈似するの書、真蹟肥前州小城円通禪寺の什襲に現在す、書中に梗概を見る可し。

道隆和南す。日本に至りて自り後、博多・京城にて、同衣中に於いて万千の誇訕を聞き尽くし、多少の是非を見尽くすも、不聞・不見の如く相い似て、己に十五年を経たり。若し宿縁に依りて此の一刹に住ざざれば、想うに道隆も亦た蠹類の属と為らん。今ま此に在りと雖も、同心合力の者、眼底に全く無し。此の国の人、水土浅薄にして、久長の意無く、遞いに相い妬讒し、無実を以て相い伝え、人をして風波止まざらしむ。此れ乃ち眼に見て耳に聞くの事、人をして志を退かしむ。此れ亦た檀那、良からざる者の讒言を信ずるの咎なり。道隆、空を望み誓を発して、念念只だ深山窮谷に於いて、一片の田を畚にして死を待たんと欲するのみ。此の国中に於いて、人と何の是非を較すや。只だ兄の如きは同じく長庚に在りて、道聚すること己に二十年。一旦、人の不実の語を聴きて、掣肘して便ち行き、更に回顧せず。此の如き力量有る者尚お且つ斯の如し、況んや他人をや。今、古えに及ばずと雖も譬喩を以て辞を為さん。巖頭・雪峰、拳踢相い交わるも、何ぞ曾て離散の説有らん。始終道愛せしことは、彼此洞明なり。今時、是非を闘合し、妄りに虚語を造ること、扶桑の人を出ずる無し。大地を以て紙と作すも亦た書きて尽くすこと能わず。以て兄の鎮西に下らんと欲するを聞く。果否を知らざるも、若果し発足せば、一切の無実の事を以て、之を肚外に棄てて、寺中に訪来す可し。三五日にして却つて起程するも亦た害無し。何ぞ必ずしも恨みを抱いて顧みずして去らん。以うに出家人は、今日相い打ち、明日も然るが如し。道隆、是の如く写し呈す。想うに亦た高懐に慳わざらんも、飾辞

を以て冒洗ぼうろうするに非ず、高鑑こうかんを乞こう。仍なほつて拙字せつじを以て奉獻ほうけんし、恕責じよせきせんことを希こいねがう。

七月二十一日 道隆和南

前塩田方丈

寧むじろ熱鉄ねつてつをもつて喉嚨こうろうに灌そそぐとも、争いいでか扶桑ふさうの背後の弓を使わん。二十余年傾蓋けいがいの事、如何いかんぞ一旦いつたん尽つくくと成ならん。

此の一段の書翰は、乃ち祖の真筆なり、肥の三間山円通禪寺に在り。

○川口市の臨済宗建長寺派の長徳寺に所蔵される『大覚禪師語録掌故』は、第九冊目のみが残る零本であるが、「塩田和尚至引座普説」の注記として樵谷惟僊の記事を収め、樵谷惟僊の記事として「蘭溪道隆書状写」を収録している。初出「玉村c」、掲載書籍「建長編一・一一八〜一一九」。○塩田和尚至引座云々：「史料一」参照。○延宝伝灯録云云：「史料14」参照。ただし、本来は「航し海南遊也。於二別山智和尚輪下一罷三参詢二安楽寺一接三衲方来一、四十余載」とあるものが、「南遊」から「方来」までの間が省略されている。○本朝高僧伝：「史料16」参照。○育王観物初：「史料22」参照。○有讀：『本朝高僧伝』の樵谷惟僊章に正元師範による讀文が収録されていることを指す。「史料16」参照。○仏灯録：「史料6」参照。○禪師：ここでは蘭溪道隆のこと。○和南：「梵」vandanaの音写。目上の人に敬意を表してその安否を尋ねる語。口に唱えながら、深く首をたれて礼をすること。礼拝。敬礼。稽首。○肥前州小城円通禪寺：三間山円通寺のこと「補1」。○什襲：什襲。幾十にも包む。大切に秘蔵する。○梗概：あらまし。大略。○博多：博多の円覚寺のこと。蘭溪道隆は来朝から一年の間この寺に滞在した「補2」。○京城：京都東山の泉涌寺来迎院のこと。蘭溪道隆は来朝二年目にこの寺に滞在した「補3」。○誘誚：悪口をいう。○多少：どれほどの。多くの。○是非：紛糾。ごたごた。○十五年：蘭溪道隆が日本に来てからの年月。○宿縁：宿因。前世からの因縁。○蠹：蠹はきくいむし。食物や衣服を食う虫。悪害をなす人。○同心合力者、眼底全無：「補4」。

○同心：目的・志などを同じくすること。○合力：力を合わせて助けあうこと。○眼底：眼中。○水土：その地域の風土。国土。○浅薄：あさはかなこと。○久長：ひさしくながい。久遠。○遞相：遞も相もたがいに。○妬談：嫉妬ねたみそねむ。○無実：正味がない。実がない。○実相：すべてのものが真実の現れであること。○風波：世の中の争いごと。○檀那信不良者讒言之咎：「補5」○檀那：北条時頼（一二二七～一二六三）のこと「補6」。○讒言：人を落とし入れるための告げ口。○念念：いつも心に思い続ける。○深山窮谷：山里を離れた奥深く静かな山と谷。○較：くらべる。しらべる。ろんずる。○長庚：天童山景德禪寺のこと「補7」。○道聚：一緒に修行すること。○二十年：蘭溪道隆が塩田和尚と同参してからの年月「補8」。○掣肘：辞書的には「他人の管を傍らから引く。他人の行動を妨害する」の意味だが、ここでは「掣臂」と同じく「腕を振り切る」の意であろう。○回顧：後ろを振り返ること。○譬喩：たとえる。○巖頭：青原下の巖頭全藏（八二八～八八七）のこと「補9」。○雪峰：青原下の雪峰義存（八二二～九〇八）のこと「補10」。○拳踢相交：拳踢相応とも「補11」。○道愛：仏道を深く信じること。○洞明：明らかに知る。よくわかる。明らかに見通す。○虚語：うそ。虚言。○扶桑：中国の東方海上の島にあるという神木の名。日本を指す。○鎮西：九州の称。○発足：旅に出かける。旅立ち。○訪来：来訪。たずねて来ること。○起程：出発すること。旅立ち。○何必：何もくすると限ったことはない（する必要はない）。○飾辞：言葉巧みに飾り立てる。○冒洗：尊厳なものをはがすこと。○恕責：恕罪。罪をゆるす。○奉献：物をたてまつること。○熟鐵：熱した鉄。○喉嚨：のど。○傾蓋：初めて会って、旧友のように親しくなること「補12」。○一旦：わずかの時間に。○肥之三間山円通禪寺：肥前の三間山円通禪寺のこと。

「史料3」「蘭溪道隆書状」建長寺所藏 冒頭「雲緘」

雲緘到来、兼以佳茗一大箱為賜。感無可言。非面莫謝候。當時之様、如夜暗中行、不知何方所。未委善後之計。何如。紙上難書候。近聞、再主塩田、重興宝社。即十方衲子所望候也。毫楮

不能^レ尽申。伏祈^ニ永亮^一。

十二月初六日

〔蘭溪〕^{〔方印〕} 道隆

〔訓〕雲緘^{うんかん}到来し、兼ねて佳茗^{かめい}一大箱を以て賜^{たま}と為す。感言^{げんげん}う可^べき無し。面するに非^なずんば謝^{あま}すること莫^なく候。当時の様、夜暗^{やあん}の中を行^いくが如^{ごと}く、方所^{ほうじよ}を知らず。未^なだ善後^{ぜんご}の計^{けい}を委^{まか}かにせず。何如^{いかん}。紙上^{しじやう}に書き難^{がた}く候。近^{ちか}ごろ聞^きく、再び塩田^{しほの}を主^{ぬし}り、重ねて宝社^{ほうしゃ}を興^{おこ}すと。即^{すなは}ち十方^{じつぽう}衲子^{なつす}の望^{のぞ}む所に候^{なり}なり。毫楮^{ごうこ}にて尽^つく申^す能^なわず。伏^ふして永亮^{えいりやう}を祈^{いの}す。

十二月初六日

〔蘭溪〕^{〔方印〕} 道隆

○建長寺所蔵「蘭溪道隆書状」とされるものである。「信濃史五」の元徳元年（一二三九）七月条や「玉村A」でも建長寺所蔵と明記している。ただし、現在、建長寺にはこの書状は見あたらない。「建長編一」では某氏所蔵とあり詳しくは触れないため、現在の所蔵先が不明である。初出「信濃史五・一〇三」、掲載書籍「建長編一・二二八」。○雲緘：手紙の別称。○佳茗：上等なお茶。○賜：恩恵。与えるもの。○方所：方初。場所。空間。○善後：失敗の後始末をする。後日のための良い計画。○塩田：塩田と称する寺院。安楽寺の前身寺院か。○十方：あらゆる方面。すべて。○衲子：衲衣（袈裟）を掛けた僧。禅僧。

樵谷惟僊関係史料

〔史料4〕「蘭溪道隆書状」冒頭「再留」

再留^ニ前堂首座^一上堂

拳、黄蘗在_二南泉会下_一作_二首座_一。一日持鉢抛_二南泉位_一而坐。泉入_レ堂見、遂近前問訊云、長老幾年行道。蘗云、威音王以前。泉云、猶是王老師兒孫在。下去。蘗遂歸_二本位_一而坐。拈云、當時若是建長、見_レ蘗抛_二師位時_一、但持鉢入、首座位中而坐、教_二這漢一生軛動不_レ得。雖_レ然、饒人不_二是癡漢_一、有_二箇領子_一、拳_二似大衆_一、急流灘上按_二胡蘆_一、軛_レ難_二將入_二画図_一。試問_二福山樵谷_一看、却言好事不_レ如_レ無。

〔不明〕〔蘭溪〕

〔訓〕再び前堂首座を留めるの上堂

拳す、「黄蘗、南泉の会下に在りて首座と作る。一日、鉢を持ちて南泉の位に抛りて坐す。泉、堂に入りて見、遂に近前し問訊して云く、『長老、幾年か行道す』と。蘗云く、『威音王以前』と。泉云く、『猶お是れ王老師の児孫なり、下り去れ』と。蘗、遂に本位に帰りて坐す」と。拈じて云く、「当時、若し是れ建長ならば、蘗、師位に抛る時、但だ鉢を持ちて入り、首座位中に坐するを見るに、這の漢をして一生軛動し得ざらしめん。然りと雖も、饒い人、是れ癡漢ならざるも、箇の領子有り、大衆に拳似せん、「急流の灘上にて胡蘆を按ぜば、軛ずる処將て画図に入ること難し。試みに福山の樵谷に問うて看よ、却つて言う、好事も無きに如かず」と。

〔不明〕〔蘭溪〕

○「蘭溪道隆書状」は、『本光国師日記』に収録された「蘭溪道隆書状写」として紹介されたのが初出である。『本光国師日記』は黒衣の宰相と呼ばれた以心崇伝（一五六九〜一六三三）の日記であり、以心崇伝が大覚派であったことから、道隆の書簡を書写蒐集していたらしく、同日記には道隆の書簡がいくつか収録されている。このうちの元和四年十一月八日条に収録された書簡の写しであるが、落款があつたことを記すのみで、蘭溪道隆の手紙であつたかを確定する記述はない。これを、内容から道隆のものではないかと推定して提示したのは、「玉村A」である。この書状

は「禪の美術」目録（京都国立博物館刊、一九八一、以下は禪の美術）に個人所蔵史料として収録され、「蘭溪」の落款が押されていることが確認される。初出「玉村A」、影印「禪の美術」、掲載書籍「建長編一・一二七」。○前堂「首座：前堂の修行僧を指導する首座のこと。○黄蘗在南泉く帰本位而坐：「補1」。○黄蘗：南嶽下の黄蘗希運（不詳）のこと「補2」。○南泉：馬祖下の南泉普願（七四八〜八三四）のこと「補3」。○首座：第一座。禅宗寺院で修行僧の首位に坐る者。六頭首の一つ。○鉢：心量器。○問訊：問い尋ねる。挨拶をする。一札して頭を下げる。○行道：仏道の修行をすること。○威音王以前：威音王仏の出現する以前。一切の分別相対が起こる以前のありよう。○王老師：南泉の自称。南泉の俗姓が王氏であるため、王老師と称した。○下去：下りてゆく。○拈：話題を取り上げること。○当時：あの頃。往事。○建長：建長寺。ここでは蘭溪道隆の自称。○転動：移動する。○癡漢：おろかな男。○拳似：話題を提示すること。○胡蘆：ヒョウタンの別名。○福山：巨福山で建長寺の山号。○樵谷：樵谷惟僊のこと。天童山から帰朝した樵谷惟僊が建長寺に寓居していたのだろうか。○試く看：ためしにくしてみなさい。○好事不如無：うまい話はないほうが良い「補4」。

「史料5」『秋潤和尚語録』巻下「偈頌」「至禅興翠雲亭、茶話之次、呈樵谷和尚」

到禅興翠雲亭、茶話之次、呈樵谷和尚

某、幸詣于函丈、聊沐高談、以忘塵穴也。古云、虚而往実而帰之言誠哉。不任感激之至、卒綴拙偈、以拜呈几下。俯希賜添削。

「訓」禅興の翠雲亭に到り、茶話の次、樵谷和尚に呈す。

某、幸いに函丈に詣り、聊さか高談に沐い、以て塵穴を忘るなり。古に云く、「虚にして往き、実にして帰る」の言、誠なるかな。感激の至に任えず、卒かに拙偈を綴り、以て几下に拝呈す。俯して希わくは添削を

賜たまわんことを。

○『秋潤和尚語録』三卷は、大休正念法嗣の秋潤道泉（二二六三〜一三三三）の語録で、もともと白石虎月氏が所藏しており、これを大正二年に東京帝國大学文学部史料編纂掛が書写したものである。白石氏所藏本が現在散逸しているため、東京大学史料編纂所が所藏している書写本が孤本となっている。詳しくは『五山文学新集』第六卷「秋潤道泉集解題」（東京大学出版会、一九七二年）を参照。初出「太田一九六二」、掲載書籍「五山新六・一一一」、「建長編一・二四六」。○禪興：鎌倉の禪興寺のこと「補一」。○翠雲亭：不詳。○茶話：茶を飲みながら話をする。○函丈：丈室のこと。住持の居室。維摩の居室が二丈四方あつた故事に基づく。○高談：思う存分話をする。高尚なはなし。○塵穴：塵芥か。ちりあくた。取るに足らないこと。○古云、虚而往実而帰：「補二」。○几下：机下とも。手紙で相手に対する敬意を表す脇付としてあて名の横に添えて書く語。○拝呈：謹んでお贈りする。つつしんでさし上げる。○添削：詩文の語句を直すこと。

「史料6」『仏灯国師語録』上「禪興禪寺語録」「門人為樵谷和尚請拈香」

門人為樵谷和尚請拈香。恩為根本、知恩必報。義為枝葉、見義勇為。一弁材珍、千金價重。拈来熱向炉中、重透遼天鼻孔。某人、昔年拶透万松関、太白峰頭識別山、藏裏摩尼親拾得、輝天鑑地夜光寒。四十余載、名翼横飛、六十余州、雷駆電馳。両鎮名藍弘大法、縦擒殺活在臨時。此固是樵谷平生得力处。又作麼生是涅槃後有底大人相。良久云、描不成兮画不象、千古叢林為榜樣。

「訓」門人、樵谷和尚の為に拈香を請う。「恩は根本為り、恩を知らば必ず報ゆ。義は枝葉為り、義を見れば勇ましく為す。一弁の材は珍しく、千金の価は重し。拈じ來つて炉中に熱向して、重た遼天の鼻孔を透る。某人、昔年万松関を拶透して、太白峰頭に別山を識り、藏裏の摩尼親しく拾得し、天に輝き地に鑑き夜光寒

し。四十余載、名翼めいよくにて横よこに飛び、六十余州、雷か駆け電馳はせる。兩めいび名監もんを鎮しずめて大法を弘しめ、縦擒しやうきん殺活さつかつ、時に臨のぞむに在り。此これは固もとより是これ樵谷平生へいせいとくりき得力の処なり。又た作麼生そましんか是これ涅槃ねはん後ご有る底だいの大人だいにんの相」と。良久して云く、「描えげども成ならず、画えげども象かたどられず。千古の叢林そうりん、榜ぼう様ようと為なす」と。

○『仏灯国師語録』二巻は、蘭溪道隆法嗣の約翁徳俊（二二四五〜一三二〇）の語録であり、文和元年（一三五二）の五山版が建長寺に伝来している。また、江戸期に三巻本として再刊されている。本論では、建長寺所蔵本を用いた。初出「信濃史五・一〇四」、掲載書籍「建長編一・三〇三〜三〇四」。○拈香：香をつまんで焚くこと。○知恩必報：「補1」。○見義勇為：「補2」。○一弁：一弁香のこと。ひとつまみの香。○熱向：熱向。熱は焼く意。香を焚くこと。向は助字。○遠天：空一面。○鼻孔：鼻。鼻のあな。○万松関：天童山に存した関「補3」。○拶透：拶は切り込む。透は通る。○太白峰頭：明州（浙江省）鄞県の太白峰天童山景德禅寺のこと「補4」。○摩尼：摩尼宝珠の略。竜王の鬚髭けいひつの中にあり、清浄で功德があるという玉。○拾得：拾い得る。○夜光：夜の光。月明かり。○六十余州：六十余りの国。畿内・七道の六十六か国に吉岐・対馬を合わせたものをいう。日本全国の意。○縦擒：許して逃がすことととらえること。○殺活：殺すことと生かすこと。○平生：いつも。つね日ごろ。○得力：力がつく。力量を身につける。○大人：徳の高い人。仏や菩薩のこと。○千古：遠い昔。太古から現在にいたるまでの。永遠。○叢林：樹木の繁茂する林。禅宗寺院。禅の修行道場。○榜様：標榜模様の略。模範。目じるし。

「史料7」木像惟僊和尚坐像の胎内銘

八句陀羅尼

跏姪他、唵阿那隸、吽舍提、鞞羅跋闍羅陀唎、槃陀槃陀你、跋闍羅謗尼泮、虎銜都嚧甕泮、莎婆訶。

嘉曆四年（己巳）七月造、大工兵部殿。

伏願香花燭不断、永到龍華三會曉矣。

〔訓〕八句陀羅尼

跢姪他、唵阿那隸、毗舍提、鞞羅跋闍羅陀唎、槃陀槃陀你、跋闍羅謗尼泮、虎鉞都嚧蘊泮、莎婆訶。

嘉曆四年（己巳）七月造る、大工兵部殿。

伏して願わくは、香花燭断えず、永く龍華三會の曉に到らんことを。

○木像惟僊和尚坐像は、安楽寺に所蔵されているもので、嘉曆四年（一三二九）に造像され、木像で像高七四・四cm、彩色、玉眼などの特徴を備えている。重要文化財に指定されている。初出「信濃史五・九二〜九三」。○八句陀羅尼…「楞嚴咒」の最末尾の陀羅尼「補一」。○龍華三會：弥勒三會とも「補二」。

〔史料8〕『空華日用工夫集刻楮抄』三

信州仙樵谷者、観物初集中掛し名、所謂藍田（題）乃其開基也。

〔訓〕信州の仙樵谷は、『観物初集』の中に名を掛く。所謂る、塩田は乃ち其の開基なり。

○『空華日用工夫集刻楮抄』は義堂周信（一三二五〜一三八八）の『空華集日用工夫集』を瑞溪周鳳が抄録したものであり、建仁寺両足院に所蔵されている。初出「信濃史五・一〇四」。○観物初集…『物初和尚語録』（続蔵一二一収録）のこと。○観物…臨済宗大慧派の観物大観（一二〇一〜一二六八）のこと「補一」。

〔史料9〕『空華集』十九「疏」

別宗建首座住信州安楽諸山疏

円照一派、入_二于東海_一、而大者六。曰_レ仏光氏、曰_レ聖一氏、曰_レ雪巖氏、曰_レ環谿氏、曰_レ兀庵氏、曰_レ別山氏。是六者、子孫繁爾。星_二布乎天下_一。莫_レ之与京。惟_二嗣別山氏_一者、曰_レ樵谷僊公。在昔、宋南渡景定間、公航_レ海南游、得_レ法於天童別山禪師。迨_レ歸_二本國_一、信陽僊府、披_レ榛_二荆_一宇、名曰_二崇福山安樂護聖禪寺_一、而自居焉。既而樵谷、出_二世相之万寿_一、未_レ大_二其施_一、遽_レ爾_二戢_一化。人咸謂、樵谷之福、不_レ在_二其躬_一而、在_二其子孫_一乎。然後始將百年、其子孫皆以_レ道自晦、不_レ欲_レ炳_二耀_一于世。故罕_レ聞焉。今別宗、其所謂樵谷之福、所_レ在者歟。外如_レ枯而内充、跡欲_レ晦而名顯。人皆入_二宝山_一而空_レ手、公独衣_二錦綉_一而返_レ鄉。別山師祖、嘗有_レ言、莫_レ謂空来又空返。果然親到_二宝山_一歸。此非_レ為_二子孫_一今日預識者_レ邪。於是、凡在城諸山、喜_レ法社得_レ入、而作_レ疏胥慶曰、崇山月白、丹桂飄_二雲外_一之鄉、樵谷春回、幽蘭吐_二雪中_一之馥。歲云莫矣、行其時哉。

〔訓〕別宗建首座。信州安樂に住する諸山疏

円照の一派、東海に入りて、大なる者は六。曰く仏光氏、曰く聖一氏、曰く雪巖氏、曰く環谿氏、曰く兀庵氏、曰く別山氏。是の六は、子孫繁たるのみ。天下に星布す。之より京いなるは莫し。惟だ別山氏を嗣ぐ者、樵谷僊公と曰う。在昔、宋南渡の景定の間、公、海を航りて南游し、天童の別山禪師に得法す。本國に帰るに迨び、信陽僊府に、榛を披きて宇を荆め、名を崇福山安樂護聖禪寺と曰いて、自ら居す。既にして樵谷、相の万寿に出世す。未だ其の施を大いにせず、遽爾として化を戢む。人咸な謂う、「樵谷の福、其の躬に在らずして、其の子孫に在るか」と。然る後、殆んど將に百年にならんとするに、其の子孫皆な道を以て自ら晦まし、世に炳耀することを欲せず。故に聞くこと罕なり。今別宗は、其の所謂る樵谷の福、在る所の者か。外は枯れたる如くして内に充ち、跡晦さんと欲して名顯る。人皆な宝山に入りて手を空しくするも、公、独り錦綉を衣て郷に返る。別山師祖、嘗て言有り、「謂うこと莫かれ、空しく来て又た空しく返る」と。果然

として親しく宝山に到りて帰る。此れ子孫の為に今日預め識する者に非ずや。是に於いて、凡そ在城の諸山、法社の入ること得るを喜びて、疏を作りて慶して曰く、「崇山は月白く、丹桂雲外の薺を飄わせ、樵谷は春回りて、幽蘭雪中の馥を吐く。歳云に莫る、行くに其の時なるかな」と。

○『空華集』は義堂周信(一三三五〜一三八八)の漢詩集であり、延文四年(一三五九)の中岩円月の序文、貞治七年(一三六八)の跋文を有し、南北朝に十八巻構成で刊行された。また、元禄九年に二十巻本として再刊されている。初出「信濃史五・一〇六〜一〇七」、掲載書籍「五山全一・五三〇〜五三二」。○別宗建首座：義堂周信のもとで首座を勤めた。もと、安楽寺の僧侶で、京都で参学の後に故郷の安楽寺に戻って住持をするという。○信州安楽：信州(長野県)塩田の崇福山安楽寺のこと「補1」。○諸山疏：新たに住持となる僧侶に対して、近隣の諸山の住持が勧請したり、祝賀の意を表わしたりする文書。○円照：仏鑑円照禅師の略。臨済宗破庵派の無準師範(一一七七〜一二四九)の勅号のこと「補2」。○東海：日本。○仏光：臨済宗破庵派の無学祖元(一二二六〜一二六八)のこと「補3」。○聖一：臨済宗聖二派祖の円爾(一二二〇〜一二八〇)のこと「補4」。○雪巖：臨済宗破庵派の雪巖祖欽(？〜一二八七)のこと「補5」。○環溪：臨済宗破庵派の環溪惟一(一二〇二〜一二八二)のこと「補6」。○兀庵：臨済宗破庵派の兀庵普寧(一一九八〜一二七六)のこと「補7」。○別山：臨済宗破庵派の別山祖智(一一九三〜一二六〇)のこと「補8」。○察：あざやか。○星布：星のように数多く、ひろく散り敷かれたさま。○在昔：むかし。往古。○景定間：南宋の景定年間のこと。○南游：南遊。『華嚴經』で善財童子が法を求めて南方に遊歴したこと。○求法のため旅することをいう。○天童：天童山景德禅寺のこと「補9」。○信陽：信州(長野県)の地名。○饜府：仙府。仙人のいるところ。○榛：むらがつてのびた樹木。やぶ。○宇：宇は空間。また宇は家屋の屋根。○相万寿：相州の万寿寺のこと「補10」。○出世：住持となること。○遽爾：にわかに。○炳耀：光りかがやく。○宝山：立派な寺院。○錦綉：美しい絹織物。ここでは美しく飾った袈裟の意。○別山師祖、嘗有言、莫謂空来又空返：「補11」。○果然：思ったとおりだ。○城：ここでは京城。天子がいる所。みやこ。○諸山：五山十刹

の下におかれた寺格。○法社：寺院のこと。○疏：禪院で用いる文書で、種々の儀礼に使用される。○胥：文のリズムを整える助字。○崇山：安楽寺の山号、崇福山のこと。○丹桂：桂の一種。葉は柏に似て、皮は赤色で、月中にあるという。○雲外：雲の外。雲上。空のはるか遠い所。○薺：穀物の香氣。かおり。○幽蘭：奥深い谷に生ずる蘭。蘭の別名。○馥：かおり。

〔史料10〕『空華集』九「七言八句」「送別宗首座帰住安楽、乃仙樵谷旧業也」

送別宗首座帰住安楽、乃仙樵谷旧業也。

老樵谷口尚遺蹤、レ 帰去憑君起祖風。日暮莫嫌柴担重、天寒須念斧斤功。栽松翠長春千尺、折桂薺飄月一叢。但得嶺南消息在、伝衣何必学廬公。

〔訓〕別宗首座、安楽に帰住するを送る、乃ち仙樵谷の旧業なり。

老樵谷口尚くろしな遺蹤を遺し、のこ 帰去する君に憑りて祖風を起さん。日暮れ柴担の重さを嫌うこと莫かれ、天寒くして須らく斧斤の功を念うべし。栽松の翠は長ず春千尺、折桂の薺は飄ふ月一叢。但だ嶺南の消息在ることを得ば、衣を伝うるに何ぞ必ずしも廬公を学ばん。

○『空華集』…『空華集』については「史料9」参照。初出「信濃史五・一〇七〜一〇八」、掲載書籍「五山全二・二五九」。○別宗首座：義堂周信のもとで首座を勤めた。もと、安楽寺の僧侶で、京都で参学の後に故郷の安楽寺に戻って住持をするという。○安楽：信州（長野県）塩田の崇福山安楽寺のこと「補1」。○旧業：昔のなした業績。○帰去：帰去来。故郷に帰ろう。官職を退いて故郷に帰ろうとすること「補2」。○祖風：祖師の遺した訓をもとにする宗風。家風。○柴：老木。○担：量の名。○斧斤：おの。○栽松：前世に栽松道者と称された五祖弘忍

〔六〇一〜六七四〕を踏まえる「補3」。○千尺：非常に高いこと。○折桂：桂林一枝の故事を踏まえる「補4」。○郷：かおり。○一叢：一団。ひとかたまり。○嶺南：嶺南人無仏性のこと「補5」。○消息：状況、実態。○廬公：老廬。六祖慧能のこと「補6」。

〔史料11〕『仏祖正伝宗派図』永徳二年（一三八二）刊

天童別祖智日本安楽樵谷マ性マ仙

○『仏祖正伝宗派図』は、南北朝末期の永徳二年（一三八二）に刊行されたもので、京都南禅寺龍興庵と大東急記念文庫に所蔵されている。初出「信濃史五・一〇五」。

〔史料12〕『仏祖宗派図』応永二十五年（一四一八）刊

天童別祖智日本安楽樵谷マ性マ僊

○『仏祖宗派図』は、室町中期の応永二十五年（一四一八）に夢窓派の古篆周印によって編集された五山版があり、慶長九年（一六〇四）に再刊されて以降、元和三年（一六一七）、寛永十一年（一六三四）に再刊されている。初出「信濃史五・一〇五」。

〔史料13〕『塔銘写』安楽寺所蔵

塔名写題

崇福山安楽禅寺開山樵谷伊遷禅師者、源朝臣木曾生縁也。憐憐寺之於常楽教寺、年齢到於拾六歳迄、成天

台之学。同十六歳之春、登洛陽、於東福、開山見聖一國師、依於教、師渡唐而唐之到於金山、掛錫拾四歳、天童無準之帶宗派。於歸朝之後、相州鎌倉將軍平時頼卿、令開滿此地、樵谷伊遷禪師与開基奉崇仰。以来到三百余歳仁而、信長一乱悉廢壞。今更雖為曹洞家一教、高山順京比丘、為中興開基而令住居此地畢。(中略)

于時文禄三(甲午)年三月十二日

鍛冶作衛門

大工源左衛門

崇福山安樂禪寺中興開山高山順京在判

作事奉行弊突

〔訓〕塔名写（秘）

崇福山安樂禪寺開山の樵谷伊遷禪師は、源朝臣木曾の生縁なり。憐寺（隱）の常樂教寺に於いて、年齢拾六歳に到る迄、天台の学を成す。同じ十六歳の春、洛陽に登り、東福に於いて、開山の聖一國師に見え、教えに依り、師、唐に渡りて唐の金山に到り、掛錫すること拾四歳、天童無準の宗派を帶す。歸朝の後に於いて、相苧鎌倉將軍平時頼卿、此の地に開滿せしめ、樵谷伊遷禪師を開基と崇仰し奉る。以来三百余歳に到るも、信長の一乱に悉く廢壞す。今、更に曹洞家の一教為りと雖も、高山順京比丘、中興開基と為りて此の地に住居せしめ畢んぬ。(中略)

時に文禄三(甲午)年三月十二日

鍛冶作衛門

大工源左衛門

崇福山安樂禪寺中興開山高山順京在判

作事奉行弊突

○安樂寺に所蔵される『塔銘写』で、安樂寺開山の樵谷惟僊の略伝を収録する。安樂寺を中興した曹洞宗の高山順京の手になる。初出「信濃史五・一〇五〜一〇六」。○崇福山安樂禪寺…信州塩田の崇福山安樂禪寺のこと「補1」。○源朝臣木曾…木曾義仲に連なる一族。信濃源氏の出身。○常樂教寺…信州塩田の天台宗の常樂寺のこと。安樂寺の隣に存する「補2」。○東福…京都東山に存する東福寺のこと「補3」。○円爾…臨濟宗聖一派祖の円爾（二〇二〜二二八〇）のこと「補4」。○金山…径山万寿寺のこと「補5」。○無準宗派…臨濟宗破庵派の無準師範（一一七七〜一二四九）のこと「補6」。○平時頼…鎌倉五代執権の北条時頼（一二二七〜一二六三）のこと「補7」。○開基…ここでは開山と同義。○崇仰…あがめ敬うこと。○廢壞…荒廢すること。○中興開基…中興開山と同義。一端衰えた寺院を再び盛んにした僧侶に対する称。

〔史料14〕『延宝伝灯録』卷三の樵谷惟僊章（大日仏一〇八・七二）

信州崇福山安樂寺樵谷惟僊禪師、航_レ海南遊。於_二別山智和尚輪下_一罷_二參詢_一。歸開_二安樂寺_一、接_レ納_二方來_一、四十余載。上堂、拳_下曹山辞_二洞山_一因縁_上曰、後來_二仏鑑和尚云_一、好大衆、田地穩密、血脈貫通、即不_レ無_二曹洞父子_一。檢点_二將來_一、俗氣猶在。師拈曰、山僧即不_レ然。曹洞父子、似_二田地穩密_一、血脈貫通、相似_二仔細点檢將來_一、仏法見解猶在。

〔訓〕信州崇福山安樂寺樵谷惟僊禪師は、海を航_{りて}南遊す。別山智和尚の輪下に於いて參詢を罷む。歸りて安樂寺を開き、方來を接納すること、四十余載なり。上堂して、曹山、洞山を辞する因縁を拳して曰く、

「後來、仏鑑和尚云く、『好大衆、田地穩密、血脈貫通、即ち曹洞の父子を無せず。檢点し將ち来たれば、俗氣猶お在り』と。師拈じて曰く、『山僧即ち然らず。曹洞の父子、田地穩密、血脈貫通に似て相い似たるも、仔細に点檢し將ち来たれば、仏法の見解猶お在り』と。

○『延宝伝灯録』四十一巻は、卍元師蛮（二六二六〇一七七一〇）が三十年にわたって諸方を歴遊して史料を蒐集して撰述し、延宝六年（一六七八）に完成した僧伝である。中国の灯史『景德伝灯録』にならって、選出時の年号を冠した『延宝伝灯録』と題している。宝永三年（一七〇六）に初めて刊行された。初出「信濃史五・九四」、掲載書籍「大日仏一〇八・七二」。○南遊：『華嚴經』で善財童子が法を求めて南方に遊歴したことから、求法のため旅することをいう。○別山智和尚：臨済宗破庵派の別山祖智（一一九三〜一二六〇）のこと「補1」。○輪下：会下とも。○參詢：參じて教えを請う。○安樂寺：信州塩田の崇福山安樂禪寺のこと「補2」。○方来：四方から集まってくる修行者。○接納：雲衲を接化する。修行僧を教え導く。○曹山辞洞山因縁：「補3」。○曹山：曹洞宗祖の曹山本寂（八四〇〜九〇一）のこと「補4」。○洞山：曹洞宗祖の洞山良价（八〇七〜八六九）のこと「補5」。○後來：後世の世の人。○举曹山辞洞山因縁く俗氣猶在：「補6」。○仏鑑和尚：臨済宗破庵派の無準師範（一一七七〜一二四九）のこと「補7」。○好大衆：好は親しみを込めた呼びかけの言葉。修行僧に対する親しみをこめた呼びかけ。○田地穩密：穩密は隱密。心境を隠すこと。不立文字の仏法が以心伝心して伝わるさまをさす。○血脈貫通：仏法の命脈が繋がりに通る。祖師から祖師へ、仏の命脈が繋がることを指す。○檢点将来：点檢。調べあげる。将来は動作が現実化してくるさまを表す。○俗氣：世俗の気配のことか。○師拈曰く解猶在：「補8」。○仔細：子細。事細かに。詳細に。○点檢：調べあげる。○見解：ものの見方、考え方。解釈。

【参考】『扶桑禅林僧宝伝』巻四「安樂寺樵谷仙禅師伝」

禅師名惟仙、号樵谷。未詳何許人。志趣超邁、管航海南遊、得法於天童別山智和尚。歸住信州安樂

寺、為「開山第一祖」。上堂、拳「曹山辞「洞山」因縁」云、後來仏鑑和尚拈云、好大衆、田地穩密、血脈貫通、即不「無」曹洞父子。檢点將來、俗氣猶在。師拈云、山僧即不「然」。曹洞父子、似「田地穩密、血脈貫通」相似、仔細点檢將來、仏法見解猶在。厥後不「知」所「終」。

「訓」禪師、名は惟仙、樵谷と号す。未だ何許の人なるかを詳にせず。志趣超邁、嘗て海を航りて南遊し、天童の別山智和尚に得法す。帰りて信州安樂寺に住し、開山第一祖と為る。上堂して、曹山、洞山を辞する因縁を挙して云く、「後來、仏鑑和尚拈じて云く、『好大衆、田地穩密、血脈貫通、即ち曹洞の父子を無せず。檢点し將ち来たれば、俗氣猶お在り』」と。師拈じて曰く、「山僧即ち然らず。曹洞の父子、田地穩密、血脈貫通に似て相い似たるも、仔細に点檢し將ち来たれば、仏法の見解猶お在り」と。厥の後、終わる所を知らず。○『扶桑禪林僧宝伝』は、黄檗宗の高泉性敦（一六三三〜一六九五）の撰によるもので、延宝三年に四百人以上の僧伝を『本邦僧宝伝』（『扶桑僧宝伝』とも）二十卷としてまとめているが、そのうちの禅僧百十一人の伝記を取めた十卷を『扶桑禪林僧宝伝』と名づけて延宝三年（一六七五）に刊行したものである。掲載書籍「日仏全七〇・一四七」。

○志趣…心の動き。意気。○超邁…非常にすぐれていること。

〔史料15〕『延宝伝灯録』卷十八の秋澗道泉章

相州寿福秋澗道泉禪師、承証之後、依「樵谷僊和尚」、於「禪興」典「藏鑰」。結制秉弘、問答訖乃曰、前峰突兀、拶「出懸崖之機」。後池深沈、鼓「起滔天之浪」。進「前退」後、未「免」喪身失命也。英靈衲子、一踏々着、庭院日永、薔薇露清。喚作「円覚伽藍」也得、呼為「平等性智」也得。雖然「怎麼」、猶有「金鎖難」在。必竟如何安居取証。豎「起」弘子「云、因、這箇是上方弘子。出住「寿福」。

「訓」相州寿福秋潤道泉禪師は、承証の後、樵谷僊和尚に依り、禪興に於いて蔵鑰を典る。結制秉弘し、問答訖わり乃ち曰く、「前峰突兀として、懸崖の機を擲出す。後池深沈として、滔天の浪を鼓るい起こす。前に進むも後ろに退くも、未だ喪身失命するを免れず。英灵の衲子、一踏に々着せば、庭院の日は永く、薔薇の露は清し。喚びて円覚伽藍と作すも也。た得、呼びて平等性智と為すも也。た得。然も恁麼なりと雖も、猶お金鎖の難有り。必竟、如何が安居取証すや」と。弘子を竖起して云く、「因、者箇は是れ上方の弘子なり」と。出し寿福に住す。

○『延宝伝灯録』については「史料14」を参照。初出「太田一九六二、掲載書籍「大日仏二〇八・二四九」。○相州寿福：鎌倉の龜谷山寿福寺のこと「補1」。○秋潤道泉：臨濟宗仏源派の秋潤道泉（一二六三〜一三三三）のこと「補2」。○承証：証明を承まわる。印可証明を受ける。○禪興：鎌倉の禪興寺のこと「補3」。○蔵鑰：蔵主のこと。蔵殿の主管。禪宗寺院で経蔵を管理する役。六頭首の一つ。○結制：九旬安居の制を結ぶこと。○秉弘：住持が弘子をとること。のちに、住持に代わつて法座を開き、衆のために説法することが行なわれた。○突兀：高く突き出ているさま。高く聳えるさま。○懸崖：高くきりたつがけ。○擲出：押し出す。圧力をかけて、じわりと押し出す。○深沈：奥深く静かなところ。おくぶかくおちつきがある。○滔天：水が天にとどくほどあふれはびこること。○喪身失命：命を落とす。○英靈衲子：すぐれた禅僧のこと。○踏着：踏みつける。着は動作の完了を表す助字。○庭院：門のなかで建物の無い場所の総称。○日永：ひがながい。○薔薇：ばら。いばら。○喚作：と呼ぶ。くと名づける。○円覚伽藍：円満なる仏の悟りを修する堂宇。仏法が満ちた寺院。○得：よろしい。それでよい。○平等性智：四智・五智の一。自己と他者とが平等であることを体現する智。○金鎖難：正しい教えがかえつて人を拘束してしまうことのとえ。○在：句末の「在」は唐代の助字。強い断定の語気を表す。○必竟：畢竟。つまるところ。○安居：雨安居・夏安居のこと。四月十五日から七月十五日の雨季の間、外出せずに寺院で修行すること。○取証：証果を取得することを得ること。○竖起：まっすぐに立てること。○因：力。ワ。力（ちから）を出す声。○上方：都のある地方。

【参考】『秋澗泉和尚語録』中「秉弘」

禪興結夏

垂鉤。得_二連城壁_一、非_二但_三荊山_一。收_二拾怪石_一、誠琢磨看。

提綱。前峰突兀、擲_二出懸崖之機_一。後池深沈、鼓_二起滔天之浪_一。進_レ前退_レ後、未_レ免_二喪身失命去_一也。英灵衲子、一踏々着、庭院日永、薔薇露清。喚作_二円覚伽藍_一也得、呼為_二平等性智_一也得。雖然_二恁麼_一、猶有_二金鎖難_一在。必竟如何安居取証。豎_二起_三弘子_一云、因、這箇是上方弘子。

復拳。堂頭和向、拳_三曹山辞_二洞山_一。山云、子向_二什麼處_一去。曹山云、不變異處去。洞山云、不變異處、豈有_レ去耶。曹山云、去亦不變異得來。仏鑑禪師拈云、好大衆、田地穩密、血脈貫通、即不_レ無_二曹洞父子_一。檢点將來、俗氣猶在。拈云、禪興不_レ然、曹洞父子、似_二田地穩密、血脈貫通_一相似、子細点檢將來、仏法見解猶在。師拈云、仏鑑恁麼批判、蚶瓜徹帶蚶_一。堂頭恁麼注脚、苦瓠連根苦。秉弘上座、当_レ炉不_レ避_レ火、別通_二線路_一去也。只如_二不變異處_一、作麼生去。下_レ床立_三云_一、果然々々。

【訓】禪興の結夏

垂鉤。「連城の壁_一を得たり、但だに荊山なるのみに非ず。怪石を收拾す、誠に琢磨し看よ」と。

提綱。「前峰突兀として、懸崖の機を擲出す。後池深沈として、滔天の浪を鼓るい起こす。前に進むも後ろに退くも、未だ喪身失命し去るを免れず。英灵の衲子、一踏に々着せば、庭院の日は永く、薔薇の露は清し。喚びて円覚伽藍と作すも也た得、呼びて平等性智と為すも也た得。然も恁麼なりと雖も、猶お金鎖の難有り。必竟、如何が安居取証すや」と。弘子を竖起して云く、「因、這箇は是れ上方の弘子なり」と。

復た拳す。「堂頭和向、曹山、洞山を辞すを拳す、山云く、『子、什麼處に向かつてか去る』と。曹山云く、

『不変異の処に去る』と。洞山云く、『不変異の処、豈に去ること有らんや』と。曹山云く、『去るも亦た不変異にし得来たる』と。仏鑑禪師拈ねんじて云く、『好大衆、田地穩密、血脈貫通、即ち曹洞の父子を無せず。檢点けんてんし將ち来たれば、俗氣猶お在り』と。拈じて云く、『禪興は然らず。曹洞の父子、田地穩密、血脈貫通に似て相い似たるも、仔細に点檢し將ち来たれば、仏法の見解猶お在り』と。仏鑑恁麼いんもに批判するも、甜瓜てんか徹帶てつたい甜なり。堂頭恁麼いんもに注脚ちゅうかくするも、苦瓠くわ連根れんこん苦なり。秉ひん拈ねんの上座、炉に当たりて火を避けず、別に一線路に通じ去らん。只だ不変異の処の如き、作麼そも生さんか去らん』と。床に下りて立ちて云く、『果然かね々々』と。

○『秋潤泉和尚語録』については、「史料5」を参照。掲載書籍「五山新六・五一」。○禪興：鎌倉の禪興寺のこと。

既出。○垂鉤：本意はつりをする意。中世の禪林で、学人に教え示すこと。垂語・鉤語に同じ。○連城壁：中国の春秋時代・戦国時代の故事にあらわれた名玉「補4」。○荆山：荆山からでる玉のこと「補5」。○琢磨：ときみがく。

○提綱：提唱。仏法の大要を説法すること。○堂頭和向：不明。『延宝伝灯録』にしたがえば樵谷惟僊のこと。○曹山辞洞山く解猶在：「史料14」参照。○仏鑑：臨済宗破庵派の無準師範（一一七七～一二四九）のこと「補6」。○

甜瓜徹帶甜、苦瓠連根苦：「補7」。○秉拈：住持が拈子をとること。のちに、住持に代わって法座を開き、衆のため説法することが行なわれた。○上座：有徳の僧。僧衆の第一座をいう。ここでは、秋潤道泉の自称。○通：道理。

○果然：思つたとおりだ。

「史料16」『本朝高僧伝』卷二十一の樵谷惟僊章（大日仏一〇二・二九六）

信州安楽寺沙門惟僊伝

積惟僊、号樵谷、不詳其姓里。建長末、渡海入宋、与本邦明南浦・儉約翁・照無象、同参虚堂愚・僊溪聞・介石朋・簡翁敬諸大老。後於天童別山智和尚輪下、頓罷参詢及告辞。育王山観物初贈偈曰、三

応声中密意通、分明飯布裏_二春風_一。休_レ論親切不親切、巨舶回程至_三海東_一。僊_レ帰国後、不_レ求聞達、隱_二逸信州_一、開_二安樂寺_一。不_レ踏_二紅塵_一、四十余載。而湖海包笠、憧憧旁午。上堂、拈_下曹山辞_上洞山_一因縁、後來_二仏鑑_一曰、好大衆、田地穩密、血脈貫通、即不_レ無_二曹洞父子_一。檢点将来、俗氣猶在。拈_レ曰、山僧不_レ然。曹洞父子、似_二田地穩密、血脈貫通_一相似、仔細点檢将来、仏法見解猶在。僊_レ後卒_二於住処_一。

賛曰、儉約翁拈_レ香語曰、樵谷和尚、昔年_レ拶_二透万松関_一、太白峰頭識_レ別山、藏裏摩尼親拾得、輝_二天鑑_一地夜光寒。四十四載、名翼横飛、六十余州、雷駆電馳。両鎮名藍、弘_二大法_一、縦擒殺活在_レ臨_レ時。此是樵谷平生得力処、作麼生是涅槃後有底大人相。良久曰、描不_レ成兮画不_レ象、千古為_二叢林榜樣_一。繇_レ是觀_レ之、其為_二一世宗師_一也昭晰矣。只見_二其略_一而、未見_二其全_一、可_レ為_二嘆惜_一焉。

〔訓〕信州安樂寺沙門惟僊伝

釈の惟僊、樵谷と号す、其の姓里詳ならず。建長の末、海を渡りて入宋し、本邦の明南浦・儉約翁・照無象と、同じく虚堂愚・偃溪聞・介石朋・簡翁敬の諸大老に参ず。後に天童の別山智和尚の輪下に於いて、頓に参詢を罷む。辞を告ぐるに及んで、育王山の観物初、偈を贈りて曰く、「三応の声中に密意通じ、分明に飯布春風を裏む。論ずるを休めよ親切なるか不親切なるかを、巨舶の回程海東に至る」と。僊、帰国の後、聞達を求めず、信州に隱逸して、安樂寺を開く。紅塵を踏まざること、四十余載。而れども湖海の包笠、憧憧として旁午す。上堂して、曹山、洞山を辞する因縁を拈す、「後來、仏鑑曰く、『好大衆、田地穩密、血脈貫通、即ち曹洞の父子を無せず。檢点し將ち来たれば、俗氣猶お在り』と。拈じて曰く、『山僧は然らず。曹洞の父子、田地穩密、血脈貫通に似て相似たるも、仔細に点檢し將ち来たれば、仏法の見解猶お在り』と。僊、後に住処に卒す。

贊に曰く、「儉約翁の拈香の語に曰く、『樵谷和尚、昔年万松関を拶透して、太白峰頭に別山を識り、葦裏の摩尼を親しく拾得し、天に輝き地に鑑きて夜光寒し。四十四載、名翼横に飛び、六十余州、雷駆け電馳す。兩び名藍を鎮めて大法を弘め、縦擒殺活、時に臨むに在り。此れは是れ樵谷平生得力の処、作麼生か是れ涅槃後有る底の大人の相』と。良久して曰く、『描けども成らず、画けども象られず。千古、叢林の榜様と為す』と。是に繇つて之を觀れば、其の一世の宗師為ること也た昭晰なり。只だ其の略を見るも、未だ其の全てを見ず、為に嘆惜す可し。

○『本朝高僧伝』七十五卷は、卍元師蛮（一六二六〜一七一〇）の撰であり、一六六二人の僧伝を編纂し、元禄十五年（一七〇二）に自序を撰し、宝永四年（二七〇七）に刊行したものである。卍元師蛮は『延宝伝灯録』も編纂している。初出「信濃史五・九四〜九五」、掲載書籍「大日仏一〇二・二九六〜二九七」。○建長末：建長年間の末年。建長八年（一二五六）に当たる。○明南浦：臨濟宗大応派祖の南浦紹明（一二三五〜一三〇八）のこと「補1」。○檢約翁：臨濟宗大覚派の約翁徳儉（一二四四〜一三二〇）のこと「補2」。○照無象：臨濟宗松源派の無象静照（一二三四〜一三〇六）のこと「補3」。○虚堂愚：臨濟宗松源派の虚堂智愚（一一八五〜一二六九）のこと「補4」。○偃溪聞：臨濟宗大慧派の偃溪広聞（一一八九〜一二六三）のこと「補5」。○介石朋：臨濟宗大慧派の介石朋のこと「補6」。○簡翁敬：臨濟宗虎丘派の簡翁居敬のこと「補7」。○天童：明州（浙江省）鄞県の太白峰天童山景德禪寺のこと「補8」。○育王山：阿育王山広利禪寺のこと「補9」。○觀物初：臨濟宗大慧派の物初大觀（一二〇一〜一二六八）のこと「補10」。○三応声中密意通、分明飯布裏春風、休論親切不親切、巨船回程至海東：「史料22」参照。○聞達：名声が世に聞こえ高官に出世すること。○信州：信濃。長野県の異称。○隱逸：俗世を逃れて、人里離れた所に住む。○紅塵：立ち上る砂ぼこりのことで、繁華街のたとえ。○湖海：湖と海。世間。江湖。○包笠：網代笠をかぶった僧。修行僧のこと。○憧憧：往來の絶えないさま。○旁午：縦横に入り乱れること。往來の激しいこと。○

儉約翁拈香語、昭晰矣：「史料6」参照。○宗師：仏法の真義をきわめ人々にあがめられる師。尊敬すべき師。○昭晰：明白。あきらか。○嘆惜：なげき惜しむ。

安樂寺方丈宛

〔史料17〕「蘭溪道隆書状」建長寺所藏 冒頭「先日」

先日観音贊、雖_レ蒙_レ仰候、行道々上、至_レ今失記候事、恐入候。又観音聖像、左右有_二韋陀・龍像侍衛_一。雖_レ未_レ拜_二其聖相_一。但、依_二所_レ示之語_一、讚呈、

慈威定慧、物々霑_レ恩、逆順縦横、塵々普心。提_二万有_一而不_レ墮_二於邪途_一、導_二群情_一而令_レ持_二步正信_一。韋陀護法、運_二莫_レ測之洪機_一、龍像森嚴、遵_二利生之大聖_一。世界有_レ尽、我願無_レ窮。鑑_二察賢愚_一、如_二大円鏡_一。妙用非_二唯觀世音_一、平公日（後訣）

（紙 継 目）

奉_二復_一 塩田安樂寺方丈

〔訓〕先日_一の観音贊、仰_二を蒙_レり候_一と雖も、行道々上、今に至るまで失記候こと、恐れ入り候。又た観音聖像、左右に韋陀・龍像の侍衛有り。未だ其の聖相を拜せずと雖も、但だ示す所の語に依つて讚呈す。

慈威定慧、物々に恩に霑_レい、逆順縦横、塵々に普心す。万有を提_レげて邪途に墮せず、群情を導きて正信を持ち歩ましむ。韋陀の護法、測ること莫_レき洪機を運らせ、龍像森嚴にして、利生の大聖に遵_レう。世界尽くること有りとも、我が願_二い窮_一まること無_レからん。賢愚を鑑_二察_一すること、大円鏡の如し。妙用唯だに觀世音のみに

非ず、平公日（以下闕く）

（紙 継 目）

塩田安樂寺方丈に奉復す。

○建長寺所蔵「蘭溪道隆書状」は、蘭溪道隆から塩田安樂寺方丈に宛てた書状とみられ、安樂寺方丈から観音像の讃文を頼まれていたらしく、この返信とみられる。道隆は観音像そのものを見てはいないようではあるが、観音像の左右に韋陀尊天と龍の姿が描かれているとの情報から、讃文を記して送ったものである。軸装されており、後半が闕け別紙が付けられており、そこに「奉覆 塩田安樂寺方丈」とある。包紙の宛先が貼り付けられたものか。初出「信濃史五・一〇二〜一〇三」、影印「建長編一・口絵」、掲載書籍「建長編一・一六七」。○観音：観自在菩薩のこと。観音菩薩、觀世音菩薩とも「補一」。○仰：おおせ。日本語的用法。○行道：仏道の修行をすること。○失記：忘れる。○韋陀：韋陀尊天のこと。もとはバラモン教の神でシヴァ神の息子。仏教の伽藍神の一となる。○龍像：仏法を護法する龍（梵：Naga）。仏陀の説法教化をたすける八部衆の一。龍神。○侍衛：護衛する。○慈威：慈悲の功德。威は力や功德。○定慧：禪定と智慧。○逆順縦横：逆うと従うと、縦と横。自由自在なさま。○塵々：あらゆる事象。○万有：宇宙に存在するすべてのもの。○邪途：邪道。あやまった実践。八正道を實踐しないこと。○群情：衆生のこと。○正信：仏法を信じる心。正しい信仰。○護法：仏法を護持すること。○森蔽：おごそかなさま。○利生：衆生を利益すること。○大聖：偉大な聖者。仏のこと。○世界：世の中。過去・現在・未来の三世を世といい、上下四方四維の十方を界という。○鑑察：見別ける。○大円鏡：大円鏡智。仏の四智の一。○妙用：靈妙な作用。巧妙なはたらき。○奉覆：返信の丁寧な表現。○塩田安樂寺方丈：樵谷惟僊を指す。

「史料18」「蘭溪道隆書状」正木美術館所蔵 冒頭「前月」

前月参謁之時、両旬之間、伏蒙「芳志極厚。感悦良多。請違之後、四月三日晚、遂集「東光兄弟」以「実辞」

懇之、六日侵晨、同諸友皆往貴寺過夏。言未止、一衆闕然無有允旨。次日、道意直歲、又自龜谷來、示云、入信州事、上下皆涉唇吻。拙既備行色了、諸人皆一口同音相拒。不_レ得_レ已、隨衆之意。非_三心口不_三相_レ應也、三_三宝可_レ鑑。它國人、只得_レ從_三衆議。不_レ免_三忍_レ苦。於_レ此過_三一夏了、秋初別作_三居_レ処。建_三侍者等六_三七人、特_レ往_三瞻_レ觀。委_レ曲可_レ有_三御_レ尋、諸事不_レ及_レ尽_レ申。皇恐不_レ備。

四月十日 道隆

安樂禪寺方丈几前

「訓」前月參謁の時、兩旬の間、伏して芳志の極厚なることを蒙る。感悅良に多し。違ること請うの後、四月三日の晩、遂に東光兄弟を集め、実辞を以て懇ろに云く、「六日晨を侵して、諸友と共に皆な貴寺に往きて夏を過ごさん」と。言未だ止まざるに、一衆闕然として允旨有ること無し。次日、道意直歲、又た龜谷自ら来りて、示して云く「信州に入る事、上下皆な唇吻に涉る」と。拙、既に行色に備へ了るも、諸人皆な一口同音に相拒む。已むを得ずして、衆の意に隨うのみ。心口相い応せざるに非ず、三宝鑑みる可し。它國の人は、只だ衆議に従うを得るのみ。忍苦を免れず、此に於いて一夏を過し了らわって、秋初に別に居処を作さん。建侍者等六七人、特に往きて瞻觀せん。委曲御尋有る可し。諸事申すこと尽くす及ばず。皇恐不備。

四月十日 道隆

安樂禪寺方丈几前

○正木美術館所藏「蘭溪道隆書状」は、玉村氏によつて、東福寺靈雲院所藏『集古集』に収録される「蘭溪道隆書状写」として紹介されたものだが、その原本とみられるものが、正木美術館に所藏されている。初出「信濃史五

・一〇一〜一〇二、影印「禪墨拾・二六」、掲載書籍「建長編一・一四六〜一四七」。○参謁：尊敬する人に対面する。○両旬：二十日間。○芳志：他人の親切なところを。おころぎし。○感悦：感動して喜ぶ。○請違：違は離れる。離れることを願う。○東光：中斐国の東光寺のこと。「補一」。○実辞：実語。まことの言葉。○夏：夏安居。四月十五日から七月十五日の期間。○允旨：まことの考え。○道意直歳：不詳。○亀谷：鎌倉の亀谷山寿福寺のこと。「補二」。○唇吻：唇と舌。○行色：旅にでる雰囲気。旅行する。○一口同音：多くの人がそろって同じことを言う。○相応：合致する。互いに応ずる。○三宝：仏・法・僧の三宝。○它国：他国。日本僧からみて道隆が中国僧である意。○衆議：大衆（修行僧）を集めた会議のことか。○忍苦：苦しみを忍ぶこと。○瞻覲：まみえ仰ぎみる。○委曲：込み入った詳しい内情。○皇恐：恐縮する。○不備：文意が十分でないという意で、手紙文の最後に添える語。不一。○安楽禪寺方丈：信州安楽寺の方丈。ここでは樵谷惟僊のこと。○几前：几下。机下とも。手紙で相手に対する敬意を表す脇付としてあて名の横に添えて書く語。

仙字を有す僧侶

〔史料19〕「泉涌寺委属語文」『泉涌寺清衆規式並十六観堂記』

一、以_二信州僧承仙_一為_二維那職_一。

右人知_二僧衣弟_一綱_二僧事_一令_二衆悦預_一。或為_レ衆点読。或首座・懺首無_二参堂_一時、領_レ衆経懺。若首座・懺首無_レ暇之時、坐_二禪椅_一布薩。〈禪椅可_レ立_二法堂正面西向_一〉若上三人亦有_二故障_一、若僧中上座、若知客、若僧中堪能者、並_二禪椅_一布薩也。〈但西堂則昇座布薩〉此職三年未滿、不_レ可_レ退也。

一、以_二同承仙_一為_二監作功德主職_一。

右人発志、励力奉行、当寺造営。可令成斯大事也。若三五年可相助歟。

(中略)

嘉禄三年丁亥三月十二日、当寺開山住持

入宋伝法比丘俊苾誌之病牀。

〔訓〕一、信州僧の承仙を以て維那職と為す。

右の人、僧衣弟を知り、僧事を綱し衆をして悦預せしめよ。或いは衆の為に点読せよ。或いは首座・懺首參堂無き時、衆を領して経懺せよ。若し首座・懺首暇無きの時、禪椅に坐して布薩せよ。禪椅、法堂正面西向に立つ可し。若し上三人、亦た故障有らば、若しは僧中の上座、若しは知客、若しは僧中の堪能なる者、禪椅を並べて布薩せよ。但だ西堂は則ち昇座布薩す。此の職は三年未滿、退く可からず。

一、同じく承仙を以て、監作功德主職と為す。

右の人、志を發し力を励みて、当寺の造営を奉行せよ。斯の大事を成さしむ可し。若しは三五年相い励む可きか。

(中略)

嘉禄三年丁亥三月十二日、当寺開山住持

入宋伝法比丘俊苾、之を病牀にて誌す。

○『泉涌寺清衆規式並十六觀堂記』は、泉涌寺の俊苾の手によるもので、この中に収録される「泉涌寺委屬詰文」は俊苾(一一六六―一二二七)が入滅する約一月前の嘉禄三年(一二二七)三月十二日に病牀にて記したものである。初出「玉村A」、掲載書籍は石田充之『鎌倉仏教成立の研究 俊苾律師』法蔵館、一九七二年。○信州僧承仙：不詳「補

1」。○維那：泉涌寺の役職名。悦衆ともいう。一寺の衆僧を治め衆僧を安慰ならしめる人であり、その居処は堂司と呼ばれる。なお、泉涌寺の役職については石田充之『鎌倉仏教成立の研究 俊仍律師』（法蔵館、一九七二年、四一―四三頁）を参照。○弟：序列。○僧事：僧侶の人事・役職。○悦預：悦豫か。喜ぶこと。○首座：泉涌寺の役職名。長老を除く衆僧の首位。ときに長老に代つて衆の開導をなす。○懺首：泉涌寺における役職。懺首は天台の実踐行儀、懺法の指導者であり、また期懺を主宰した。講經・説法・化導をなす長老・首座が上堂する暇のない時は、随時に昇座して布薩なども勤めた。住持長老・首座につづく要職の懺首と蔵主の一つ。○懺：懺摩の略。懺悔。○經懺：僧侶が經文を読みながら仏に懺悔する儀式。○禪椅：住持が坐する椅子。○布薩：戒律の条文を読み上げて罪を懺悔する。○法堂：法を説く堂。○上座：修行僧の上位。○知客：遠近の客人に接するもので、賓司はその居処。○堪能：すぐれていること。○西堂：他山で住持を勤めた人が、寺の賓客として居住している場合の職名。○監作功德主職：泉涌寺の役職名。詳しいことは解らないが、泉涌寺の造営を奉行する役職であつたらしい。○当寺：京都の東山泉涌寺のこと「補2」。○奉行：実行する。○俊苜：律僧の我禪房俊苜（二一六六―二二二七）のこと「補3」。

「史料20」『建搨記』「蘭溪道隆書状写」

道隆和南悚息、上啓大仏堂上禪師和尚。

揆序、金風普扇、玉宇高寒。恭惟坐鎮名利、驚悟人天、道体起居清勝。道隆、宋国晩生、謬無知者、蔵拙衆底、動止亡策。伏自累年、与仙国弟兄、太白同処、了無固必、作一家事。或一日齋余、寛妙房出示和尚法語并偈頌等。捧読過三、恍如面晤。雖路隔滄溟、大光明蔵中、了無間隔。春暮附舟抵博多。聞近年遷於深山窮谷、以此道開示後昆。不顧与朱門豪戸為友、可見存上古風規、使二人攀企不已。設有管中窺豹、論短言長者、何足与較。久久日消、伏望不倦植弘。庶瞿曇之風不墜、曹

洞之派永流。幸近聞京中文武擾攘、恐到_レ冬_レ尽。同諸兄_一樞衣、往_二丈室_一拜謁、未_レ間。切焉為_二大法_一崇重。不宣。

宋朝西蜀人事、寓_二大宰府博多_一、右謹呈。

円覚寺比丘道隆和南上啓。

「訓」道隆、和南悚息し、大仏堂上禪師和尚に上啓す。
挨拶、金風は普く扇ぎ、玉宇は高く寒し。恭しく惟るに、名利に坐鎮し、人天を驚悟し、道体起居、清勝なり。道隆、宋国の晩生にして、謬_レつて知る者無く、拙を衆底に蔵し、動止、策うつこと亡し。伏して累年自り、仙国弟兄と太白に同処し、了に固必無く、一家の事を作す。或る一日の齋余、覚妙房、和尚の法語並びに偈頌等を出だし示す。捧読すること三過、恍として面晤するが如し。路は滄溟を隔つと雖も、大光明藏中に、了に間隔無し。春暮、舟に附して博多に抵る。聞くに「近年に深山窮谷に遷り、此の道を以て後昆に開示す」と。朱門・豪戸と友為るを顧みず、上古の風規を存することを見る可くして、人をして攀企せしめて已まず。設い管中にて豹を窺い、短を論じ長を言う者有るも、何ぞ与に較すに足らん。久久に日は消ゆ、伏して望むらくは槌払を倦まざらんことを。庶わくは瞿曇の風は墜ちず、曹洞の派は永えに流れんことを。幸いに近ごろ聞く、「京中の文武の擾攘、恐らくは冬に到つて尽く」と。諸兄と共に樞衣し、丈室に往きて拜謁せんとするも、未だ間あらず。切に焉に大法の為に崇重されんことを。不宣。

宋朝西蜀の人事、大宰府博多に寓し、右、謹しんで呈す。

円覚寺比丘道隆、和南して上啓す。

○『建擲記』は、永平寺の第十四世の建擲が、道元の伝記を集めてまとめたもので、通称で『建擲記』と呼ばれており、道元の基本的な伝記史料の一つ。成立については定かではないが、文明四年（一四七二）頃と想定されている。

『建擲記』について、詳しくは河村孝道『諸本対校永平開山道元禪師行狀建擲記』（大修館書店、一九七五年、以下は諸本建擲）を参照。この『建擲記』の中に「蘭溪道隆書状写」が収録されている。初出「菅原二〇〇二」、掲載書籍「諸本建擲・六四―六五頁」。○和南：「梵」*vaṇḍana*の音写。目上の人に敬意を表してその安否を尋ねる語。口に唱えながら、深く首をたれて礼をすること。礼拝。敬礼。稽首。○悚息：おそれあおぐ。○大仏堂上禪師和尚：曹洞宗の道元（一一〇〇～一二五三）のこと「補1」。○大仏：越前（福井県）の大仏寺。後の永平寺のこと「補2」。

○上啓：うえに申し上げる。上書。○揆序：揆は調べる、序は季節。「季節は」ほどの意味。○金風：あきのかぜ。○玉宇：皇帝のいる所。美しく立派な御殿。○名利：名高い寺。○坐鎮：いながらにしてしずめる。いながらにして人の心を得る。○人天：人々や天の神々。○驚悟：おどろいてめをさます。○道体：道の本体。○起居：立ったり座ったり。日常の動作。○清勝：健勝。手紙で、相手が健康で暮らしていることを喜ぶあいさつ。○晩生：後輩が先輩に対して自分をへりくだっている言葉。○動止：動いたり止まったり。日常の動作。○累年：年を重ねる。年々。○仙国弟兄：不詳。天童山で修行していた日本人の仙・国という二人の僧侶。○太白：太白峰の天童山景德禪寺のこと「補3」。○固必：必然。必ずそうなることと決まっていること。○覺妙房：不詳。天童山で修行していた日本人で、道元の法語や偈頌を蘭溪道隆に示した。○捧読：ささげ読む。両手でさしあげてうやうやしく読む。○面晤：会って話す。○滄溟：青く広い海。青海原。○大光明蔵：諸仏の正しい悟りの世界を光明の蔵にたとえる。正法眼蔵と同じ「補4」。○春暮：春の暮れ。三月。○深山窮谷：山里を離れた奥深く静かな山と谷。○後昆：後世の兄弟。後々の子孫。○開示：内容を明らかに示すこと。○朱門：朱塗りの門。高貴な人の門。○豪戸：資産家。○上古：太古。おおむかし。○風規：よるべき規則で、ここでは禪宗の清規。○攀企：たよりまちのぞむ。○管中窺豹：ごく一部をみて全体を推し量ることのたとえ「補5」。○論短言長：説長論短、説長道短とも。批判する。批評する。○久久：非常に長い年月にわたるさま。○槌弘：槌は上堂などの際に、たたいて音を出し修行僧に告報する法具。弘は弘子で、上堂説

法などに用いる法具。○庶幾…こいねがう。心から願う。○瞿曇…釈迦が出家する前の本姓。ゴータマ(梵: Gotama)のこと。○曹洞…曹洞宗のこと。○京中文武擾攘…北条時頼による宝治合戦の、京都における影響を指すか「補6」。

○摠衣…衣のすそをかかげる。古の敬礼の仕方。拝趨(はいすう)(出向く)することをいう。○丈室…一丈四方の狭い部屋。住持の居所を指す。○拝謁…身分の高い人に会うことをへりくだつていう語。○崇重…尊び重んじる。○不宣…手紙の末尾に添える言葉。書きたいことを十分に尽くしていない意。○西蜀…四川省の古称。○大宰府…博多の太宰府。○博多円覚寺…博多の円覚寺のこと「補7」。

【参考】『建誓記』『道元書状写』

道元咨目悚息、上_二復_一円覚堂頭和尚大禪師几前。
即辰孟冬輕寒、伏惟尊候、神相万福。道元、二十年前、曾到_二大宋_一掛_二錫太白_一。一瞬之間、未_レ歴_二叢林_一、旋_二来本国_一、蓋乃業風之所_レ吹也。行解俱闕、守_レ愚過_二日矣_一。近年庵_二于深山_一、閉_レ戸而欲_レ終_二殘命_一矣。去冬、詮慧・惠達両禪人、雲遊之次、敬_レ頌和尚書。薰_レ香拝見、欣感惶恐。宛是寒谷之温至也。本欲_二詣_レ寺拝謝_一、于_レ今未_レ遂_二鄙願_一矣。不_レ期、今年八月、被_レ檀越勾引、忽到_二相州鎌倉郡_一。東西山川、二千余里、嚮風之至、一日三秋。承聞、和尚既到_二王城_一。時之運也、人之幸也。迢迢万里、航_レ海而来、一如_二普通遠年之儀_一。祇園之風云扇、曹溪之流能伝。幸如草々、伏冀慈照。

宝治元年丁未孟冬、比丘道元悚息咨目上覆。

円覚堂上和尚禪師尊前。

〔訓〕道元、咨目悚息し、円覚堂頭和尚大禪師の几前に上復す。

即辰孟冬、輕寒なり、伏して惟れば尊候、神相万福ならんことを。道元、二十年前、曾て大宋に到りて太白に掛錫し、一瞬の間、未だ叢林を歴ずして、本国に旋り來たる。蓋し乃ち業風の吹く所なり。行解俱に闕き、愚を守りて日を過ぐす。近年、深山に庵し、戸を閉ざして残命を終えんと欲す。去冬、詮恵・恵達の兩禪人、雲遊の次で、和尚の書を敬領す。香を薫じて拜見するに、欣感惶恐す。宛も是れ寒谷の温至なり。本より寺に詣でて拜謝せんと欲するも、今に未だ鄙願を遂げず。期せず、今年八月、檀越に勾引せられ、忽ち相州鎌倉郡に到る。東西の山川、二千余里、嚮風の至り、一日三秋なり。承聞するに「和尚、既に王城に到る」と。時の運なり、人の幸いなり。迢迢たる万里、海を航りて來たること、一に普通遠年の儀の如し。祇園の風を云に扇ぎ、曹溪の流れを能く伝う。幸如草々、伏して冀わくは慈照せよ。

宝治元年丁未の孟冬、比丘道元、怵息咨目し、円覚堂上和尚禪師の尊前に上覆す。

○『建撕記』『道元書状写』は、『建撕記』『蘭溪道隆書状写』に続いて収録されている道元から蘭溪道隆に宛てた返状であり、鎌倉行化中の道元が、京都泉涌寺來迎院に滞在している蘭溪道隆に返信している。掲載書籍「諸本建撕・六五―六七頁」。○道元：曹洞宗の道元（一一〇〇～一一五三）のこと。既出。○咨目：手紙で相手に対する敬意を表す言葉。○怵息：おそれあおぐ。○円覚堂頭和尚大禪師：博多円覚寺の蘭溪道隆に対する敬称。○几前：几下。机下とも。手紙で相手に対する敬意を表す脇付としてあて名の横に添えて書く語。○上復：手紙の返信の丁寧な表現。○即辰：辰の月、十月のこと。○孟冬：冬の初め。初冬。陰曆の十月に当たる。○輕寒：少しのさむさ。○尊候：四季の時候において、身体に変調はないか尋ねる意。○万福：多くの幸福。礼を表すときの言葉で、「おかわりございませんか」に相当する。○道元二十年前：宝治元年（一二四七）から二十年前、道元が如浄に参ずる為に天童山に再び入山したのは南宋宝慶元年（一二二五）であり、安貞二年（一二二八）に帰国している。○太白：太白峰天童山景德禪寺のこと。既出。○掛錫：錫杖を掛けて僧堂に留まること。行脚の僧が入山修行することをいう。○叢林：樹木

の繁茂する林。禅宗寺院。禅の修行道場。○業風：業のはたらきを風にたとえたもの。○行解：修行と学解。○近年：道元が京都を去るのは、寛元元年（一二四三）のことで、大仏寺（後の永平寺）を建立するのは寛元二年（一二四四）、永平寺と改めたのは寛元四年（一二四六）のこと。○深山：山里を離れた奥深く静かな山。○去冬：寛元四年（一二四六）冬。蘭溪道隆が来朝して、博多の円覚寺に寓居していた。○詮恵：道元の弟子の一人「補8」。○惠達：道元の弟子の一人「補9」。○雲遊：行雲流水のように諸方に師を訪ねて修行を重ね歩くこと。○敬領：うやまつて受ける。○欣感：よここび感動する。○惶恐：おそれる。○寒谷：寒い谷。冬の谷。○拝謝：つつしんで礼を述べる。○鄙願：いやしいねがい。自分の願いをいう。○今年八月：道元が永平寺を出発したのが宝治元年（一二四七）八月三日「補10」。○檀越：永平寺檀越の波多野義重のこと「補11」。○勾引：ひきよせる。導く。○嚮風：したつてその風にならうこと。○一日三秋：一日会わないと、三年もの間会っていないような思慕の気持ちを持つこと。まちこがれること「補12」。○承聞：〜と聞く。○玉城：都。天子の住む都。○迢迢：遙かに遠いさま。恨みなどが永く絶えないさま。○万里：非常に遠い距離。きわめて遠いこと。○時運：時勢。時流。○普通遠年之儀：達磨が普通年間にインドより中国に渡った故事を指す。○一如：まったくのようである。同一である。○祇園：京都の祇園。○曹溪：六祖慧能（六三八〜七一三）のこと「補13」。○草々：手紙の最後に添える定型文。気持ちを十分に表してはおりませんがの意。○慈照：慈悲をもって照覧ください。ご覧下さい。書状の最後に付す言葉。○宝治元年丁未孟冬：宝治元年（一二四七）十月のこと。

「史料21」「円爾書状」京都国立博物館寄託所蔵

仙郷人便帰、訥言草々、不敏之罪、尚冀原_レ之。

円爾再拜上覆。正茲特承_二下諭_一、合掌反復數過、心期_二豁然_一。揆序_二祁寒_一之初。敬審_二精心多暇_一、隱奧_二毘叶_一、四
大安穩、起居万福。円爾昔在_二径山座下_一、随_レ衆、六々時、与_二足下_一同处、蓋_二千万衆中_一、永隔_二清談_一。既足下、

蓋_二道德_一於_二千鈞_一重、脱_二利名_一於_二一羽_一輕、法駕遠臨。具詳_二躡_一先覺之階梯、為_二後昆之軌範_一、然後、解_二慈航之綵纜_一、泛_二苦海之洪波_一、接_二最上機_一、真善知識。且知、先師_二仏鑑_一、鄉誼不_レ薄、當_レ欲_二扨_一榻以俟也。果緣事相違、不_レ許_二過訪_一。独恨_二宿根淺薄_一、未_レ得_二占_一拜。仍仰_二仰_一無碍之慈、春間修刺、申_二起居_一。便沐_二回報_一。心目照_レ之、尤為_二点首_一。感激之私、銘_二篆肌臂_一。而今復承_二三示誨_一、特以隨喜。大檀守殿、於_二此段事_一、深信深行、是即靈山金言、不_レ墜_レ地者也。円爾、日夕願_レ保守殿長生寿算。又欲_二高識禪定殿下_一、為_レ法純実、志趣不凡。円爾、見同_二窺豹_一、愚甚_二刻舟_一、忝_レ分_二徑山之一灯_一、誠扇_二宋朝之遺風_一、敬慕_二足下道德_一、守殿力量、欲_二趨_一下風而行_二百丈之規式_一。如垂_二慈楨_一、為_レ法本志矣。近來執_二見乱_一道甚多。遵_二古人之確論_一、力行_二單提_一、自然匿伏矣。区々之情、不_レ能_レ得_レ尽_二短札_一、切冀_二為_レ道法_一自重。不宣。

十月二日 普門寺住持円爾 上覆

建長禪寺堂頭大和尚座下

「訓」仙郷人便ち帰らんとす。訥言草々、不敏の罪、尚冀わくは之を原されんことを。

円爾再_二拜上_一覆す。正に茲に特に下諭を承り、合掌反復すること数過、心に豁然を期す。揆序、祁寒の初め、敬んで、精心多暇、隱奥毘叶、四大安穩、起居万福なることを審らかにす。円爾、昔し徑山の座下に在りて衆に隨い、六々時、足下と同処なるも、蓋し千万衆中なれば永く清談を隔つ。既に足下、道德を蓋うること千鈞より重く、利名を脱すること一羽より輕ければ、法駕を遠く臨まん。具さに先覺の階梯を躡み、後昆の軌範となり、然る後、慈航の綵纜を解きて、苦海の洪波に泛かべ、最上機に接する真善知識たらんことを詳らかにす。且つ知る、先師_二仏鑑_一、鄉誼薄からず、當に榻を扨い以て俟たんと欲すべし。果縁の事と相違し、過訪するを許さず。独り宿根の淺薄にして、未だ占_二拜_一を得ざることを恨む。仍つて仰いで無碍の慈を伺り、

春間に修刺し、起居を申す。便ち回報に沐す。心目之を照らし、尤も点首を為す。感激の私、肌臂に銘篆す。而今、復た示誨を承り、特に以て随喜す。大檀守殿、此の段の事に於いて、深く信じ深く行ず、是れ即ち靈山の金言、地に墜ちざる者なり。円爾、日夕に守殿の長生寿算を保たんことを願う。又た、高識なる禪定殿下、法の為にすること純実にして、志趣不凡なることを欲す。円爾、見は豹窺に同じく、愚は刻舟より甚だし。径山の一灯を分かつことを忝くすれば、誠に宋朝の遺風を扇ぎ、敬んで足下の道德、守殿の力量を慕い、下風に趨きて百丈の規式に行なわんと欲す。如し慈撰を垂るれば、法の為にする本志なり。近來のみに執し道を乱すもの甚だ多し。古人の確論に遵つて、力めて单提を行なわば、自然に匿伏せん。区々の情、短札に尽くすことを得る能わず。切に冀わくは道法の為に自重せられんことを。不宣。

十月二日 普門寺住持円爾 上覆

建長禪寺堂頭大和尚座下

○京都国立博物館に寄託所蔵される「円爾書状」は、普門寺の円爾から建長寺の蘭溪道隆に宛てた書状である。内容からは、最初に円爾から道隆に書状を出し、この書状に対して道隆からの返信があり、これに更に返信したものがこの書状とみられる。書中にて九条道家に触れており、道家が建長四年二月二十一日に逝去するので、建長元年から建長三年の書状と判断することができよう。書中の九条道家に対する記述は、蘭溪道隆を通して北条時頼に伝えようとしたものか。初出「玉村c」、影印「禅墨拾・二二二」、掲載書籍「建長編一・五八〜五九」。○訥言：言葉の巧みでないこと。○草々：手紙の最後に添える定型文。気持ちを十分に表してはおりませんがの意。○不敏：賢くない。自己の謙称。○円爾：臨济宗聖一派祖の円爾（二二〇〜二二八〇）のこと「補一」。○再拜：再び礼する。丁重に礼拝する。○上覆：手紙の返信の丁寧な表現。○下諭：ここでは、手紙を頂いたことのへりくだった表現。○心期：心中に期し望むこと。○豁然：からりと開くさま。迷いがとけひらく。さとするさま。○揆序：揆は調べる、序は季節。

「季節は」ほどの意味。○祁寒：はなはだ寒いこと。きびしい寒さ。大寒。○精心：心を立派なものにする。心を専一にする。○毘叶：連なり調和する。○四大：四大五蘊。四大は地・水・火・風。五蘊は色受想行識。我々の身心を成り立たしめているもの。○安穩：安らかでおだやか。○起居：日常の動作。安否を尋ねる言葉。○万福：多くの幸福。○径山：径山万寿寺のこと「補2」。○座下：貴下。足下。上位の人に対して尊敬の意をあらわす。○六々時：十二時。一日中。○足下：座下。貴下。上位の人に対して尊敬の意をあらわす。○千方衆中：多くの修行僧の中。○清談：高尚ななし。○道德：仏道を修めて身についた徳。○千鈞：非常に重いこと。鈞は重量の単位。一鈞は三十斤。七六八〇グラム。○利名：名利に同じ。名譽と利益。名聞と利養。利養は財を食り己を肥やすこと。名聞は世間的な評判名声。○法駕：尊宿の来訪を尊崇した語。○先覚：先だつて悟つた者。先学。○階梯：はしご。階段。物事の発展の過程。○後昆：後世の兄弟。後々の子孫。○慈航：慈悲の船。仏法や仏の慈悲をたとえていう。○綵纜：美しくいろいろどつたともづな。○苦海：苦しみの海。苦しみに満ちた人間世界。○洪波：おおなみ。○最上機：この上ないすぐれた機根。○善知識：善徳の智者。正法を説いて人を正しく導く師。○先師仏鑑：臨済宗破庵派の無準師範のこと「補3」。○郷誼：故郷のよしみ。○榻：椅子の一種。禅榻。○果縁：因果因縁のこと。○過訪：通りがかりに訪問する。○宿根：宿世の根性。○占拝：仰いで拝すること。○無碍：妨げのない。何ものにもとらわれない。○修刺：名刺を差し出すこと。○回報：返事の手紙。返信。○心目照之：心目相照。心と目が互いに照らしあう。○点首：点一頭。頷く。首肯する。○銘篆：篆書で銘を書く。心に深ききざみつける。○肌臂：肌と背骨。○示誨：教える。○随喜：仏法を聞いて心から喜ぶ。○大檀守殿：建長寺大檀越の相模守の北条時頼（一二二七〜一二六三）のこと「補4」。○靈山金言：靈鷲山で釈尊が国王大臣に仏法の護持を付嘱したことを指す「補5」。○長生：長く命を保つ。○寿算：寿命。○禪定殿下：九条道家（一一九三〜一二五二）のこと「補6」。○純実：まじりけがなくまことのあること。○志趣：心の動き。意気。○不凡：非凡。すぐれている。○高識：高い見識。○豹窺：管中窺豹のこと「補7」。○刻舟：刻舟覓劍、刻舟求劍のこと「補8」。○宋朝：南宋の王朝のこと「補9」。○下風：かざしも。人の支配下。○百丈規式：『百丈清規』のこと「補10」。○慈摂：慈悲をもって衆生を導くこと。○本志：まことの

こころ。本懐。○近来…ちかごろ。このごろ。○執見…心に固執して離れない見解。妄見。○確論…確かな議論。○力行…つとめはげむ。○单提…单伝。仏法の教えを相承する。○自然…人為の加わらないさま。真如法性の理。○區々…かくれひそむ。○区々…苦勞。努力するさま。あくせくする。○短札…短い手紙。○道法…さとの道。さとり。○自重…自らの身を大事にする。自愛。○不宣…手紙の末尾に添える言葉。書きたいことを十分に尽くしていない意。○普門寺…かつて京都東山の東福寺山内に存した普門寺のこと「補11」。○建長禪寺堂頭大和尚座下…建長寺住持の蘭溪道隆のこと。

〔史料22〕『物初和尚語録』偈頌「日本仙侍者帰国」

三応声中密意通、分明飯布裏「春風」、休論親切不親切、巨舶回程至「海東」。

〔訓〕三応の聲中に密意通じ、分明に飯布春風を裏む、論ずるを休めよ親切なるか不親切なるかを、巨舶の回程海東に至る。

○『物初和尚語録』は、臨済宗大慧派の物初大観の語録で、門人徳溥等の編による。臨安府（浙江省）法相禪院、安吉州（浙江省）顯慈禪寺、紹興府（浙江省）象田興教禪院、慶元府（浙江省）智門禪寺、大慈山（浙江省）教忠報國禪寺、明州（浙江省）阿育王山弘利禪寺における上堂説法を初めとして、小参、法語、頌古、偈頌などを収める。初出「信濃史五・一〇三〜一〇四」、掲載書籍「続蔵一二・九九b」。○三応声中…南陽慧忠の「国師三喚」の公案を指すか「補1」。○飯布…果州飯布のこと「補2」。○親切…ぴったり適合している。○回程…帰り道。

〔史料23〕「蘭溪道隆書状」上田市安楽寺所蔵

道隆和南。今朝忽聆、首座已有「它山之行」、使「人惊歎」不_レ已。繼於「維那処」詢「其詳曲」、乃云、昨因_レ巡諸寮、請寮暇者、令_レ促_二帰堂_一。此為「其中有_二怠慢者_一」、故欲_レ警_レ之、庶_二堂中不_レ改_二蕭索_一。首座等係_二大頭首_一、説_レ有_二疾、並不_レ預_二此数_一。豈期_二堂司一例報示改令_一。首座発_レ怒破夏而行、此是維那不_レ明_二子細之咎_一。伏望、首座以_二未代叢林_一為_レ念、勿_下以_二此小事_一繫_レ懷。今夕早々帰来。凡有_二所好_一、即当_二三面従_一。冗中不_レ及_二詳布_一。幸巧情察。

五月廿日

道隆和南

仙兄首座禪師

「訓」道隆和南す。今朝忽ち聆_レく、「首座已に它山の行有りて、人をして惊き歎か_レしめて已_レまず」と。繼いで維那処に於いて其の詳曲を詢_レわば、乃ち云く、「昨、諸寮を巡るに因りて、寮暇を請う者に帰堂を促_レがさしむ。此れ其の中に怠慢の者有るが為に、故に之を警_レめんと欲するも、堂中蕭索を改めざるに庶_レし。首座等は、大頭首に係れば、疾有りと説かば並びに此の数預らず。豈に堂司、一例に報示改令を期せんや」と。首座、怒りを発して破夏して行くは、此れは是れ維那、子細を明らめざるの咎なり。伏して望むらくは、首座、未代の叢林を以て念と為し、此の小事を以て懷に繫_レくること勿_レかれ。今夕早々に帰_レり来れ。凡そ所好有れば、即ち当に面従すべし。冗中詳しく布_レくに及ばず。幸いに巧_レう、情察せよ。

五月廿日

道隆和南

仙兄首座禪師

○「蘭溪道隆書状」は、道隆筆蹟のもので上田市安楽寺に所蔵される。年時は不明であるが、五月十日の夏安居中に
出されてお_り、蘭溪道隆台下の建長寺における首座と維那のやりとりと、それに対する道隆の対処が窺える貴重な書

簡である。初出「概考・三一九」、影印「墨美三二六」、掲載書籍「建長編一・一二六」。○和南：「梵」 vandana の音写。目上の人に敬意を表してその安否を尋ねる語。口に唱えながら、深く首をたれて礼をすること。礼拝。敬礼。稽首。○首座：第一座。禪宗寺院で修行僧の首位に坐る者。六頭首の一つ。○大頭首：六頭首（首座・書記・知藏・知客・知浴・知殿）のうちの上位の職。○維那：禪宗寺院の僧堂などで修行僧を監督指導し、堂内の衆務を総覧する役。六知事の一つ。○詳曲：くわしい状況。○怠慢：おこたりあなどる。なすべきことをおこたる。○蕭索：ものさびしいさま。すくないさま。○堂司：維那に同じ。転じて維那の居室をいう。○一例：一樣。○末代：末世。末法の世。○叢林：樹木の繁茂する林。禪宗寺院。禪の修行道場。○繫懷：思いをかける。○面従：人の面前のみでへつらいたがう。面従後言とも。○冗中：いそがしい中。○詳布：詳らかに述べる。○仙兄首座禪師：仙という名の首座。ここでは樵谷惟僊のことか。

その他、並びに不明の史料

〔史料24〕「蘭溪道隆書状」個人所蔵 冒頭「御札（善光寺上品花鉢）」
御札到来、委細謹承候了。老拙再入_二寿福_一事、雖_レ非_二本情_一、想漢家別有_二制度_一候。又杏仁一斗、善光寺上品花鉢一具・梨子給候事、難_レ有_二感悅無_レ極_一候。又前月約束大花瓶_二、香炉_一、依_レ命送上候。建仁羅漢事、別与_レ方有_レ書、甚_レ叮嚀候。諸事俟_二明春_一可_レ申候。恐悚謹言。

十一月廿四日

道隆（花押）

〔訓〕御札到来し、委細は謹んで承り候い_二了_一わんぬ。老拙再び寿福に入る事、本情に非ずと雖も、漢家別に制度有ることを想い候。又杏仁一斗、善光寺の上品の花鉢一具、梨子給り候_二事_一、有り難く、感悅極り無

く候。又た前月約束の**大花瓶**二つ、**香炉**一つ、命に依つて送り上げ候。建仁の**羅漢**の事、別に方を与うるに書有り、甚だ**叮嚀**に候。諸事**明春**を俟ち申す可く候。恐悚謹言。

十一月廿四日

道隆（花押）

○「蘭溪道隆書状」は、個人所蔵史料であり、宛先不明の蘭溪道隆の書状。宛先の人が、「善光寺の上品の花鉢」を送っていることから、信州の僧侶と想定されるため、安樂寺の樵谷惟僊に宛てた書状と推定されている。蘭溪道隆が寿福寺に再住するのは示寂する前年であるため、建治三年（一二七七）十一月二十四日の書状と考えられる。初出「信濃史五・一〇二」、影印「続禅墨・一〇二」、掲載書籍「建長編一・一五七〜一五八」。○委細：詳細なさま。○寿福：鎌倉の亀谷山寿福寺のこと「補1」。○本情：本心。本音。○漢家：中国。○杏仁：杏子の核の中の肉。薬用にする。○善光寺：信州の定額山善光寺のこと「補2」。○花鉢：花をいける容器。○梨子：なし。○感悦：感動して喜ぶ。○花瓶：花をそだてたり、いけたりするつぼ。○香炉：香をたく器。○建仁羅漢事：羅漢は阿羅漢の略。悟りを得た聖者。ここでは、十六羅漢などの仏像、あるいは羅漢供などの法要のことか「補3」。○建仁：京都東山の建仁寺のこと「補4」。○叮嚀：注意深く念入り。○恐悚謹言：おそれながら謹んで申し上げますの意で、手紙の末に付ける言葉。

〔史料25〕『大休和尚語録』補遺「送語録与禅興塩田二老〈各一偈〉」

一 送語録与禅興・塩田二老〈各一偈〉

伊蘭簷當_レ門種、毒藥醜_レ酬一_レ処行。不_レ嗅不_レ嘗俱不_レ犯、等閑擲_レ地作_二金声_一。
鶻具_レ衫子百雜碎、不堪_三拈撥_二轉_一風流。而今颺_レ向_三當_一風樹、也要教_三人掩_一鼻頭。

〔訓〕語録を送りて禅興・塩田の二老に与う〈各おの一偈〉

伊蘭・簷蔔は門に当たりて種え、毒葉・醍醐は一処に行なう。嗅がず嘗めず俱に犯さず、等閑に地に擲てば金声を作す。

鶴具の衫子百雜碎するも、拈撥して風流に転ずるに堪えず。而今、颯向して風樹に当たり、也た要す人をして鼻頭を掩わしむることを。

○『大休和尚語録』は、渡來僧で臨濟宗松源派の大休正念（一一二五～一二八九）の語録。初出「太田一九六二」、掲載書籍「大日仏九六・二〇六」。○禪興：鎌倉の禪興寺のこと「補一」。○伊蘭：草花の名。○簷蔔：くちなしの木。○醍醐：乳製品。味の最高とされる。○等閑：あるがままにまかせ。○金声：鐘や鉦などの音色。美しい声。○鶴具杉子：鶴具布杉のこと。くさい体臭のついた衣「補二」。○百雜碎：こなごなにする。○拈撥：つまんでとりのぞく。○鼻頭：鼻。

「史料26」『幽貞集』「疏」「芳遠住万寿諸山疏」

芳遠住万寿諸山疏

茲審、前席信州安樂芳遠禪師、光庸閑東道元帥府嚴命、董莅乾明山護聖万寿禪寺。凡我同列、相互議曰、無準之道、光明盛大、雖云奴婢走卒、猶知天月之青且白者焉。迄于本朝、其鳴也遠。故東西州言禪之徒、大率系之。独彼安樂氏之伝、扼于北地、諸子相視貌焉。今茲聊公一挙、譬之水在防、決而導則湯々故海。豈可下以北東限之邪。於是遠齋公帖、併致賀辞云、

円照直下児孫、遶矣龍驤虎驟、大江以北風土、自然国疆民庇。誰為稟氣之陽、我将推仁者後。共惟、新命某、容貌魁壘、心胸坦夷。此客鎌城上游、某水犀川一曲。接梅以杏、強木尚存。食棗如瓜、古土難忘。

徵^ニ至音於黃鐘大呂、獲^ニ洪器于赤泉神州^一。矧^ニ乾明之精藍、輪乎英乎。而元戎之峻擢、公也。衆賓雜沓、縣^ニ鼓西応^一、鼓東、華構罽罽、大木宋細木栢。胡為坐致、安能往從。

「訓」芳遠万寿に住する諸山の疏

茲に審らかにするに、前席^{ぜんせき}信州^{しんしゅう}の安樂^{あんらく}芳遠^{ほうえん}禪師^{ぜんじ}は、関東道^{かんとうみち}元帥^{げんすい}府^ふの嚴命^{げんめい}を光庸^{こうよう}し、乾明山^{けんみんざん}護聖^{ごせい}万寿^{まんじゆう}禪寺^{ぜんじ}を董^{どう}莅^りす。凡そ我が同列^{どうりつ}、相い与^{あひよ}に議^ぎして曰^{いは}く、「無準^{むじゆん}の道^{みち}、光明^{くわうみやう}盛大^{せうたい}にして、奴婢^{ぬひ}走卒^{しうそつ}と云うと雖も、猶お天^{てん}月の青^{あお}く且つ白^{しろ}き者^{もの}を知るが如^{ごと}し。本朝^{ほんてう}に迄^{いた}るまで、其の鳴^なるや遠^{とほ}し。故に東西^{とうせい}の州^{しゅう}の禪^{ぜん}を言うの徒^たは、大率^{おほひね}之^{これ}に系^{かか}る。独り彼の安樂^{あんらく}氏の伝^{でん}、北地^{ほくち}に坭^とまり、諸^{しよ}士^し相^あい視^みること貌^{ぼう}焉^んたり。今茲^{こんこ}に聊^{しか}か公^{こう}の一挙^{いつこ}するは、之^{これ}を水^{みづ}の防^{ぼう}に在^あるに譬^{たと}う、決して導^{たう}びければ則^{すなは}ち故海^{こかい}に蕩^{たう}々^{とう}たり。豈^{いか}に北東^{ほくとう}を以^{もつ}て之^{これ}を限^{かぎ}る可^べけんや」と。是に於^おいて遠^{とほ}く公帖^{こうてつ}を齎^{もたら}し、併^あせて賀辞^{がじ}を致^{いた}して云^いく、
 円照^{えんしやう}直下^{ちくげ}の児孫^{こじゆん}、躋^いなるかな、龍驤^{りゆうじやう}虎驟^{こしゆう}す、大江^{たいかう}以北^{いほく}の風土^{ふうど}、自然^{じねん}に国疆^{こくきやう}く民彫^{みんてう}かなり。誰^{たれ}か稟氣^{りんき}の陽^{やう}と為^ならん。我^{われ}れ將^{まさ}に仁者^{にじや}の後^{のち}を推^おさんとす。共^{とも}しく惟^{おも}みるに、新命^{しんめい}某^{なにかし}、容貌^{ようぼう}魁壘^{けいらい}にして、心胸^{しんきゆう}坦夷^{たんい}なり。此^{こゝ}の客^{かく}は鎌城^{れんじやう}の上游^{じやうぎゆう}にして、某水^{みづ}は犀川^{さいがわ}の一曲^{いつきよく}なり。梅^{うめ}に接^つぐに杏^{あん}を以^{もつ}てするも、強木^{きやうぼく}尚^{なほ}お存^{ぞん}す。菓^{くわ}を食^くうこと瓜^{うり}の如^{ごと}くなるも、古土^{こど}忘れ難^{がた}し。至音^{しおん}を黃鐘^{かうしゆう}・大呂^{たいりう}に徵^{ちやう}し、洪器^{かうき}を赤泉^{せきせん}神州^{しんしゆう}に獲^えたり。矧^{いか}や乾明^{けんみん}の精藍^{せいらん}、輪^{りん}たるかな、奂^{かん}たるかな。而^{しか}るに元戎^{げんじゆう}の峻擢^{しゆんてき}は、公^{こう}なり。衆賓^{しゆひん}の雜沓^{ざつたう}、鼓^こを懸^かけて西^{せい}し鼓^こに応^{おう}じて東^{とう}し、華構^{かこう}罽^き罽^き、大木^{たいぼく}は宋^{そう}とし細木^{さいぼく}は栢^{はく}とす。胡^こ為^なぞ坐致^{ざち}し、安^{あん}ぞ能^よく往從^{わうじゆう}せん。

○『幽貞集』は、室町時代に活躍し、鎌倉円覚寺や京都南禅寺の住持を勤めた臨濟宗幻住派の一曇聖瑞の漢詩集。詳しくは『五山文学新集』四卷「幽貞集解題」参照。初出「信濃史五・一〇八〜一〇九」、掲載書籍「五山新四・二九二」。○芳遠：信州安楽寺の僧で、樵谷惟僊の法孫であり、これから万寿寺に住持として赴くところ。○万寿

…鎌倉の乾明山万寿寺のこと「補1」。○諸山疏：新任持のために祝賀の意を表わす漢詩文。○信州安楽：信州の崇福山安楽寺のこと「補2」。○関東道元帥府：関東の副元帥府。○光庸：立派に捧持する。○重澄：ただしのぞむ。○無準：臨済宗破庵派の無準師範（一一七七～一二四九）のこと「補3」。○光明：仏・菩薩の智慧を象徴する。○奴婢：奴隸。○走卒：はしりづかいするしもべ。○天月：天にかかっている月。○大率：大略。大概。○貌焉：孤独なさま。○蕩々：広大なさま。○公帖：官寺に任持する任命書。○円照直下児孫：無準師範法嗣の系統を受け嗣ぐ者。○樵谷惟僊の系統を指す。○題：ただし。よい。○龍驤虎驟：龍昇り虎はしる。○大江以北：長江より北。○粟気：気をうける。○仁者：憐れみ深い人。儒教の説く仁徳を備えた人。○魁壘：すぐれてたくましい。○坦夷：なだらか。○鎌城：鎌倉のことか。○上游：遊行。○犀川：長野県を流れる川。○棗：なつめ。○至音：美をつくしたこの上ない音楽。○黄鐘：中国古代の音楽における十二律の一。六律六呂の基本音。○大呂：中国古代の音楽における十二律の一。陰の六呂の第一。○洪器：大きな器。応量器をたとえている。○赤峯神州：漢土（中国）の異称。○乾明精藍…：乾明山万寿寺のこと。○輪奐：壮麗なさま。○元戎：大勢の兵士。○峻擢：特別に抜擢される。○衆賢：多くの賓客。○雜沓：多くのものが入り乱れるさま。○華構：はなやかな構え。○罽毘：宮殿内の門。○菜：うつぱり。むなぎ。○柄：たるぎ。○胡為：どうして。なんのために。○坐致：いながらに致す。勞しないで得る。○安能：どうしてできようか。

〔史料27〕 木像恵仁和尚坐像

八句陀羅尼

踰姪他、唵阿那隸、毗舍提、鞞羅跋闍羅陀唎、槃陀槃陀你、跋闍羅誘尼泮、虎猊都嚧龜泮、莎婆訶。

嘉曆四年（己巳）九月十二日造之。

〔訓〕 八句陀羅尼

跡姪他、庵阿那隸、毗舍提、鞞羅跋闍羅陀唎、槃陀槃陀你、跋闍羅誘尼泮、虎舛都噓瓊泮、莎婆訶。
嘉曆四年〔己巳〕九月十二日、之を造る。

○木像恵仁和尚坐像は、安楽寺に所蔵されているもので、嘉曆四年（一二二九）に造像され、彩色、玉眼などの特徴を備えている。重要文化財に指定されている。初出「信濃史五・九三」。○八句陀羅尼：『楞嚴咒』の最末尾の陀羅尼「補一」。

補注

〔史料一〕

(1) 蘭溪：臨済宗大覚派祖の蘭溪道隆（一二一三～一二七八）のこと。西蜀涪州（重慶市涪陵区）の冉氏。無準師範・癡絶道冲・北磻居簡に歴参し、臨済宗松源派の無明慧性の法を嗣ぐ。天童山景德禪寺に滞在中、日本僧から日本で禅が弘まっていないことを聞き、寛元四年（一二四六）に自らの意志で弟子数人と共に来朝。博多の円覚寺、京都の泉涌寺来迎院、鎌倉の寿福寺に寓居し、北条時頼によつて大船（神奈川県 常楽寺の住持として迎えられ、建長元年（一二四九）に鎌倉の建長寺の開山となる。その後、京都の建仁寺、松島の瑞巖寺、鎌倉の寿福寺に住し、示寂するまでの三十三年間、日本において禅を弘めた。示寂後に大覚禪師と諡されるが、これは日本最初の禪師号である。『蘭溪和尚語録』二巻が存する。

(2) 塩田和尚至引座普説：建長寺が開山されて間もなくしてやつて来た「塩田長老」を法座に拜請した際、塩田長老に先立つて蘭溪道隆が行なつた普説。この後、塩田長老が建長寺の修行僧を前にして法座に立つたものとみられる。

(3) 塩田和尚：塩田長老。信濃（長野県）塩田の長老。普説中に「建長与塩田各抛一刹、或百余衆、或五十衆」とあることから、建長寺に対して「信州」の「塩田」寺と呼称されていた寺の住持を勤めていたとみられる。

入宋経験があり、蘭溪道隆と同船にて日本に帰朝した。塩田長老が誰なのかは明確ではないが、長野県上田市塩田にある安楽寺開山で、入宋して無準師範法嗣の別山祖智（一一〇〇～一二六〇）の法を嗣いだ樵谷惟僊と同一人物であるとする説がある。しかしながら、塩田和尚と樵谷惟僊の活動年次に誤差を超える矛盾が確認されるため、「玉村A・B・C」を受けた上での同一人物説はなりたたない。詳しくは、「館二〇一六」を参照。

(4) 塩田：信濃（長野県）塩田のこと、塩田にある寺院のことを指す。蘭溪道隆が「建長」に対して「塩田」と呼称しており、さらに「諸人、此の巨福山中に在り、彼の塩田刹内に居る者」とあることから、単に地名というだけではなく、「塩田」寺とも呼称されていた寺院であつたらしい。塩田は「塩田庄」という地名で平安末期の文獻に初見される。建治三年（一二七七）に連署の北条義政が塩田城（上田市東前山）に居を構え、その子である北条国時、孫の北条俊時の三代にわたり塩田北条氏と称するなど、鎌倉との縁が強い地域である。後に樵谷惟僊によつて塩田に崇福山安楽寺が建立され、現存する国宝の安楽寺三重塔は北条義政の創建と伝えられる。信濃出身の無閑普門（一一二二～一二九一）が若くして塩田で参学しており、「大明国師無閑大和尚塔銘」には「却回信州、館於塩田、乃信州之学海、凡涉經論之学者、担簦負笈、自遠方来而皆至焉」とあり、遠方からも塩田で經論を学ぶために参学するなど、蘭溪道隆が日本に渡来する以前から仏教が盛んな地であつたことが知られる。

(5) 浩然之气：『孟子』「公孫丑章句上」に出る言葉。孟子（孟軻）は、弟子の公孫丑に対して、真の勇氣を養うために、自らが心掛けていることは、人の話を理解することと浩然の氣を養うことであると述べる。また、浩然の氣を養うことで何事にも動じない道德的勇氣を体得することはできるが、浩然の氣を身につけることが目的化しては無益なだけでなく、かえつて有害であるとも述べる。『孟子』「公孫丑章句上」に、「敢問、夫子惡乎長。曰、我知言、我善養吾浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰、難言也。其為氣也、至大至剛、以直、養而無害、則塞于天地之間。其為氣也、配義與道。無是餒也。是集義所生者、非義襲而取之也。行有不慊於心、則餒矣。我故曰、告子未嘗知義。以其外之也。必有事焉、而勿正心勿忘、勿助長也。

無_レ若_レ宋人_一然_上。宋人有_レ閔_レ其苗之不_レ長而擷_レ之者。芒芒然婦、謂_レ其人曰、今日病矣、予助_レ苗長矣。其子趨而往視_レ之、苗則槁矣。天下之不_レ助_レ苗長_一者寡矣。以為_レ無_レ益而舍_レ之者、不_レ耘_レ苗者也。助_レ之長者、擷_レ苗者也。非_レ徒無_レ益、而又害_レ之_一とある。

(6) 恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼總不得：『聯灯会要』卷十九の葉山惟儼章に「直造_三石頭_二問、三乘十二分教某甲粗知、嘗聞_三南方直指人心見性成佛_二、実未_三明了_二、伏望和尚慈悲指示。頭云、恁麼也不_レ得、不恁麼也不_レ得、恁麼不恁麼總不_レ得、汝作麼生。師竝思。頭云、子因緣不_レ在此、江西馬大師処去、必為_レ子説」(統藏一三六・三六九d)とある。

(7) 建長与塩田各抛一刹、或百余衆或五十衆：建長寺に百人、塩田寺に五十人の修行僧があつたことを示す。『蘭溪和尚語録』の康元元年(一二五六)の二月十五日(仏涅槃)から、四月八日(浴仏)までの間に行なわれた上堂(上堂48)では、建長寺の修行僧が百五十人であつたことが記されているから、これよりも前に行なわれた普説とみられる。宝治三年(建長元年、一二四九)一月十五日に行なわれた「元臂上堂」(上堂6)では、「常楽寺に一百衆の僧有り」とあり、すでに常楽寺の時点で百人の参学僧があつたことになる。したがって、建長寺が開山されてからそれほど時間を経ずに行なわれた普説であつたと推測される。「示_三承性西堂_二」(法語5)の法語では、建長寺の修行僧を「千百指人」として百十人と述べているので、「塩田和尚引座普説」はこれよりも以前か、ほぼ同時期に行なわれた普説と推察される。

(8) 端倪：物事の始めと終わり。事の始終。『莊子』「大宗師」に「仮_三於異物_一、託_三於同体_一、忘_三其肝胆_一、遺_三其耳目_一、反覆始終、不_レ知_三端倪_二とある。

(9) 永嘉禪師道、故不同於兔角：『禪宗永嘉集』「奢摩他頌第四」に「若以_レ知_レ寂、此非_三無緣知_一。如_三手執_二如意、非_レ無_三如意手_一。若以_三自知_二知_一、亦非_三無緣知_一。如_三手自作_レ拳、非_三是不_レ拳手_一。亦不知_レ知_レ寂、亦不自_レ知_レ知、不_レ可_レ為_三無知_一、自性了然故、不_レ同_三於木石_一。手不_レ執_三如意_一、亦不_三自作_レ拳、不_レ可_レ為_三無手_一、以_レ手安然故、不_レ同_三於兔角_一(大正藏四八・三八九c)とある。

(10) 永嘉禪師：六祖下の永嘉玄覺（？～七一三）のこと。温州（浙江省）永嘉県の戴氏。天台止觀の法門に精通していた。韶州（広東省）曹溪山の六祖慧能に参じ、わずかに問答商量するや印可を受け、その法を嗣ぐ。一宿にして慧能の下を去ったことから、「一宿覺」と称される。温州永嘉に帰つて松臺山淨光寺などで大いに化を振つた。真覺大師といい、無相大師と諡する。著述に『禪宗永嘉集』や『証道歌』が存する。

(11) 寂音尊者云、永嘉止説悟後之病：覺範慧洪撰『林間録』卷下「永嘉禪師偈」の項に、「智覺之意、欲偈兼言明悟、永嘉止説悟後之病。二老之言皆是也。然天下之理、豈可下以一言尽耶。永嘉之偈、不必奪亦可也（統藏一四八・三二六c）とある。

(12) 寂音尊者：臨濟宗黃龍派の覺範慧洪（一〇七一～一一二八）のこと。筠州（江西省）新昌県の彭氏。真淨克文の法を嗣ぐ。後に筠州の清涼寺などに住した。意見を異にする僧の讒訴により、四回投獄されたが、居士の張商英・郭天民らによつて助けられた。釈放後は、衡陽（湖南省）の南嶽南臺寺の明白庵に隱棲し、多くの著作を残した。代表的な著作に『林間録』『禪林僧宝伝』『石門文字禪』などがある。

(13) 孤陋寡聞：孤陋はひとりよがりで頑ななこと。寡聞は見聞が狭く浅いこと。卑下謙遜した表現。独学して切磋する友がいないと、学識が狭く見聞も少ない。『礼記』『学記第十六』に「雑施而不孫、則壞乱而不修。独学而无友、則孤陋而寡聞」とある。

(14) 仁者見之必謂之仁、智者見之必謂之智：『周易』（易経）「繫辭伝上」の語に「仁者見之謂之仁、知者見之謂之知」とある。また、『仏鑑禪師語録』卷一「焦山普濟禪寺語録」の入院上堂に「仏殿。你不識我、我不識你。狭路相逢、脳門著地。仁者見之謂之仁、智者見之謂之智」（統藏一一一・四三〇d）とあり、無準師範が鎮江府（江蘇省）の焦山普濟寺に入院した際の仏殿法語にも同じ表現が見られる。それぞれの分に応じて道のとらえ方は仁や智として表現される。

(15) 筇：筇竹。布袋竹・仏面竹ともいう。蜀（四川）に産する竹の一種で、杖を作るのに適する。細身ながら堅牢で潤いを持ち、節が九つある直線的なものが高級品とされた。『古尊宿語録』卷二十三の『葉泉広教省禪師語

録』の「勘弁語并行録偈頌」の「筇竹杖」と題する偈頌に「筇竹九節、縱横無邪、大展長空、凡聖路絶」（統藏一一八・二三四a）とある。

(16) 吾祖道、不立文字、直指人心、見性成仏……『法演禪師語録』卷中「舒州白雲山海會演和尚語録」に「小參云、達磨西來、不立文字、直指人心、見性成仏」（大正藏四七・六五九b）とあり、『碧巖録』第一則「武帝問達磨」の本則の評唱に「達磨遙觀此土有大乘根器、遂泛海得得而來、單伝心印、開示迷塗。不立文字、直指人心、見性成仏」（大正藏四八・一四〇a、b）とある。

(17) 如龐居士道、共說無生活……『龐居士語録』卷上に「有偈曰、有男不婚、有女不嫁、大家團圓頭、共說無生活」（統藏一二〇・二八a）とある。息子は嫁を取らず、娘は嫁に行かず、一家でそろって仏法を語る。無生活とは仏法の空に関する論議をいう。

(18) 龐居士……馬祖下の龐蘊（？〜八〇八）のこと。字は道玄。龐居士と呼ばれる。衡陽（湖南省）の出身。石頭希遷に参じて禅旨を会得し、次いで馬祖道一に参随した。更に丹霞天然・葉山惟儼・大梅法常など数多くの禅者との問答が残されている。一生涯、僧形を取ることにはなかつたが、独自の悟境に達したため、中国の維摩居士とも称される。『龐居士語録』三卷が存する。

(19) 靈照……唐代、馬祖道一に参じた龐居士（龐蘊、？〜八〇八）の娘の靈照（靈昭）のこと。禅機に優れていた女性として知られる。『龐居士語録』には靈照との問答が多く収録される。

(20) 馭耕夫之牛、竊飢人之食……「馭耕夫牛、奪飢人食」に同じ。農民の牛を追い払い、飢えた人から食べ物を奪い取る。人情に左右されない厳格な接化をあらわす。『聯灯会要』卷二十六の洞山守初章に「夫善知識者、馭耕夫之牛、奪飢人之食、方名善知識。即今天下、那箇是真善知識。諸人參得幾箇善知識來也、不是等閑。直須是參教徹觀教透、千聖莫能証明、方顯丈夫兒。不見、釈迦老子、明星現時、豁然大悟。与大地衆生同時成仏。無前後際、豈不暢哉。雖然如是、若遇明眼衲僧、也好劈脊棒」（統藏一三六・四三三b、c）とある。この語は『古尊宿語録』卷三十八の『襄州洞山第二代初禪師語録』の上堂（統藏一一八・三三四c）にも

載せられる。

(21) 指槐罵柳：桑園は桑を植えた畑で、柳樹は柳の木。桑の木を指して柳の木をののしる。あてこすりをいう。

『仏海睦堂禪師広録』巻一「滁州龍蟠壽聖禪院語録」の上堂に「拳、保寧勇和尚示レ衆云、有ニ手脚、無ニ背面、明眼人看不レ見、天左旋地右転。拍レ膝云、西風一陣来、落葉両三片。師云、指ニ桑樹ニ罵ニ柳樹、用ニ官坊ニ作ニ醋坊ニ（統藏一二〇・四五二c）とある。

(22) 仏来也打、祖来也打：仏が来ても打ち、祖師が来ても打つ。いかなる事象にも絶対的な価値を置かない禪の立場を標榜したもの。『密庵和尚語録』『衢州大中祥符禪寺語録』の上堂に「徳山抛ニ一条白棒、仏来也打、祖来也打、且不レ坐ニ在闊浩浩静悄悄処」（大正藏四七・九六〇c）とある。

(23) 生鉄面皮：鉄面皮と同じ。非常に強固な面の皮のたとえ。『五灯会元』卷十八の道場法如章に「尋常多説ニ十智同真、故叢林号为ニ如十同」也。水庵・円極皆依レ之。円極嘗贊レ之曰、生鉄面皮難ニ湊泊、等閑拳ニ歩動ニ乾坤、戲拈ニ十智同真話、不レ負ニ黄龍嫡骨孫」（統藏一三八・三四五b）とある。

(24) 不著仏求、不著法求、不著僧求：求那跋陀羅訳『仏説菩薩行方便境界神通变化経』卷下に「夫求レ法者、不レ著レ仏求、不レ著レ法求、不レ著レ僧求」（大正藏九・三一二c）とあり、『維摩経』「諸法言品第五」に「夫求レ法者、不レ著レ仏求、不レ著レ法求、不レ著レ衆求」（大正藏一四・五二六c）とある。また、これを受けたものとして『聯灯会要』卷七の黄檗希運章に「師在ニ塩官、殿上礼拝次、時大中帝為ニ沙弥問レ師、不レ著レ仏求、不レ著レ法求、不レ著レ僧求、長老当何所求。師云、不レ著レ仏求、不レ著レ法求、不レ著レ僧求、常礼如ニ是事。弥云、用レ礼何為。師与ニ一掌。弥云、太麤生。師云、這裏是甚麼所在、説レ龜説レ細。隨後又掌」（統藏一三六・二七四d）（二七五a）とある。

(25) 聞仏一字、嗽口三年：仏ということばを一言声に出せば、三年もの間口を漱ぐ。『虎丘隆和尚語録』の「平江府虎丘雲巖禪寺語録」の「傳枢密請陞座」に「師乃云、仏語心為レ宗、一切即一。無門為レ法門、一即一切。是汝諸人高肩ニ拄杖、天下横行。還踏ニ著此門」也未。若也踏ニ著此門、年年是好年、月月是好月、日日是好日、時

時是好時。明如_二杲日_一、寬若_二太虛_一。三世諸仏、以_二此門_一生_レ凡育_レ聖、広利_二群品_一。歷代祖師、以_二此門_一以_レ心契_レ心、流_二通正統_一。天下宗師、以_二此門_一揭_レ示人天眼目、提_二持向上一路_一。乾坤以_二此門_一為_レ覆藏、日月以_二此門_一為_レ照臨、四時以_二此門_一為_レ寒暑、國王以_二此門_一治_二天下_一、百官以_二此門_一尽_レ忠尽_レ孝、庶人以_二此門_一治_二生産業_一、衲僧以_二此門_一撥_二天関_一掀_二翻地軸_一。失口説_二著仏之一字_一、漱_レ口三年。雖然如此、事無_二一向_一。若或尚留_二門外_一、不_レ免露_二箇消息_一去也」(統藏一〇・三九九b-c)とある。『蘭溪和尚語録』卷下「小參」の因事小參(小參15)には「豈不_レ見、雲門大師道、道_二仏一字_一、漱_レ口三年」とあるが、雲門文偃の言葉には見当たらない。ただし、『希叟和尚語録』の「法語」や『希叟和尚広録』卷四「法語」に収録された、希叟紹曇が北条時宗に与えた「日本温英_二禪人_一、持_二建長蘭溪和尚書_一、与_二平元帥_一求_レ語_一ないし、「示_二日本平將軍_一法語」に「道_二仏一字_一、漱_レ口三年、方有_二少分相応_一。若打_二祖師門_一下過、喫_二痛棒_一有_レ分」(統藏一二一・八九bと一二九a)とあることは参考になる。

(26) 回光返照：自己の智慧の光をめぐらし、自らを省みること。『臨濟録』「示衆」に「問、如何是西来意。師云、若有_レ意、自救不了。云、既無_レ意、云何_二祖得_レ法_一。師云、得者是不_レ得。云、既若不_レ得、云何是不_レ得底意。師云、為_二爾向_二一切处_一馳_二求心_一不_レ能_レ歇、所以祖師言、咄哉丈夫、將_レ頭覓_レ頭。你言下便自回光返照、更不_二別求_一、知_二身心与_二祖仏_一不_レ別、当下無事、方名_レ得_レ法」(大正藏四七・五〇二a)とある。

(27) 庭前栢樹子：「庭前栢樹子」の公案。趙州從諗が一僧の「祖師西来意」という問いに庭前の栢樹子と答えた公案。『古尊宿語録』卷十三の「趙州真際禪師語録」に「師上堂謂_二衆曰_一、此事的、没量大人出_二這裏_一不_レ得。老僧到_二滌山_一、僧問、如何是祖師西来意。滌山云、与_レ我将_二床子_一来。若是宗師、須_二以_二本分事_一接_レ人始得。時有_レ僧問、如何是祖師西来意。師云、庭前栢樹子。学云、和尚莫_レ將_レ境示_レ人。師云、我不_レ將_レ境示_レ人。云、如何是祖師西来意。師云、庭前栢樹子」(統藏一一八・一五四a-b)とあり、『聯灯会要』卷六の趙州從諗章(統藏一三六・二六四c-b)にも載る。一般には「無門関」第三十七則「庭前栢樹」(大正藏四八・二九七c)の公案によって知られる。

(28) 洞山麻三斤：「洞山麻三斤」の公案。麻三斤は布一着分が作れる麻糸。麻製の袈裟一着分の重さ。『無門関』

第二十則「洞山三斤」に雲門宗の洞山守初（九一〇〜九九〇）の問答として「洞山和尚、因僧問、如何是仏。山云、麻三斤」（大正藏四八・二九五b）とある。『古尊宿語録』卷三十八の『襄州洞山第二代初禪師語録』の上堂に「問、如何是仏。師云、麻三斤」（統藏一一八・三二三c）とあるのが初出である。詳しくは、入矢義高「麻三斤」（『禪学研究』六十二号、一九八三年）を参照。

(29) 洞山：雲門宗の洞山守初（九一〇〜九九〇）のこと。鳳翔府（陝西省）良原の傅氏。涇州（陝西省）で受戒して律を学ぶ。雲門文偃の法を嗣ぐ。乾祐元年（九四八）に請われて襄州（湖北省）洞山に住し、太平興國六年（九八一）に崇慧大師の徽号を受ける。「洞山麻三斤」の公案で知られる。『古尊宿語録』卷三十八に『襄州洞山第二代初禪師語録』一巻が存する。

(30) 郷談：それぞれの土地で用いられる言葉。ここでは、蘭溪道隆の言葉として「郷談未だ曉らめざれば」とあり、この時点で郷談がいまだ達者ではなかったため、塩田長老に問取するよう述べていることから、ここであるという郷談とは日本語のことと考えられる。『希叟和尚語録』『偈頌』の「日本玄志禪人語語」に「上人幼負「凌雲志」、十五為僧今廿二、鯨波不レ怕嶮如レ崖、遠涉要レ明「西祖意」、老松陰下扣「烟扉」、未レ透「慈溪劈箭機」、滿口郷談学「唐語」、帝都丁喚「那斯那」（統藏一一二・九〇d）とあるように、中国僧にとつて日本語は日本における郷談であった。「塩田和尚至引座普説」は建長寺が開山されて間もなく行なわれたと推定されるため、道隆はまだ日本語に精通していなかったとみられる。

(31) 蒙庵岳禪師、更有赤鬚胡：『叢林公語』に「之琰侍者、蒙里閑人也。丁未秋、自「育王」出訪「江涓」、清談款密。琰拳、蒙庵岳禪師、始応「浄衆辟命」、道過「鼓山」。竹庵珪禪師請為「衆説法」。竹庵引座云、鼓山三十棒、要「打」打「新浄衆」、大衆莫「是未」入「門合」喫「此棒」麼。咄。莫「是已」入「門合」喫「此棒」麼。咄。莫「是鼓山」盲枷瞎棒胡打乱打「麼」。咄。若是我臨際兒孫、便請单刀直入。岳遂登「座」云、鼓山三十棒、要「打」打「新浄衆」、大似「話」驢得「驢話」馬得「馬」。浄衆今日到来、要「騎」便騎、要「下」便下、而今突「出」人前、未「免」弄「真像」假。

以_レ手取_二拄杖_一云、今朝暫借_二鼓山拄杖_一、与_二大衆_一拔本去也。復放云、休休、將謂胡鬚赤、更有_二赤鬚胡_一。遂下座。蒙徐謂_レ琰曰、語錄所_レ不_レ載、何從得_レ之。琰曰、拙庵和尚。蒙遂橫首。琰曰、実柏堂每_レ以_レ此_レ拳似。蒙曰、竹庵合_レ喫_二者庵棒_一（統藏一一三・四五三a〜b）とある。『叢林公論』は、南宋代の者庵恵彬の講義録であるが、この話は、恵彬が淳熙十四年（一一八七）に之琰侍者なる人物から聞いたもので、語録にも収録されていない話とみられる。

(32) 蒙庵岳禪師_三：南宋初、臨済宗大慧派の蒙庵思岳（不詳）のこと。江州（江西省）の人。大慧宗杲（一〇八九〜一一六三）の法を嗣ぐ。漳州（福建省）の浄衆寺に出世し、福州（福建省）の鼓山や東禪寺に住持した。『統古尊宿語要』巻五に『東禪蒙庵岳和尚語』が収録される。法嗣に蓬庵宗逮・石庵知昭・寓庵德澗がいる。

(33) 浄衆_三：福州（福建省）龍溪県にある浄衆寺のこと。蒙庵思岳も住持し、『筠溪集』巻二十に「請_二岳老住_三漳州浄衆_一疏」を収める。また、『福建通志』巻九には宋代の詩人郭祥正（字は功夫）が撰した「浄衆寺法堂記」を収め、「宋郭祥正、浄衆寺法堂記云、閩之八州、漳最在_レ南。民有_レ田以耕、紡_レ苧為布、弗_レ逼_二於衣食_一。樂_レ善遠_レ罪、非_二七州之比_一」とある。

(34) 鼓山_三：福州（福建省）閩県の海浜に立つ鼓山湧泉寺のこと。湧泉寺は鼓山の白雲峰の麓にある。湧泉寺は、会昌の破仏によつて荒廢したが、その後、雪峰義存の法嗣である鼓山神晏が住し、大いに化を振るつた。明末の永覚元賢が編集した『鼓山志』十二巻が存する。

(35) 竹庵珪禪師_三：臨済宗楊岐派の竹庵士珪（一〇八三〜一一四六）のこと。成都（四川省）の史氏。仏眼清遠（一〇六七〜一一二〇）の法を嗣ぐ。政和年間（一一一一〜一一一八）の末に和州（安徽省）天寧寺に出世し、和州褒禅寺・廬山東林寺・福州鼓山等に住持した。詔によつて温州（浙江省）の雁蕩山能仁寺の開山となり、紹興十五年（一一四五）に温州の江心山龍翔寺に住持する。『統古尊宿語要』巻六の『竹庵珪和尚語』（統藏一一九・六八a〜七〇d）や『東林和尚雲門庵主頌古』（統藏一一八・三九八a〜四一一d）が存する。大慧宗杲（一〇八九〜一一六三）・宏智正覺（一〇九一〜一一五七）・真歇清了（一〇八八〜一一五一）らと交流を持ったことが知

られている。

(36) 将謂胡鬚赤、更有赤鬚胡：「胡鬚赤」は胡人のひげが赤いことで、「赤鬚胡」は赤いひげをした胡人のこと。

「将謂」とは、思い違いをする、誤解するという意味。赤ひげの胡人は自分だけかと思っていたが、なんと他にも同類がいたの意。胡人は西域人またはインド人。ここでは達磨のことを指す。『雲門匡真禪師広録』巻上に「上堂云、我有二句語、不敢望爾會、還有三人拳得一麼。良久云、将謂胡鬚赤、更有赤鬚胡。便下座」(大正藏四七・五五二c)とあり、『無門関』第二則「百丈野狐」の本則に「師至晚上堂、拳前因縁。黄檗便問、古人錯祇對一転語、墮五百生野狐身。転転不錯、合作三箇甚麼。師云、近前來与伊道。黄檗遂近前、与師一掌。師拍手笑云、将謂胡鬚赤、更有赤鬚胡」(大正藏四八・二九三b)とある。

(37) 瑩巖：塩田長老の道号か。玉村竹二氏も「玉村B・六〇六頁」で「瑩巖といふのは道号で、蘭溪は、さりげなく之を法語中にはめ込んだ」という可能性を指摘し、その場合には「塩田和尚は樵谷とは別人であるという説に有力な手がかりを与えることになる」と述べている。いずれにしても、「瑩巖」は固有名詞として読むことが自然であり、文脈からはこれを僧名か道号に比定したい。詳しくは「箱二〇一六」も参照。

(38) 袈裟角：『聯灯会要』巻二十七の梁山縁觀章に「僧問、家賊難防時如何。師云、識得後不為冤。云、識得後時如何。師云、眨向無生国裏。云、莫是他安身立命处也無。師云、死水不藏龍。云、如何是活水龍。師云、興雲不吐霧。云、忽遇興雲致雨時如何。師下繩床把住云、莫教湿却老僧袈裟角」(続藏一三六・四四四b)とある。

〔史料2〕

(1) 博多：ここでは、博多の円覚寺のこと。蘭溪道隆は来朝から一年間この寺に滞在した。「蘭溪和尚行状」には「到博多上岸、初住筑之円覚精舎」とあるが、円覚寺滞在中に道隆が大仏寺(永平寺)の道元に出した書簡には「寓太宰府博多」や「円覚寺比丘道隆」と記し、住持と明記はしていない。道元は鎌倉滞在中に、京都に滞在中の道隆に対して「円覚堂頭」の道隆宛てに返信している。また、後には円爾が入宋前に滞在した寺院でもあ

る（『聖一國師年譜』天福元年条）。江戸期に再興され、現在は臨濟宗妙心寺派で、瑞松山円覚寺として聖福寺の塔頭寺院の一つである。

(2) 京城……ここでは、京都東山の泉涌寺来迎院のこと。『元亨釈書』卷六「釈道隆」には「乃入都城萬泉涌寺之来迎院」とあり、蘭溪道隆は来朝二年目にこの寺に滞在した。泉涌寺来迎院は、弘法大師が唐土で感得したとされる三宝荒神を奉安して開き、建保六年（一二二八）に月翁智鏡が堂宇を開削したと伝えられる。『律苑僧宝伝』卷十一「来迎院月翁鏡律師伝」に「有蘭溪隆公、禪門巨匠也。師与之道契如金蘭。後歸本邦、道化益盛、緇衲奔趨。寛元年中、隆公東渡、首萬来迎院。師念其異邦之客、待之甚善」（大日仏一〇五・一二九）とあり、道隆が京都に滞在するに際して月翁智鏡が尽力したことを記している。泉涌寺は当時は律宗であったが、現在は真言宗泉涌寺派の総本山。

(3) 十五年……蘭溪道隆が日本に来てからの年月。蘭溪道隆の来朝は寛元四年（一二四六）であるから、弘長元年（一二六一）に当たることになる。一応、前後一年程度の誤差については想定しなければならぬが、弘長二年（一二六一）は蘭溪道隆が京都滞在中であるのに書簡中に檀那（北条時頼）の近況についての言及があることから符合しない。文応元年（一二六〇）の書簡である可能性は残るが、書中に蘭溪道隆の味方が寺内に少なくなっていることが記されているため、元庵普寧が建長寺に到着した文応元年十月以降の書簡ではないかと判断される。弘長元年の書簡である可能性がより高いことは、「箱二〇一六」も参照されたい。

(4) 同心合力者、眼底全無……蘭溪道隆の周辺に協力者が少なくなっていた様を指すか。『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」の上堂（上堂197）に「上堂。睦州指臨濟去見黄檗。虎頭生角。德嶠辞龍潭而訪大滬。彪眼撐眉。建長不望諸人有此作略。只図三兄五弟、知道斧頭元是鉄、飯自米中来。衆中莫有不肯底麼。出来拽下唐僧、痛打一頓、也使惡声流布此国。若也不薦、你死我活」（蘭溪全一・五五a）とあって、特に「出で来たりて唐僧を拽き下ろし、痛く打つこと一頓し、也た惡声をして此の国に流布せしめよ」とあるのは厳しい物言いである。この上堂が弘長元年（一二六一）春の上堂であり、この頃に蘭溪道隆に対する惡声が当時あ

ったことを窺わしめるのである。また、『蘭溪和尚語録』巻下「法語」の「示円範藏主」（法語6）は、弘長二年（二二六二）に蘭溪道隆が建仁寺に選つてから無隱円範に与えた法語であるが、ここに「事を省せず理に達せざる者に逢う毎に、寸釘子を以て其の喙に錐す。是を以て、愈いよ相い従う者の少なきを見る」（蘭溪全一・九八a）とあり、当時の蘭溪道隆に付き従つた者が少なかったことを窺うことができよう。これらの記述は、年次的には、兀庵普寧の来朝と無関係だったとは考えにくい。

(5) 檀那信不良者讒言之咎：檀那である北条時頼が、「良からざる者の讒言」を聞いていたことを記す。恐らくその結果としてであるが、「同心合力の者」が「眼底に全く無」くなっていたらしく、蘭溪道隆の建長寺における立場が悪くなっていたらしい。この点、文応元年（二二六〇）十月以降に兀庵普寧が建長寺に入り、弘長二年（二二六二）一月以降に兀庵普寧が建長寺住持となり、蘭溪道隆が建仁寺住持として京都に赴いていることは注目されよう。この手紙を仮に文応元年七月二十一日に比定した場合、兀庵普寧来朝前から、蘭溪道隆の建長寺における立場が悪くなっており、それにも拘わらず、蘭溪道隆が兀庵普寧を中国から呼び寄せたことになってしまふのである。蘭溪道隆が来朝してから十五年目の書状である点なども一致することなどから、本書状は弘長元年（二二六一）七月二十一日と比定するのが自然であろう。

(6) 檀那：建長寺檀越の北条時頼（二二七〇～二二六三）のこと。北条泰時の孫であり、鎌倉幕府第五代執権。幕府当初よりの御家人である三浦氏を滅ぼし、また訴訟の公正迅速を目的として評定衆の下に引付衆を付設し合議制を進展させるなど、執権政治体制を強化した。さらに、渡来僧の蘭溪道隆を鎌倉に招き、本格的な禅宗寺院として建長寺を創建して道隆を開山に迎えた。自らも出家して最明寺殿道崇と称し、鎌倉における禅宗展開の礎を作った。高橋愼一郎『北条時宗』（人物叢書、吉川弘文館、二〇一三年）も参照。

(7) 長庚：天童山景德禅寺のこと。明州（浙江省）鄞県の太白峰天童山景德禅寺のこと。中国五山第二位。西晋の永興元年（三〇四）に義興により開創され、唐の至徳二年（七五七）に伽藍を現在地に移した。南宋代には宏智正覚・虚庵懷徹・長翁如浄らが住し、日本からも栄西・道元が来山受法したほか、寒巖義尹や徹通義介も掛搭し

た。榮西は天童山の虚庵懐敏のもとで禅旨を究め、臨済宗黄龍派を伝えた。また、蘭溪道隆も日本に赴く直前に天童山に居住していた。明代の『天童山志』五卷、清代の『新纂天童山志』十卷などが存する。

(8) 二十年：蘭溪道隆が塩田和尚と同参してからの年月。弘長元年（一二六一）をこの書簡が記された年時と比定した上で、仁治二年（一二四一）に当たると考えられる。道隆は塩田和尚と天童山にて「同入同出」であったことを述べているので、この年が二人の天童山に入山した年と考えられる。

(9) 巖頭：青原下の巖頭全藏（八二八〜八八七）のこと。全豁とも。泉州（福建省）南安県の柯氏。はじめは経律を学んでいたが、雪峰義存・欽山文邃と親交を持つてからは仰山慧寂の会下に参じ、青原下の徳山宣鑑の法を嗣ぐ。洞庭湖畔の鄂州（湖南省）の臥龍山（巖頭）に住する。賊の刃に切られて死す。清儼大師と諡する。

(10) 雪峰：青原下の雪峰義存（八二二〜九〇八）のこと。泉州（福建省）南安の曾氏。青原下の徳山宣鑑の法を嗣ぐ。福州（福建省）の雪峰山に住する。中和二年（八八二）には禧宗皇帝より真覚大師の号と紫衣を賜る。派下に玄沙師備、雲門文偃など多くの禅者を打出し、江南の地に独特の宗風を鼓吹した。『雪峰真覚禅师語録』二卷があり、卷末に年譜を付する。

(11) 拳踢相交：拳踢相応とも。絶妙に呼吸の合うことのとえ。『碧巖録』第十六則「鏡清草裏漢」の本則評唱に「子降而母啄、自然恰好同時。鏡清也好。可謂拳踢相応、心眼相照」（大正蔵四八・一五六b）とある。

(12) 傾蓋：初めて会って親しくなること。孔子が道で程子と会い、蓋（傘）を傾けて語り合った故事に因む。『孔子家語』「致思篇」に「孔子之郷、遭程子於塗、傾蓋而語、終日甚相親。顧謂子路曰、取束帛以贈先生」とある。

〔史料4〕

(1) 黄蘗在南泉、帰本位而坐：『聯灯会要』卷七の筠州黄蘗希運章に「師在南泉、為首座。一日捧鉢、向泉位上坐。泉入堂、見乃問、長老甚年中行道。師云、威音王已前。泉云、猶是王老师兒孫在、下去。師便過第二位上坐。泉休去」（統蔵一三六・二七四b）とある。『從容録』第七十六則「首山三句」の本則に「黄蘗為南

泉首座。一日占_二泉座位_一。泉至問、首座甚年行道。藥云、威音王仏以前。泉云、猶是王老師兒孫、下去。藥便退歸_二本位_一坐_二(大正藏四八・二七五b)とある。

(2) 黃檗_一…南嶽下の黄檗希運(不詳)のこと。福州(福建省)閩県の人。福州黄檗山で出家し、後に百丈懷海の法を嗣ぐ。相国裴休に請われて洪州(江西省)に黄檗山を開いて開祖となる。臨済宗の祖である臨済義玄を打出した。『伝心法要』が存する。

(3) 南泉_一…馬祖下の南泉普願(七四八〜八三四)のこと。鄭州(河南省)新鄭の王氏。馬祖道一の法を嗣ぐ。池陽(安徽省)の南泉山に住する。自ら王老師と称し、趙州從諗や長沙景岑など多くの弟子を接化した。

(4) 好事不如無_一…うまい話はないほうが良い。『古尊宿語録』卷十四「趙州真際禪師語録之余」(趙州録)に「師從_二殿上_一過、見_二僧禮拜_一。師打一棒。云、禮拜也是好事。師云、好事不_レ如_レ無」(統藏一一八・九〇a)とあり、『碧巖録』第八十六則「雲門有光明在」の本則に「拳。雲門垂語云、人人尽有_二光明_一在、看時不_レ見暗昏昏、作麼生是諸人光明。自代云、厨庫三門。又云、好事不_レ如_レ無」(大正藏四八・二一一b)とある。

〔史料5〕

(1) 禪興_一…鎌倉の禪興寺のこと。もとは鎌倉山之内に北条時頼を開基とし蘭溪道隆を開山とした最明寺と号した寺があった。『新編相模国風土記稿』では、この最明寺を時頼の亡き後に北条時宗が禪興寺と名を改めて再興したと伝えている。後には十利にもなる。禪興寺は廃絶してしまいが、臨済宗建長寺派の明月院が禪興寺塔頭寺院として存続している。

(2) 古云、虚而往実而帰_一…「虚往実帰」とも。心を空しくして行けば、道理をよく得られ満足して帰ることができるとある。また、学ばずに行つて、徳を得て帰ること。「莊子」「徳充符篇」に「立_レ不_レ教、坐_レ不_レ議、虚而往、実而帰」とある。

〔史料6〕

(1) 知恩必報_一…「一飯千金」の故事成語を踏まえた言葉。『史記』「淮陰侯列伝」に「(韓)信釣_二於城下_一、諸母漂

有_レ二母一見_レ信飢_レ飯_レ信。竟_レ漂_レ数十日。信喜、謂_レ漂母_レ曰、吾必有_レ以_レ重報_レ母。(中略)信至_レ国、召_レ所_レ從食_レ「漂母_上、賜_二千金_一」とある。

(2) 見義勇為_レ：『論語』「為政第二」に「子曰、非_レ其鬼_一而祭_レ之、諂也。見_レ義不_レ為_レ、無_レ勇也」とあるのを踏まえた言葉。

(3) 万松関_レ：石川県大乘寺所蔵『五山十刹函』によれば、「諸山額集」の「外山門額」に「万松関(天童)」とあって、天童山の山門額に「万松関」と掲げられていたことが記されている。『天童寺志』巻二には「入山之関有_レ三、一曰_二万松関_一、二十里松之始、在_二小白嶺外_一。二曰_二鉄蛇関_一、在_二小白嶺上_一、心鏡禪師築_二鎮蟒塔於此_一故名。三曰_二清関_一、在_二外万工池左_一有_二橋跨澗上_一」とあるから、天童山の最も外にあつた関であり、山門ということになるだろう。無学祖元の語録『仏光国師語録』巻二「台州真如寺語録」に「万松関到翠鎖亭前、妙高台到太白峰頂」(大正蔵八〇・一四一a)とあることから、天童山において最初に通過する場所であることが確認される。

(4) 太白峰頭_レ：太白峰天童山景德禪寺のこと。既出「史料2」。

〔史料7〕

(1) 八句陀羅尼_レ：『楞嚴咒』の最末尾の陀羅尼のことで、「唵」以下の八句で、八句陀羅尼という。日本の禅林で八句陀羅尼を唱える事例として、鎌倉期には蘭溪道隆の『弁道清規』、心地覚心の「誓度院條々規式」の「三時勤行事」(『鎌倉遺文』第二十三卷「二七八六七」)が確認される。また、永祿八年(一五六五)頃に撰述された『諸回向清規』巻四「諸葬礼法式之部」(大正蔵八一・六六四c)に、中陰の間の勤行として、後夜坐禪(五更)の後と、黄昏坐禪(初更)の前に「八句陀羅尼」の諷誦が規定される。他に、『小叢林略清規』巻上「日分清規」第二(大正蔵八一・六九三b)、毎日の晩課で「八句陀羅尼」を諷誦していることが確認される。

(2) 龍華三会_レ：弥勒三会とも。弥勒菩薩が五十六億七千万年の後、兜率天から下つてこの世に出で、華林園中の龍華樹のもとで成道し、三度法会を開いて人々を教化することから、「龍華三会」と呼ばれる。鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏經』では三会の様子を「爾時弥勒仏於_二華林園_一、其園縦広一百由旬、大衆滿_レ中。初会說法、九十六億

人得_二阿羅漢_一、第二大会說法、九十四億人得_二阿羅漢_一、第三大会說法、九十二億人得_二阿羅漢_一。弥勒仏既転_二法輪_一度_二天人_一已_一（大正藏一四・四二五b）としている。

〔史料8〕

(1) 観物：臨済宗大慧派の観物大観（一二〇一〜一二六八）のこと。慶元府（浙江省）鄞県横溪の陸氏。北磻居簡の法を嗣ぐ。臨安府（浙江省）法相禪院、安吉州（浙江省）顯慈禪寺、紹興府（浙江省）象田興教禪院、慶元府（浙江省）智門禪寺、大慈山（浙江省）教忠報国禪寺、明州（浙江省）阿育王山広利禪寺に住した。咸淳三年（一二六七）に『古尊宿語要』が再刊された際に総序を撰している。語録として『物初和尚語録』、詩集として『物初贍語』八巻が存する。

〔史料9〕

(1) 信州安楽：信州塩田（長野県上田市別所）の崇福山安楽寺のこと。鎌倉後期に樵谷惟僊によって開山された。後に兵火を受け、天平年間（一五九六〜一六一五）に曹洞宗の高山順京が再興して、曹洞宗に改めた。開山の樵谷惟僊像、二世の幼年恵仁像が奉られ（ともに重文）、寺内には鎌倉後期に造塔された八角三重塔（国宝）が存する。

(2) 円照：無準師範の勅号、仏鑑円照禪師の略。臨済宗破庵派の無準師範（一二七七〜一二四九）のこと。劍州（四川省）梓潼県の雍氏。九歳で陰平山の道欽について出家し、紹熙五年（一一九四）に具足戒を受ける。その後、阿育王山の拙庵徳光（一二一一〜一二〇三）に参じ、蘇州（江蘇省）西華秀峰寺の破庵祖先（一一三六〜一二一一）に参じて法を嗣ぐ。明州（浙江省）清涼寺に住持し、鎮江（江蘇省）の焦山、明州の雪竇山・阿育王山を経て、徑山の住持となり、理宗から仏鑑禪師の号を賜る。蘭溪道隆も宋地で無準師範に参じており、建長寺二世の兀庵普寧（一一九八〜一二七六）、建長寺四世で円覚寺開山の無学祖元（一二二六〜一二八六）が法嗣にいる。また、日本僧としては東福寺の円爾（一二〇二〜一二八〇）、松島瑞巖寺の性西法心などが入宋して無準師範の法を嗣いでおり、日本の禅界に与えた影響は極めて大きい。『仏鑑禪師語録』六巻が存する。

(3) 仏光：臨済宗破庵派の無学祖元（一二二六～一二六八）のこと。慶元府（浙江省）鄞県の許氏。径山の無準師範の法を嗣ぐ。杭州（浙江省）浄慈寺の北磻居簡について出家、径山の無準師範、靈隱寺の石溪心月、阿育王山の偃溪広聞・虚堂智愚、大慈寺の物初大観に歴参す。東湖の白雲庵、台州（浙江省）の真如寺に住し、元の戦乱を避ける為に温州（浙江省）能仁寺に移る。その後、天童山の環溪惟一の会下に有ったとき、日本の北条時宗から高僧を日本に招きたいとの書簡が届き、祖元は推されて至元十六年（一二七九）に来朝し、建長寺の住持となる。また、弘安五年（一二八二）には円覚寺の開山となり、建長・円覚寺を兼官した。『仏光国師語録』十巻が存する。

(4) 聖一：臨済宗聖一派祖の円爾（一二〇二～一二八〇）のこと。駿河（静岡県）の人。五歳で久能山に入り、天台教学を学ぶが、のちに上野（群馬県）長楽寺の栄朝に師事する。嘉禎元年（一二三五）に入宋して各地を歴参したのち、無準師範の法を嗣ぐ。仁治二年（一二四二）に帰朝し、建長七年（一二五五）に東福寺の開山となる。応長元年（一二二一）、花園天皇より聖一国師と諡される。

(5) 雪巖：臨済宗破庵派の雪巖祖欽（？～一二八七）のこと。婺州（浙江省）の人。径山の無準師範の法を嗣ぐ。溧州（湖南省）龍興寺、湖西（湖南省）道林寺、処州（浙江省）光孝禅寺、袁州（江西省）仰山禅寺に住す。『雪巖和尚語録』が存する。法嗣に靈山道隱（一二五五～一三二五）がおり、靈山道隱は後に来朝してその法を日本に伝えた。

(6) 環溪：臨済宗破庵派の環溪惟一（一二〇二～一二八一）のこと。資州（四川省）墨池の賈氏。径山の無準師範の法を嗣ぐ。建寧府（福建省）瑞巖寺、臨江軍（江西省）恵力寺、隆興府（江西省）宝峰寺・黄竜山崇恩寺、瑞州（江西省）黄巖山報恩光孝寺、袁州（江西省）仰山太平興国寺、福州（福建省）雪峰山崇聖寺、慶元府（浙江省）天童山景德禅寺に住する。天童山住持中に、北条時宗より禅僧を将来したい旨の書簡が届き、無学祖元を推した。その際、惟一法嗣の鏡堂覚円も随行させており、覚円は無学祖元と共に来朝しその法を日本に伝えた。

『環溪和尚語録』二巻が存する。

(7) 兀庵：臨濟宗破庵派の兀庵普寧（一一九八～一二七六）のこと。西蜀（四川省）の人。無準師範の法を嗣ぐ。

景定元年（文応元年、一二六〇）に来朝し、博多聖福寺、京都東福寺を経由して鎌倉建長寺に入る。弘長二年（一二六二）に蘭溪道隆が京都建仁寺に移ると、建長寺の第二世となった。道隆の後を受けて北条時頼を接化し、弘長二年に普寧は時頼に印可した。時頼が遷化すると、文永二年（一二六五）に帰国した。婺州（浙江省）の雲黄山宝林寺（双林寺）や、温州（浙江省）の江山龍翔寺に住する。至元十三年十一月二十四日に示寂。宗寛禪師と諡する。『兀庵和尚語録』二巻が存する。

(8) 別山：臨濟宗破庵派の別山祖智（一一九三～一二六〇）のこと。蜀果州（四川省）順慶の人。径山の無準師範の法を嗣ぐ。洞庭（湖南省）天王寺、湖州（浙江省）西余大覚寺、建康府（江蘇省）蔣山太平興国禪寺に住する。南宋宝祐元年（一二五三）に明州（浙江省）天童山景德禪寺が全焼したことから、その再建という大任を担って天童山の住持となり、以後、再建に努めながら示寂するまで天童山の住持であり続けた。日本僧の樵谷惟儼が入宋して、天童山の別山祖智に参じて法を嗣ぎ、帰朝してから信州（長野県）塩田に安楽寺を開いている。『別山和尚語録』はかつて存していたらしいが、現存しておらず、内容も伝わっていない。

(9) 天童：天童山景德禪寺のこと。既出「史料2」。

(10) 相万寿：相州の乾明山万寿寺のこと。かつて鎌倉（現在の神奈川県鎌倉市）にあった寺院で、関東十刹の一つ。現在は廃寺となっているため詳細はよくわからないが、弘安九年（一二八六）に北条貞時が時宗の供養のために創建した寺院で、無学祖元（一二二六～一二八六）が開山と伝えられている。『鹿山略志』「十刹諸山廢地之分」に「万寿寺、山号乾明、在鎌倉長谷郷、開祖勅諡円満常照国師。弘安九年丙戌、平元師貞時、為先考法光寺殿周諱追嚴草創当寺、請国師為開山第一祖、後陞十刹之位。中古罹災諸宇尽亡、今不知其寺基。」（『鎌倉志料』第一巻、一四五頁）とある。

(11) 別山師祖、嘗有言、莫謂空来又空返：不詳。かつて、日本僧の俊侍者が入宋して、『別山和尚語録』の跋文を希叟紹曇に得ており（続蔵一二二・四六一c）、日本に別山祖智の語録が伝わっていたとみられる。恐らくは、

その語録の中に記されていた言葉かと想定されるが、『別山和尚語録』は現存していない。

〔史料10〕

- (1) 安樂…崇福山安樂寺のこと。既出〔史料9〕。
- (2) 帰去…故郷に帰ろう。東晋・宋の詩人陶淵明（陶潜、三六五〜四二七）が、官を辞して帰郷し、田園生活を送ろうとする心境を記した「帰去来辞」に因む言葉。
- (3) 栽松…道者栽松。前世に栽松道者と称された五祖弘忍（六〇一〜六七四）を踏まえる。五祖弘忍が前世で蕪州（湖北省）黄梅の破頭山（双峰山）の栽松道者であつて、四祖道信に法を聞こうとしたが、高齡のために許されなかつた。このため、道者は一人の女性に託胎して生まれ変わり、七歳で道信に謁したとする。この話は覺範慧洪の『林間録』巻上に「道者栽松」（統蔵一四八・二九五d〜二九六a）として詳しく載る。
- (4) 折桂…「桂林一枝」の故事。中国で科擧に合格すること。また、進士の試験に首席で合格すること。日本においては、律令制で官吏登用試験の策試に合格することを指す。『晋書』「郗詵伝」に「郗詵（中略）遷雍州刺史、武帝於東堂会送。問詵曰、卿自以為何如。詵对曰、臣拳賢良、对策為天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉」とある。
- (5) 嶺南…「嶺南人無仏性」のこと。五祖弘忍が六祖慧能に示した言葉。『景德伝灯録』卷三の五祖弘忍章には「姓盧名慧能。自新州来参謁師。問曰、汝自何来。曰、嶺南。師曰、欲須何事。曰、唯求作仏。師曰、嶺南人無仏性。若為得仏。曰、人即有南北、仏性豈然」（大正蔵五一・二二二c）とある。
- (6) 廬公…老廬。六祖の曹溪慧能（六三八〜七二三）のこと。范陽（河北省）の盧氏。新州（広東省）に生まる。五祖弘忍の法を嗣ぐ。韶州（広東省）曲江県の曹溪山宝林寺（後の南華寺）で禅風を發揮した。大鑑慧能、六祖慧能ともいう。著作に『金剛経解義』が存する。門下には青原行思、南嶽懷讓、荷沢神会などがあり、後世にいたつて発生した五家七宗の禅はすべて慧能の法系から展開した。

〔史料13〕

(1) 崇福山安樂禪寺：崇福山安樂寺のこと。既出「史料9」。

(2) 常樂教寺：信州塩田（長野県上田市別所）に存する天台宗寺院の常樂寺のこと。金剛山照明院と号する。北向に観音で知られる。慈覚大師円仁（七九四〜八六四）が安鎮の法を修した際に、観音菩薩のお告げにより、北向きに開創したと伝えられる。古来、厄除観音として名高い。常樂寺は観音堂創建のとき三樂寺（常樂、安樂、長樂）の一寺として建立され、安和二年（九六九）に再興したと伝える。また、寿永元年（一一八二）に木曾義仲の戦乱により焼失し、源頼朝により再興された。

(3) 東福：京都の恵日山東福寺のこと。京都市東山に存し、後に京都五山の第四位となる。嘉禎二年（一二三六）に九条道家（一一九三〜一二五二）が発願し、無準師範の法を嗣いで帰国していた円爾を招き、開山として迎えた。伽藍は建長七年（一二五五）に完成する。東福寺の寺号は、東大寺と興福寺から一字づつとったもの。東福寺は円爾の系統（聖一派）のみが住持する一流相承刹の寺院である。東福寺は十方住持制である五山の第四位であったが、一流相承刹を維持したため、聖一派の中心道場となった。現在は、臨濟宗東福寺派の大本山。

(4) 円爾：円爾のこと。既出「史料9」。

(5) 金山：杭州（浙江省）余杭県の径山興聖万寿寺のことで、五山の第一位。天目山の東北の峰にあり、径が天目山に通づることから径山と名付けられた。唐の天宝年間（七四二〜七五六）に国一禪師法欽が庵を結び、代宗の命で大暦四年（七六九）に伽藍が建立された。南宋代に大慧宗杲（二〇八九〜一二六三）・無準師範（一一七七〜一二四九）・虚堂智愚（一一八五〜一二六九）などが住した。また、日本僧の道元や円爾もこの寺に参学している。元末に兵火によって焼け、洪武年間（一三六八〜一三九八）に重建されている。『径山志』十四巻が存する。

(6) 無準：無準師範のこと。既出「史料8」。

(7) 平時頼：北条時頼のこと。既出「史料2」。

〔史料14〕

- (1) 別山智和尚：別山祖智のこと。既出「史料9」。
- (2) 安楽寺：崇福山安楽寺のこと。既出「史料9」。
- (3) 拳曹山辞洞山因縁ノ俗氣猶在：『仏鑑禪師語録』巻四「普説」に「曹山辞洞山。洞山云、子向什麼処去。曹山云、不変異処去。洞山云、不変異処豈有去耶。曹山云、去亦不変異。師云、好大衆、田地穩密、血脉貫通、即不無曹洞父子。檢点将来、俗氣猶在」(続蔵一二一・二六二c)とある。
- (4) 曹山辞洞山因縁：『聯灯会要』巻二十二の曹山本寂章に「泉州莆田張氏子。謁洞山。山問師、名甚麼。師云、本寂。云、何不向上道。師云、不道。云、為甚麼不道。師云、不名本寂。洞山器之。師辞洞山。山問、甚処去。師云、不変異処去。洞云、不変異処。豈有去耶。師云、去亦不変異」(続蔵一三六・一九〇b)とある。
- (5) 曹山：曹洞宗祖の曹山本寂(八四〇〜九〇二)のこと。泉州(福建省)莆田県の黄氏。洞山良价の法を嗣ぎ、撫州(江西省)宜黄県の曹山崇寿院に住した。洞山の「五位顯訣」を伝承して大成させた。後代に編纂された『撫州曹山本寂禪師語録』二巻、『撫州曹山元証禪師語録』一巻などがある。
- (6) 洞山：曹洞宗祖の洞山良价(八〇七〜八六九)のこと。越州(浙江省)の愈氏。南泉普願や瀉山靈祐に歴参し、青原下の雲巖曇晟(七八二〜八四一)の法を嗣ぐ。筠州(江西省)洞山広福寺(普利院)に住する。法嗣に雲居道膺・曹山本寂らがいる。
- (7) 仏鑑和尚：無準師範のこと。既出「史料8」。
- (8) 師拈曰ノ解猶在：「史料15」の参考文献を参照。
- 〔史料15〕
- (1) 相州寿福：鎌倉の龜谷山寿福寺のこと。神奈川県鎌倉市扇ヶ谷に存し、後に鎌倉五山の第三位となる。正治二年(一二〇〇)に、源頼朝の夫人北条政子の発願によって伽藍が建立され、栄西を開山とした。道隆は京都から鎌倉に到着し、常楽寺に入寺する前に寿福寺の大歇了心のもとに寓居していた。後には道隆は寿福寺の住持にも

なっている。道隆の他にも円爾・心地覚心・大休正念などが歴任に名を連ねており、鎌倉における禅宗の展開に与えた影響は大きい。

- (2) 秋潤道泉：臨済宗仏源派の秋潤道泉（一二六三～一三二三）のこと。備中（岡山県）の人。大休正念の法を嗣ぐ。また、禅興寺の樵谷惟僊に参じて秉弘している。山城（京都）勝林寺、鎌倉大慶寺、鎌倉寿福寺の住持となる。『秋潤泉和尚語録』三巻が存する。

- (3) 禅興：鎌倉の禅興寺のこと。既出「史料5」。

- (4) 連城璧：連城璧。中国の春秋時代・戦国時代の故事にあらわれた名玉。中国の戦国時代、秦の昭王が十五の城と交換しようと申し入れた趙の恵王が秘蔵していた名玉（和氏璧）のこと。『史記』『廉頗伝』に「趙恵文王時、得_二楚和氏璧_一。秦昭王聞_レ之、使_三人遺_二趙王書_一、願_レ以_二十五城_一請_レ易_レ璧_一」とある。

- (5) 荆山：荆山からでる玉。楚の国の下和が、楚の王に献上した名玉。厲王・武王に献上した際には雑石と鑑定され、その都度片足ずつ切られてしまったが、文王の際に名玉であることがわかり、その功績を称えられて下和の名を取り「和氏璧」と称せられた。荆山璧ともいう。『韓非子』『和氏』に「楚人和氏、得_二玉璞_一楚山中、奉而献_二之厲王_一。厲王使_二玉人相_レ之。玉人曰、石也。王以_レ和為_レ誑、而刖_二其左足_一。及厲王薨、武王即位。和又奉_二其璞_一而献_二之武王_一。武王使_二玉人相_レ之。又曰、石也。王又以_レ和為_レ誑、而刖_二其右足_一。武王薨、文王即位。和乃抱_二其璞_一而哭_二于楚山之下_一、三日三夜、泪尽而繼_レ之以_レ血。王聞_レ之、使_二人問_二其故_一。曰、天下之別者多矣、子奚哭_二之悲_一也。和曰、吾非_レ悲_レ別也、悲_二夫宝玉而題_レ之以_レ石、貞士而名_レ之以_レ誑、此吾所以_レ悲_一也。王乃使_二玉人理_二其璞_一而得_レ宝焉、遂命曰、和氏之璧_一」とある。

- (6) 仏鑑：無準師範のこと。既出「史料8」。

- (7) 甜瓜徹蒂甜、苦瓠連根苦：あまうりは蒂^{へた}まであまく、にがうりは根までにかい。本性は争えないことをいう。

『五灯会元』巻九の無著文喜章に「文殊嘗現_二於粥鉢上_一。師以_レ攪粥筯、便打曰、文殊自文殊、文喜自文喜、殊乃説偈曰、苦瓠連_レ根苦、甜瓜徹_レ蒂甜。修行三大劫、却被_二老僧嫌_一」（統藏一三八・一九三b）とある。また『碧

巖録』第八十七則「雲門葉病相治」の本則著語（大正蔵四八・二二四c）にも載る。
 「史料16」

(1) 明南浦：臨済宗松源派の南浦紹明（一一三三〜一三〇八）のこと。駿河（静岡県）の藤原氏。建徳寺浄弁に習い、後に建長寺の蘭溪道隆に参ずる。正元元年（一二五九）に入宋して、虚堂智愚の法を嗣ぐ。文永四年（一二二六）に帰国し、当初は道隆住持の建長寺で蔵主を勤める。筑前（福岡県）興徳寺、太宰府（福岡県）崇福寺に住すること三十三年、嘉元三年（一一三〇）に京都の万寿寺に住し、次いで嘉元寺の開山となる。その後、鎌倉の建長寺に住持する。大応国師と諡する。『大応国師語録』三巻が存する。

(2) 儉約翁：臨済宗大覚派の約翁徳儉（一一二四〜一三二〇）のこと。もと相模（神奈川県）鎌倉の路傍の菓子である。幼きときより建長寺の蘭溪道隆に預けられ、十六歳で東大寺にて受戒。道隆が建長寺から建仁寺へ移るに従って侍し、後に入宋して諸師参学する。帰国後に、鎌倉の長勝寺の開山となり、東勝寺、浄妙寺、禅興寺を歴住する。その後、京都建仁寺、鎌倉建長寺の住持となり、文保二年（一一三二）に後宇多上皇の請によつて、京都南禅寺の住持となる。仏灯国師と諡する。『仏灯国師語録』一巻が存する。

(3) 照無象：臨済宗松源派の無象静照（一一三三〜一三〇六）のこと。相模（神奈川県）鎌倉の北条氏。東福寺の円爾に参じ、諸師参学する。建長四年（一一五二）に入宋し、虚堂智愚の法を嗣ぎ、文永二年（一二六五）に帰国。山城（京都）平安山仏心寺、鎌倉の龍華山真際精舎、常陸（茨城県）興禅寺、鎌倉の浄智寺の開山となる。筑前（福岡県）聖福寺、相模（神奈川県）大慶寺に住する。比叡山からの排斥を受け、『興禅記』を著した。法海禅師と諡する。『無象和尚語録』二巻が存する。

(4) 虚堂愚：臨済宗松源派の虚堂智愚（一一八五〜一二六九）のこと。四明（浙江省）象山の陳氏。息耕叟と称する。臨済宗松源派の運庵普巖の法を嗣ぐ。諸刹を歴住した後、明州の阿育王山広利禅寺、杭州の南屏山浄慈寺、径山興聖万寿寺に住する。『虚堂和尚語録』十巻が存し、末尾に法嗣の閑極法雲が撰した「行状」を収める。智愚の法を伝えて日本に帰国した法嗣に南浦紹明（大応国師、一一三五〜一三〇八）と巨山志源が存し、とくに紹

明の流れである大応派は大徳寺派と妙心寺派を形成し、現今の日本臨濟宗の源流となる。智愚は淨慈寺の住持として『蘭溪和尚語録』を校勘し、景定四年（一二六四）二月に跋文を寄せているが、その一年後、咸淳元年（一二六五）三月に智愚は同じ淨慈寺の住持として道元の『永平元禪師語録』に跋文を寄せている。

(5) 偃溪聞：臨濟宗大慧派の偃溪広聞（一一八九〜一二六三）のこと。福州（福建省）侯官県の林氏。浙翁如琰の法を嗣ぐ。慶元府（浙江省）の淨慈寺・香山智度寺・万寿寺、明州の雪竇資聖寺・阿育王山広利禪寺、杭州の南屏山淨慈寺・北山靈隱寺・徑山万寿寺に住する。仏智禪師と諡す。『偃溪和尚語録』二巻が存する。

(6) 介石朋：臨濟宗大慧派の介石朋のこと。閩県（福建省）の人。浙翁如琰の法を嗣ぐ。婺州（浙江省）雙林寺、杭州（浙江省）南屏山淨慈寺に住する。福建子と称した。

(7) 簡翁敬：臨濟宗虎丘派の簡翁居敬のこと。痴絶道冲の法を嗣ぐ。杭州（浙江省）南屏山淨慈寺、明州（浙江省）天童山景德禪寺天童山に住する。日本僧の約翁徳儉が入元して参じている。また、九州国立博物館に所蔵される「紙本墨画布袋図」は、牧溪筆とされる布袋図に、簡翁居敬が讃文を記したものであり、重要文化財に指定されている。

(8) 天童：天童山景德禪寺のこと。既出「史料2」。

(9) 育王山：明州（浙江省）阿育王山広利寺のことで、五山の第五位。東晋の安帝義熙元年（四〇五）に塔・禪室を作り、劉宋元嘉十二年（四三五）に人曇摩蜜多が寺塔を建立して広利寺と名づけ、梁の普通三年（五二二）に武帝が修復して阿育王の号を与え、宋の太平興國三年（九七八）に勅にて仏舍利を迎えた。治平三年（一〇六六）に雲門宗の大覚懷璉（一〇一一〜一〇九三）が住持したことにより、禪寺として名を上げた。南宋代に大慧宗杲・拙庵徳光・無準師範・虚堂智愚などが住した。日本僧の栄西や道元もこの寺に参学している。『明州阿育王山志』十巻が存する。

(10) 観物初：観物大観のこと。既出「史料8」。

【史料17】

(1) 観音…観音菩薩のこと。アヴァローキテーシュヴァラ(梵: Avalokiteśvara)の漢訳であり、鳩摩羅什は観世音菩薩、玄奘三蔵は観自在菩薩と漢訳した。観世音は、世間の衆生が救いを求めているのを聞いて、直ちに救済するの意。観自在は、もろもろの存在を自由自在に観ることを意味する。観音の住処は、補陀落(梵: Potalaka)と云々。

〔史料8〕

(1) 東光…甲斐国(山梨県)の法蓋山東光寺のこと。文永年間(一二六四〜一二七四)に蘭溪道隆が禪宗に改めたと伝えられる。『甲斐国志』七十四「仏寺部第二」の山梨県万力筋の条に「一、法蓋山東光寺(東光寺村)臨濟宗妙心寺末、府中五山之一ナリ、(中略)開山大覚禪師、文永中ノ草創ナリ」とある。

(2) 亀谷…亀谷山寿福寺のこと。既出〔史料15〕。

〔史料19〕

(1) 信州僧承仙…不詳。『律苑僧宝伝』卷十一「思真、承仙、思敬、頼尊、四律師伝」に「思真、承仙、思敬、頼尊、四律師、皆正法国師之門人也。行解相貫、名声甚重。及国師主三泉涌、相与竭誠扶其化。国師擢之以高職。」(大日仏一〇五・二五三)と立伝されているが、内容からは、かえって具体的には何も伝わっていないかっただろうことを印象づけている。

(2) 当寺…山城(京都)の東山泉涌寺のこと。平安初期に空海が創建した法輪寺を、平安中期に仙遊寺として再興し、さらに鎌倉時代初期に律宗の俊苒が泉涌寺として再興した寺院。当初は真言宗であったが、俊苒が再興したことにより律宗となり、現在は真言宗泉涌寺派総本山である。中興した俊苒は、十年以上も在宋して諸師参学していたことから、泉涌寺においても中国語も用いた修行生活が行なわれていた。また、皇室の菩提寺として知られ、「御寺泉涌寺」とも呼ばれる。

(3) 俊苒…律宗の我禅房俊苒(一一六六〜一二二七)のこと。肥後国(熊本県)飽田の人。正治元年(一一九九)に入宋し、径山の蒙庵元総に禅を、四明山の如庵了宏に律を、北峰宗印に天台教学を学んだ。建暦元年(一二二

一)に帰国。俊仍に帰依した宇都宮信房に仙遊寺を寄進され、泉涌寺と名を改めて再興した。不可棄法師、月輪大師ともいう。

〔史料20〕

(1) 大仏堂上禪師和尚：曹洞宗の道元(一一〇〇〜一二五三)のこと。山城(京都)の源氏。比叡山の公円について得度受戒し、園城寺公胤、建仁寺榮西に歴参し、比叡山を下りて建仁寺明全に参ずる。貞応二年に入宋し、曹洞宗の天童如浄の法を嗣ぐ。帰朝後、宇治(京都)興聖寺、越前(福井県)吉峰寺、越前永平寺の開山となる。

基本的には永平寺にあつたが、宝治元年(一二四六)八月二日に檀越の波多野義重の請により永平寺をはなれて鎌倉に行化した。鎌倉では北条時頼をはじめ多くの人に法を説き、翌年三月十三日に永平寺に戻っている。語録として『永平広録』十巻が存し、『正法眼蔵』をはじめとした多くの著述が伝わる。

(2) 大仏：越前(福井県)の大仏寺。後の永平寺のこと。寛元二年(一二四四)、波多野義重は越前志比庄の山中の古寺を復興し、曹洞宗の道元を開山として招いた。七月十八日に開堂した当初は、傘松峰大仏寺と称したが、後の寛元四年六月十六日に寺号を永平寺と、宝治二年(一二四八)一月一日に山号を吉祥山と改めた。曹洞宗の根本道場としてその門流によって守られ、現在も曹洞宗の大本山として知られる。

(3) 太白：太白峰の天童山景德禅寺のこと。既出「史料2」。

(4) 大光明蔵：光明蔵とも。諸仏の正しい悟りの世界を光明の蔵にたとえる。正法眼蔵に同じ。また、自己の本心を指すこともあり、無明を破り真如の光を本心が収蔵していることからこう呼ばれる。六十巻本『華嚴経』卷三十「仏不思議法品」に「一切諸仏、悉有最勝無上光明莊嚴、皆悉普放大光明蔵。一一光明、悉有無數妙光明網」以為眷属、普照十方諸仏世界、除滅一切世間闇冥(大正蔵九・五九三b)とある。

(5) 管中窺豹：くだの穴から豹をうかがい見る。ごく一部をみて全体を推し量ることのたとえ。『晋書』「王羲之伝」に「此郎亦管中窺豹、時見一斑」とあり、『世説新語箋疏』中卷上「方正」に「王子敬数歳時、嘗看諸門生樗蒲。見其勝負、因曰、南風不競。門生輩輕其小兒、迺曰、此郎亦管中窺豹、時見一斑。子敬頓目

曰、遠慚「苟奉情」、近愧「劉真長。遂弘衣而去」とあるに基づく故事成語。

- (6) 京中文武擾攘：北条時頼（一二二七～一二六三）は寛元四年（一二四六）三月二十三日に執権に就任した後、寛元の政変で九条頼経（一二一八～一二五六）を鎌倉から追放し、宝治元年（一二四七）六月五日の宝治合戦を経て、反対勢力を鎌倉から掃した。京都においては、九条頼経の父である九条道家も関東申次職を罷免されている。道隆から手紙が出されたのは、宝治元年秋（七～九月）のことであるから、「京中文武擾攘」とは宝治合戦を中心とする一連の騒動のことであつたと考えられる。蘭溪道隆は、この騒動が収まるまで上京するのを控えていたようである。

- (7) 博多円覚寺：博多の円覚寺。既出「史料2」。

- (8) 詮恵：曹洞宗の詮恵のこと。近江（滋賀県）の人。道元の法を嗣ぐ。山城（京都）永興寺の開山となる。道元の『正法眼蔵』の注釈書である『正法眼蔵御聞書』十巻を著す。弟子に経家があり、詮恵の『御聞書』を根拠に注抄を加えた『正法眼蔵抄』を撰述した。

- (9) 恵達：曹洞宗の慧達のこと。道元の弟子の一人。『正法眼蔵法華転法華』の奥書によれば、「仁治二年辛丑夏安居日、これをかきて慧達禅人にさつく。これ出家修道を感喜するなり。たた鬢髪をそる、なほ好事なり。かみをそりまたかみをそる、これ真出家児なり」とあり、仁治二年（一二四一）に道元がその出家修道に歓喜して、『正法眼蔵法華転法華』一巻を授けたことが知られる。「道元書状」によれば、寛元四年（一二四六）に詮恵と慧達が博多円覚寺を訪れて、道隆よりこの書状を預かつたこととみられる。

- (10) 曹溪：六祖慧能（六三八～七二三）のこと。既出「史料10」。

- (11) 今年八月：『永平広録』卷三に「宝治二年（戊申）三月十四日上堂。云、山僧昨年八月初三日、出山赴相州鎌倉郡、為檀那俗弟子説法。今年今月昨日帰寺、今朝陞座」とあり、道元が永平寺を出発したのが宝治元年（一二四七）八月三日であることが知られる。

- (12) 檀越：永平寺檀越の波多野義重のこと。鎌倉中期の人で六波羅評定衆を勤めた。仁治三年（一二四二）十二月

十七日六波羅蜜寺の近くで道元の説法を聞き、以後、熱心な信者となる。寛元二年（一二四四）七月には所領の越前国志比荘の地に道元を招き、大仏寺（のち永平寺と改称）の開基となる。宝治元年（一二四七）に道元を鎌倉に招いた檀越であり、鎌倉にあつて道元を接待したと思われる。宝治元年（一二四七）十一月の鶴岡放生会に際して先陣随兵の筆頭に名がみえるので、时期的にも一致する。

(13) 一日三秋：一日会わないと、三年もの間会っていないような思慕の気持ちを持つこと。まちこがれること。

『詩経』「王風」「採蓮」の「彼采蕭兮，一日不見，如三秋兮」に基づく。

〔史料21〕

(1) 円爾：東福寺の円爾のこと。既出〔史料9〕。

(2) 径山：径山興聖万寿寺のこと。既出〔史料13〕。

(3) 先師仏鑑：無準師範のこと。既出〔史料8〕。

(4) 大檀守殿：建長寺大檀越の相模守の北条時頼のこと。既出〔史料2〕。

(5) 靈山金言：靈鷲山で釈尊が国王大臣に仏法の護持を付嘱したことを指す。たとえば『虚堂和尚語録』卷三に「黄面老漢、末上放乖、向_二靈山会上万百衆前、以_二佛法付_一嘱国王大臣有力檀那」（大正蔵四七・一〇〇四b）などと禪録にしばしば説かれている。典拠としては南本『大般涅槃經』卷三の「如来今以_二無上正法付_一嘱諸王大臣宰相比丘比丘尼優婆塞優婆夷」（大正蔵一二・六二一a）があるが、国王大臣に限定されていない。より近い形としては偽経である『大梵天王問仏決疑經』巻上に「我滅後法付_二嘱汝国王大臣。能護持、令_二仏意安_一。時諸王言、唯然世尊、伏奉尊勅」（統蔵八七・三〇五c）とある。

(6) 禅定殿下：九条道家（一一九三〜一二五二）のこと。左大将九条良経の長男で、関白兼実の孫として生まれた。母は一条能保の娘で源頼朝の姪。九条良経の跡を継ぐ。摂政・関白を勤めた。北条時頼は宮騒動によって寛元四年（一二四六）七月に前將軍頼経を京都に送還し、十月には頼経の父で將軍派の背後にいた九条道家の関東申次職を罷免している。さらに建長三年（一二五二）には頼嗣の周辺に幕府顛覆の陰謀がおこり、翌四年、頼嗣は將

軍の地位を追われた。道家にもこれに関与した嫌疑がかかるが、同年二月二十一日に逝去してしまった。

(7) 豹窺：管中窺豹のこと。既出「史料20」。

(8) 刻舟：刻舟覓劍、刻舟求劍、刻舟尋劍ともいう。舟に目印を刻み劍を求める。『呂氏春秋』「察今」に見られる寓話で、「楚人有_レ涉_レ江者、其劍自_二舟中_一墜_三於水_一。遽契_二其舟_一曰、是吾劍之所_二從_一墜_二也。舟止、從_二其所_一契者、人_レ水求_レ之。舟已行矣、而劍不_レ行。求_レ劍若_レ此、不_二亦惑_一乎」とある。河を渡る際に舟中から劍を落とした者が、舟に目印を刻み、それを頼りに劍を探したという話。見当違いの努力をするたとえ。時勢の変化に気づかず、旧習を固守する愚者にたとえる。

(9) 宋朝：趙匡胤（太祖）が建てた宋の国。北宋期と南宋期に分けられるが、ここでは南宋を指す。南宋代は、建炎元年（一一二七）から禪興二年（一二七九）までの百五十三年間に栄えた王朝。靖康の変で北宋が金に攻められ、都を汴京（河南省開封市）から臨安府（浙江省杭州市）に遷し、徽宗の子の高宗が宋朝を再建した。その後、元（蒙古）に滅ぼされるまでをいう。禪宗は唐代末期から発展し、北宋代には政府との関わりを深め、南宋代の寧宗の時には五十利制度が制定された。このような政府との密接な関係により、禪宗は様々な特権を得て繁栄した。

(10) 百丈規式：『百丈清規』のこと、唐代の百丈懷海によって制定されたとされる最初の清規。清規とは禪宗独自の規律のこと。『百丈清規』は唐代・宋代にはすでに散逸したとされているが、実際には百丈山で形成された修行生活が後世の「清規」の基となったらしく、これを百丈懷海にまで遡ったものらしい。元代の東陽德輝が勅命によって再編した『勅修百丈清規』が存するため、区別のために『百丈古清規』とも称される。

(11) 普門寺：京都東山の東福寺に存した円爾の居所である普門寺のこと。京都市東山の東福寺は嘉禎二年（一二三六）に九条道家（一一九三〜一二五二）の発願によって建立されはじめたが、巨大な伽藍の建立には時間がかかった。そのため、寛元四年（一二四六）に普門院（普門寺）を建立して、円爾を住まわせた。東福寺が完成するのが建長七年（一二五五）になるので、それまでの期間は円爾は普門寺を中心として活動していた。後には十利

の一つとなるが、現在は廃寺となり、名称のみが東福寺常楽庵に残っている。

〔史料22〕

(1) 三応声中…南陽慧忠(六七五・七七五)の「国師三喚」の公案を指すか。『景德伝灯録』卷五の南陽慧忠章に

「日喚三侍者、侍者応諾。如是三召、皆応諾。師曰、将謂吾孤負汝、却是汝孤負吾。」(大正蔵五一・二四四a)とあり、『無門関』第十七則「国師三喚」の本則に「国師、三喚三侍者、侍者三応。国師云、将謂吾辜負汝、元来却是汝辜負吾。」(大正蔵四八・二九五a)とある。

(2) 飯布…果州飯布のこと。『人天眼目』「禅林方語新增」に「果州飯布」(大正蔵四八・三三二b)とある。「果州飯布」は、『宗門方語』に「漏過不少」(『禅語辞書類聚』一、禅文化研究所、一六頁、無著道忠「禅林方語」に「漏過不少」(『禅語辞書類聚』一、禅文化研究所、五六頁)とある。少なからぬもれ、手ぬかり、の意。ただし、『希叟和尚広録』「真贊」に「嚴冷面皮、軟頑腸肚。对同参唱菩薩蠻、与行家説無義語。縦着鷹搏物機、關獅子翻身路。医衲僧病、下天王補心円。移觀史宮、換長庚大火聚。雖潛行密用处、鵲眼迷蹤。点檢将来、也是果州飯布」(統蔵一二二・九〇a)とあるように、希叟紹曇は果州出身の別山祖智を「果州飯布」と称していることが知られる。果州の出身の別山祖智に、「果州飯布」という言葉を当てたのであろう。希叟紹曇も物初大観も「果州飯布」に基づく言葉を用いていることから、「果州飯布」は別山祖智が自称していたか、少なくとも別山祖智を表す呼称としても用いられていたとみられる。

〔史料24〕

(1) 寿福…鎌倉の龜谷山寿福寺のこと。既出「史料15」。

(2) 善光寺…信州(長野県長野市)の定額山善光寺のこと。『扶桑略記』は欽明天皇十三年(五五二)に百济国から渡来した阿弥陀三尊像を、推古天皇十年(六〇二)勅命により信濃国に移したと伝え、善光寺古縁起などでは皇極天皇元年(六四二)の建立を記すが具体的な創建年時は不明。古くから特定の宗派に属することなく信仰を集めた。鎌倉時代に善光寺の再建が盛んに行なわれ、これをきっかけに中世を通じて善光寺信仰が弘まった。

(3) 建仁羅漢事…建仁寺の羅漢像のことか、あるいは羅漢供などの法要を指すのかは不明。ただし、蘭溪道隆は、建長寺所蔵『福山五講式』所収「羅漢講式」を著しているため、「与法」とあることからすれば、この「羅漢講式」などを指しているのかもしれない。

(4) 建仁…京都東山の建仁寺のこと。建仁二年（一一〇二）に明庵栄西を開山とし、源頼家（一一八二～一二〇四）によって開創された。はじめは比叡山の別院として台密禅兼修の道場であったが、弘長二年（一二六二）に蘭溪道隆が住持するに及んで、本格的な禅宗道場としての態様を持つようになった。後に京都五山の第三位になる。

〔史料25〕

(1) 禅興…鎌倉の禅興寺のこと。既出〔史料5〕。

(2) 鶯具衫子…鶯臭布衫のこと。くさい体臭のついた衣。『碧巖録』第十二則「洞山麻三斤」頌の評唱に、「拈却膩脂帽子、脱却鶯臭布衫」（大正蔵四八・一五三b）とある。

〔史料26〕

(1) 万寿…鎌倉の乾明山万寿寺のこと。既出〔史料9〕。

(2) 信州安楽…信州の崇福山安楽寺のこと。既出〔史料8〕。

(3) 無準…無準師範のこと。既出〔史料9〕。

